

De - Reference

Mar. 19. 99

Z Kawase, Kazuma
186 Kokatsujihan no kenkyū
J3K3
Atlas

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

古活字版之研究

附圖

古族字彙之研究

附圖

Z
186
J3K3
Atlas



附圖凡例

一 圖版は本文の對照に便する爲、本文の順序に従つて適宜に取捨を加へ、六百圖を擇んで編纂したが、卷頭には古活字版刊行に於ける勅版の意義を思ひ、編次を改めて神典たる日本書紀神代卷(圖書寮尊藏の一本)を掲げた。

なほ別系列をなす吉利支丹版は卷末に附載し、六百圖の外とした。

一本附圖は、本文印刷終了後に印刷を行つた爲、所收書籍の所藏者に變更を見るに至つたものも少くないが、凡て原の儘に従つた。本文の注記と異なる別本を收めたものに就いては、別に本目次の末に附記表示した。

一 各頁圖版の下部に羅馬數字を以て本文參照丁數を附註し對照に便したが、別に卷末に圖版書名索引をも附載した。

一本附圖所收の圖版は、二三の極めて小數なる例外を除き、全部本書の爲に新たに撮影を行つたものである。貴重なる書籍の寫眞撮影を許されたる各位に對し、篤く感謝の意を表する。一 圖版記名に當り、左記括弧内の略稱を用ひた事を御諒承戴きたい。なほ安田文庫は「安田」と略稱した。

圖書寮

内閣文庫(内閣)

帝國圖書館(帝國圖)

東京文理科大學(東京文理大)

東洋文庫(東洋)

蓬左文庫(蓬左)

足利學校遺蹟圖書館(足利)

岩瀬文庫(岩瀬)

神宮文庫(神宮)

京都帝國大學(京大)

陽明文庫(陽明)

大谷大學(大谷大)

阿波國文庫(阿波)

太宰府神社神庫(太宰府)

石井光雄氏積翠文庫(石井)

大島雅太郎氏青谿書屋(大島)

玉井幸助氏(玉井)

林若吉氏(林)

東京帝國大學(東大)

早稻田大學(早大)

靜嘉堂文庫(靜嘉堂)

東北帝國大學(東北大)

刈谷町立圖書館(刈谷)

岐阜師範學校(岐阜師)

叡山文庫(叡山)

久原文庫(久原)

京都府立圖書館(京都府圖)

東大寺佛教圖書館(東大寺)

九州帝國大學(九大)

丸善株式會社(丸善)

故内野五郎三氏皎亭文庫(内野)

佐々木信綱氏(佐々木)

德富猪一郎氏成實堂文庫(成實堂)

松井簡治氏(松井)

森潤三郎氏(森)

頼原退藏氏(頼原)

新村出氏(新村)

鈴鹿三七氏(鈴鹿)

吉澤義則氏(吉澤)

飯島幡司氏(飯島)

正宗敦夫氏(正宗)

光藤珠夫氏(光藤)

小山弘房氏(小山)

猪熊信男氏(猪熊)

龜田次郎氏(龜田)

杉浦三郎兵衛氏(杉浦)

故谷村一太郎氏(谷村)

親王院水原堯榮氏(親王院)

故高木利太氏高木文庫(高木)

栗田元次氏(栗田)

田村專一郎氏(田村)

神田喜一郎氏(神田)

昭和十二年九月一日

川 瀬 一 馬 識



Digitized by the Internet Archive
in 2011 with funding from
University of Toronto

古活字版之研究附圖 目次

扉

附圖凡例……………一

目次……………五

圖版目次(第一圖至第六〇七圖)……………七

圖版

附圖變更訂正表……………一

本文正誤補訂(追記)……………三

附圖所收書目五十音別索引……………七

古活字版の研究附圖目次

一 慶長勅版 日本書紀神代卷	卷首	圖書寮尊藏	一
二 慶長勅版 日本書紀神代卷	刊語識語	神宮文庫藏	二
三 慶長勅版 日本書紀神代卷	見返木記	神宮文庫藏	二
四 慶長勅版 日本書紀神代卷	題簽	靜嘉堂文庫藏	二
五 慶長勅版 勸學文	卷首刊記	早稻田大學藏	三
六 慶長勅版 錦繡段	公首刊記	東洋文庫藏	三
七 慶長勅版 大學・中庸	卷首見返	安田文庫藏	四
八 慶長勅版 論語・孟子	卷首	安田文庫藏	四
九 慶長勅版 孝經	見返・卷首	帝國圖書館藏	五
一〇 慶長勅版 職原抄	見返卷首	圖書寮尊藏	五
一一 慶長勅版 中庸・禮記・野紙	（泰重記紙背）	圖書寮尊藏	六
一二 元和勅版 皇朝事實類苑	刊語	安田文庫藏	六

一三 元和勅版 皇朝事實類苑	卷首	安田文庫藏	七
一四 中臣菰	（慶安塾版下稿下）	卷末	猪熊信男氏藏
一五 伏見宮家御板職原抄	卷首識語	帝國圖書館藏	八
一六 伏見版 孔子家語	卷首	圖書寮尊藏	九
一七 伏見版 孔子家語	刊記	京都府立圖書館藏	一〇
一八 伏見版 孔子家語	刊記（裏版）	太宰府神社藏	一〇
一九 伏見版 貞觀政要	卷首刊語	安田文庫藏	一〇
二〇 伏見版 六韜	慶長四年刊	卷首刊語	阿波國文庫藏
二一 伏見版 六韜	慶長四年刊	刊語	阿波國文庫藏
二二 伏見版 三略	慶長五年刊	卷首	足利學校遺蹟圖書館藏
二三 伏見版 三略	慶長五年刊	刊語	足利學校遺蹟圖書館藏
二四 伏見版 六韜	慶長五年刊	刊語	田村專一郎氏藏

- 二五 伏見版六韜(慶長九年刊) 卷首・刊語 高本文庫藏 一二
- 二六 伏見版周易易 卷首・刊語 東洋文庫藏 一三
- 二七 伏見版東鑑目錄末・卷首 東京文理科大学藏 一三
- 二八 伏見版七書卷首・刊語 安田文庫藏 一四
- 二九 伏見版七書(異版) 卷首・刊語 安田文庫藏 一四
- 三〇 富春堂版太平記(慶長七年刊) 序首・卷首 成書堂文庫藏 一五
- 三一 富春堂版太平記(慶長八年刊) 刊記・卷首 安田文庫藏 一五
- 三二 駿河版大藏一覽集卷首 叡山文庫藏 一六
- 三三 駿河版群書治要卷首 安田文庫藏 一七
- 三四 秀賴版帝鑑圖說卷首 安田文庫藏 一七
- 三五 秀賴版帝鑑圖說挿畫・刊語 安田文庫藏 一七
- 三六 天台四教儀集解(文祿四年刊) 卷首・刊記 帝國圖書館藏 一八
- 三七 法華玄義序(文祿四年刊) 卷首・刊記 安田文庫藏 一八
- 三八 甫庵版補註蒙求(文祿五年刊) 刊語 安田文庫藏 一九
- 三九 甫庵版補註蒙求卷首 安田文庫藏 二〇
- 四〇 甫庵版十四經發揮(慶長元年刊) 刊記 安田文庫藏 二〇
- 四一 甫庵版十四經發揮郝圖 安田文庫藏 二〇
- 四二 甫庵版醫學正傳序首 圖書寮尊藏 二〇
- 四三 甫庵版十四經發揮卷首 安田文庫藏 二一
- 四四 甫庵版醫學正傳表紙・卷首 圖書寮尊藏 二二
- 四五 甫庵版東垣十書卷首・末記 安田文庫藏 二三
- 四六 甫庵版醫學正傳刊語 圖書寮尊藏 二三
- 四七 年代紀略卷首 附(參考)整版卷末 東洋文庫藏 二四
- 四八 職原抄(慶長十三年刊) 卷首 單散二種 東洋文庫藏 二四
- 四九 古文孝經(慶長七年刊) 刊語 高野山寶龜院藏 二五
- 五〇 古文孝經(慶長七年刊) 卷首 東洋文庫藏 二五
- 五一 書札禮事(慶長十七年刊) 卷首・刊記 高本文庫藏 二五
- 五二 要法寺版法華傳記(慶長五年刊) 卷首・刊語 帝國圖書館藏 二六
- 五三 要法寺版倭漢合運圖(慶長五年刊) 卷首・刊語 帝國圖書館藏 二六
- 五四 要法寺版倭漢合運圖(慶長五年刊) 卷首・刊語 栗田元次氏藏 二六

五五	要法寺版沙石集	(慶長十年刊) 卷首・刊記	成實堂文庫藏 二七
五六	要法寺版沙石集	(無刊記別版) 首	京都帝國大學藏 二七
五七	要法寺版太平記	(慶長十年刊) 刊記	成實堂文庫藏 二七
五八	直江版文	選 (慶長十二年刊) 卷首	高本文庫藏 二八
五九	直江版文	選 原題簽印記	高本文庫藏 二九
六〇	直江版文	選 卷末異版	安田文庫藏 二九
六一	文	選 (寛永二年刊) 刊記	安田文庫藏 二九
六二	要法寺版論	語 (整版) 卷首・刊記	高本文庫藏 三〇
六三	要法寺版論	語 (亂版) 右活版左整版	安田文庫藏 三〇
六四	大	學 (正運刊) 卷首	高本文庫藏 三一
六五	中	庸 (正運刊) 刊記	高本文庫藏 三一
六六	中	庸 (正運刊異版) 卷首	東洋文庫藏 三一
六七	中	庸 (正運刊異版) 刊記	東洋文庫藏 三一
六八	要法寺版天台四教儀集註	(慶長十八年刊) 卷首・刊記	叡山文庫藏 三二

六九	本國寺版法華疏讀	(寛永三年刊) 卷首・刊記	叡山文庫藏 三二
七〇	本國寺版佛祖歷代通載	(慶長十年刊) 刊記	成實堂文庫藏 三三
七一	本能寺版法華傳記	(慶長十九年刊) 刊記	叡山文庫藏 三四
七二	本能寺版百喻經	(寛永三年刊) 刊記	安田文庫藏 三四
七三	毛詩抄	(本能寺前町版) 刊記	東京文理科大学藏 三四
七四	日本書紀抄	(本能寺前町版) 刊記	高本文庫藏 三四
七五	宗存版大藏目錄	(慶長十年刊) 卷末	東大寺佛教圖書館藏 三五
七六	宗存版源信枕雙昏	(元和七年刊) 卷末	東洋文庫藏 三五
七七	西本願寺版法界次第	卷首・刊記	成實堂文庫藏 三六
七八	寶珠院版教誡新學比丘行護律義	(慶長九年刊) 卷首・刊記	神田喜一郎氏藏 三六
七九	元亨釋書	(慶長十年下村生藏刊) 卷首・刊記	安田文庫藏 三七
八〇	中	庸 (下村生藏刊) 卷首・刊記	東洋文庫藏 三七
八一	平家物語	(下村時房刊) 卷八首 (初版・再版)	成實堂文庫藏 三八
八二	一條清和院版俱舍論頌疏	(慶長十六年刊) 卷首・刊記	叡山文庫藏 三八

八三 一條清和院版華嚴五教章(慶長十七年刊)刊記

東大寺佛教圖書館藏 三九

八四 心蓮院版倭玉篇 卷首 安田文庫藏 三九

八五 寶藏寺版科註妙法蓮華經(寛永三年刊)刊記

久原文庫藏 三九

八六 心蓮院版倭玉篇(異版) 卷首 安田文庫藏 三九

八七 妙心寺版雲門匡眞禪師廣錄(慶長十八年刊)刊記

安田文庫藏 四〇

八八 高臺寺版禪林類聚(慶長十八年刊) 木本 高木文庫藏 四〇

八九 横尾版脩華嚴奥旨妄盡還源觀 寛永八年刊 刊記

安田文庫藏 四〇

九〇 叡山版科註妙法蓮華經(慶長十一年刊) 成實堂文庫藏 四〇

九一 叡山版科註天台四教儀(慶長八年刊) 卷首刊記 叡山文庫藏 四一

九二 叡山版守護國界章(元和三年刊) 刊記 叡山文庫藏 四一

九三 叡山版集解要文(寛永二年刊) 卷末 叡山文庫藏 四一

九四 叡山版授決集(元和四年刊) 叡山文庫藏 四一

九五 叡山版授決集(元和四年刊異版) 刊記 成實堂文庫藏 四二

九六 叡山版天台名目類聚鈔(元和四年刊) 卷首刊記 叡山文庫藏 四二

九七 叡山版六帖要文(寛永九年刊) 卷首刊記 叡山文庫藏 四二

九八 書寫山快倫版法華經文字聲韻音調篇集

(慶長十八年刊) 卷首刊記 高木文庫藏 四二

九九 高野版大日經開題(慶長十五年刊) 卷首刊記 高野山親王院藏 四四

一〇〇 高野版王澤不渴抄(元和十年刊) 淨善刊 木本 成實堂文庫藏 四四

一〇一 高野版開心鈔(寛永元年刊) 刊記 高野山親王院藏 四四

一〇二 高野版開心鈔(寛永四年淨善刊) 刊記 東洋文庫藏 四五

一〇三 高野版心月輪秘釋(寛永十一年刊) 刊記 高野山親王院藏 四五

一〇四 高野版古筆拾葉抄(寛永十二年刊) 卷首刊記 叡山文庫藏 四五

一〇五 高野版諸尊表白鈔(寛永十一年刊) 刊記 高野山親王院藏 四六

一〇六 元興寺版行事鈔(慶長十二年刊) 刊記 律宗勸學院藏 四六

一〇七 大巖寺版安樂集(慶長十八年刊) 刊記 叡山文庫藏 四六

一〇八 大巖寺版選擇傳弘決疑鈔(慶長十四年刊) 卷首刊記

寂山文庫藏 四七

一〇九 大巖寺版選擇傳弘決疑鈔(慶長十九年刊) 卷首刊記

安田文庫藏 四七

一一〇 三州善宗寺版阿彌陀秘直談鈔(元和七年刊) 卷首刊記

寂山文庫藏 四八

一一一 下總法輪寺版新學行要鈔(元和八年刊) 刊記

成實堂文庫藏 四八

一二二 江戸版助顯唱導文集(元和六年刊) 刊記卷首

寂山文庫藏 四九

一二三 天海版維摩詰所說經(寬永十五年刊) 卷首刊記

東洋文庫藏 四九

一二四 元亨釋書(慶長四年如庵刊) 卷首刊記 成實堂文庫藏 五〇

一五 徒然草壽命院抄(慶長九年) 卷首刊記 內野氏岐亭文庫藏 五一

一六 延壽撮要(十行本) 卷首 成實堂文庫藏 五一

一七 延壽撮要(十一行本) 卷首 安田文庫藏 五一

一八 延壽撮要(意齋道啓刊) 卷首刊記 森潤三郎氏藏 五一

古活字版の研究附圖目次

一一九 難經本義(慶長十二年刊) 下卷首刊記 安田文庫藏 五二

一二〇 新鐫雲林神效(慶長八年) 卷首刊記 杉浦三郎兵衛氏藏 五三

一二一 新增醫方大成發提(慶長八年) 卷首刊記 安田文庫藏 五三

一二二 素問入式運氣論奧(慶長十六年) 刊記 久原文庫藏 五三

一二三 和名集並異名製濟記(元和九年梅壽刊) 刊記

大島雅太郎氏藏 五三

一二四 格致餘論鈔(寬永二年梅壽刊) 刊記 陽明文庫藏 五四

一二五 儒醫精要(慶長十九年紀州) 刊記 成實堂文庫藏 五四

(補遺) 證類本草叙例(文祿五年如庵宗乾刊) 栗田元次氏藏 五四

一二六 泰定養生論(寬永五年刊) 卷首刊記 久原文庫藏 五五

一二七 難經捷徑(寬永十四年刊) 卷首刊記 帝國圖書館藏 五五

一二八 天台四教儀集註(慶長五年刊) 卷首刊記 高本文庫藏 五六

一二九 日蓮上人註書讀(慶長六年刊) 卷首刊記 寂山文庫藏 五六

一三〇 日蓮上人註書讀(慶長十二年刊) 刊記 成實堂文庫藏 五七

一三一 五家正宗贊(花園一枝軒刊) 刊記 成實堂文庫藏 五七

古活字版の研究 附圖目次

一三二 五家正宗贊 <small>(中村長兵衛附刊)</small> <small>(吳歌三種) 刊記</small>	杉浦三郎氏藏 五七
一三三 大乘起信論 <small>(慶長十七年刊)</small> <small>卷首 刊記</small>	谷村一太郎氏藏 五八
一三四 無量壽經疏 <small>(慶長十九年刊)</small> <small>卷首 刊記</small>	寂山文庫藏 五八
一三五 遍照發揮性靈集 <small>(慶長十九年刊)</small> <small>卷首 刊記</small>	安田文庫藏 五九
一三六 黑谷上人語燈錄 <small>(寬永三年刊)</small> <small>刊記</small>	成簀堂文庫藏 五九
一三七 南浦文集 <small>(寬永二年刊)</small> <small>刊記</small>	安田文庫藏 五九
一三八 元亨釋書 <small>(元和三年刊)</small> <small>卷首 刊記</small>	成簀堂文庫藏 六〇
一三九 鹽山和泥合水集 <small>(寬永三年刊)</small> <small>卷首 刊記</small>	陽明文庫藏 六〇
一四〇 夢中間答集 <small>(大字本)</small> <small>卷首</small>	靜嘉堂文庫藏 六一
一四一 夢中間答集 <small>(小字本第一種)</small> <small>卷首</small>	高本文庫藏 六一
一四二 夢中間答集 <small>(小字本第二種)</small> <small>卷首</small>	安田文庫藏 六一
一四三 夢中間答集 <small>(小字本第三種)</small> <small>卷首</small>	石井光雄氏藏 六一
一四四 和風安心抄 <small>卷首</small>	大谷大學藏 六二
一四五 廿三問答 <small>卷首</small>	安田文庫藏 六二
一四六 論語抄 <small>(單邊十八行本)</small> <small>卷首</small>	成簀堂文庫藏 六二
一四七 論語抄 <small>(雙邊十八行本)</small> <small>卷首</small>	東京文理科大学藏 六二
一四八 尚書抄 <small>(寬永元年刊)</small> <small>刊記</small>	大島雅太郎氏藏 六二
一四九 大學抄 <small>(雙邊十二行本)</small> <small>卷首</small>	東北帝國大學藏 六三
一五〇 大學抄 <small>(無邊無界本)</small> <small>卷首</small>	久原文庫藏 六三
一五一 中庸抄 <small>(十六行本)</small> <small>卷首</small>	久原文庫藏 六三
一五二 中庸抄 <small>(寬永二年刊)</small> <small>刊記</small>	成簀堂文庫藏 六四
一五三 中庸抄 <small>(十三行本)</small> <small>卷首</small>	九州帝國大學藏 六四
一五四 莊子抄 <small>卷首</small>	高本文庫藏 六四
一五五 蒙求抄 <small>卷首</small>	圖書寮藏 六四
一五六 長恨歌抄 <small>(雙邊十一行本)</small> <small>卷首</small>	安田文庫藏 六五
一五七 長恨歌抄 <small>(單邊十二行本)</small> <small>卷首</small>	成簀堂文庫藏 六五
一五八 四河入海 <small>卷二 卷首</small>	靜嘉堂文庫藏 六五
一五九 古文眞寶抄 <small>(元和三年刊)</small> <small>刊記</small>	高本文庫藏 六五
一六〇 三體詩素隱抄 <small>(寬永三年刊)</small> <small>卷二末 刊記</small>	東洋文庫藏 六六
一六一 周易 <small>(正運刊)</small> <small>刊記</small>	成簀堂文庫藏 六六

一六二 周	易(無刊記本) 卷首	靜嘉堂文庫藏 六六
一六三 周易傳義	(寛永二年刊) 刊記	久原文庫藏 六六
一六四 尚	書(第一種本) 卷首	久原文庫藏 六七
一六五 尚	書(第二種本) 卷首	陽明文庫藏 六七
一六六 尚	書(第三種本) 卷首	高本文庫藏 六七
一六七 尚	書(第四種本) 卷首	神宮文庫藏 六七
一六八 毛	詩(第二種本(イ)版) 卷首	靜嘉堂文庫藏 六八
一六九 毛	詩(第二種本(ロ)版) 卷首	高本文庫藏 六八
一七〇 毛	詩(第一種本) 卷首	靜嘉堂文庫藏 六八
一七一 春秋經傳集解	(慶長十七年以前刊) 卷末	足利學校遺蹟圖書館藏 六八
一七二 禮	記(第一種本) 卷十三首	高本文庫藏 六九
一七三 禮	記(第二種本) 卷十三首	高本文庫藏 六九
一七四 春秋經傳集解	(慶長中刊(イ)種) 卷首	成書堂文庫藏 六九
一七五 春秋經傳集解	(慶長中刊(ロ)種) 卷首	成書堂文庫藏 六九
一七六 古文孝經	(無刊記本第一種) 卷首	安田文庫藏 七〇
一七七 古文孝經	(無刊記本第二種) 卷首	安田文庫藏 七〇
一七八 古文孝經	(無刊記本第三種) 卷首	成書堂文庫藏 七〇
一七九 孝經大義	卷首	東洋文庫藏 七〇
一八〇 論	語(慶長十四年刊(イ)種) 刊記	安田文庫藏 七一
一八一 論	語(慶長十四年刊(ロ)種) 刊記	安田文庫藏 七一
一八二 論	語(無刊記本第二種) 卷首	圖書寮尊藏 七一
一八三 論	語(無刊記本第三種) 卷首	安田文庫藏 七一
一八四 論	語(慶長八年以前刊) 識語	靜嘉堂文庫藏 七二
一八五 孟	子(正運刊) 卷首・刊記	安田文庫藏 七三
一八六 孟	子(下村生藏刊) 卷三首	太宰府神社藏 七三
一八七 孟	子(第三種本) 卷首	靜嘉堂文庫藏 七三
一八八 孟	子(第四種本) 卷首	靜嘉堂文庫藏 七四
一八九 孟	子(第五種本) 卷首	圖書寮尊藏 七四
一九〇 增廣龍龜手鑑	卷首	高本文庫藏 七四
一九一 古今韻會舉要	(無罪本) 卷首	神宮文庫藏 七四

一九二 古今韻會舉要(有界本(イ)種) 卷首	東洋文庫藏 七五
一九三 古今韻會舉要(有界本(ロ)種) 卷首	久原文庫藏 七五
一九四 說文解字篆韻譜 下卷首	圖書寮尊藏 七五
一九五 韻鏡(慶長十三年刊) 刊記	圖書寮尊藏 七五
一九六 史記(傳嵯峨本) 卷首	安田文庫藏 七六
一九七 史記(無界八行本) 卷首	成賢堂文庫藏 七六
一九八 史記(無界九行本) 卷首	成賢堂文庫藏 七六
一九九 後漢書 卷首	高本文庫藏 七六
二〇〇 十八史略 卷首	東洋文庫藏 七六
二〇一 貞觀政要(元和七年刊) 刊記	高本文庫藏 七六
二〇二 十九史略通考(東福寺版) 卷首・刊記(尊藏)	東洋文庫藏 七七
二〇三 君臣圖像 下卷挿圖・卷首	高本文庫藏 七八
二〇四 孔子通紀 卷首	安田文庫藏 七八
二〇五 開元天寶遺事 卷首	東洋文庫藏 七八
二〇六 小學集說 卷一本	久原文庫藏 七九
二〇七 晦庵先生語錄類要(正德三年刊) 刊記	安田文庫藏 七九
二〇八 施氏七書講義 卷首	安田文庫藏 七九
二〇九 殘儀兵的 卷首	高本文庫藏 七九
二一〇 新增鷹鴒方 卷首	安田文庫藏 八〇
二一一 祥刑要覽(元和中刊) 卷首	東洋文庫藏 八〇
二一二 祥刑要覽(寛永元年刊) 刊記	久原文庫藏 八〇
二一三 棠陰比事 卷首	安田文庫藏 八一
二一四 簞簞內傳金烏玉兔集(慶長十一年刊) 刊記	久原文庫藏 八一
二一五 簞簞內傳金烏玉兔集(寛永五年刊) 刊記	安田文庫藏 八一
二一六 簞簞內傳金烏玉兔集(寛永六年刊) 刊記	阿波國文庫藏 八一
二一七 邵康節先生心易梅花數(寛永二年刊) 刊記	久原文庫藏 八一
二一八 冷齋夜話(寛永二十年刊) 卷首・刊記	成賢堂文庫藏 八二
二一九 新刊鶴林玉露 卷首	安田文庫藏 八二
二二〇 新編事文類聚 卷首	高本文庫藏 八二
二二一 蒙求(九行本(イ)種) 中卷首	安田文庫藏 八三

- 二二二 蒙 求(九行本(口)種) 中卷首 高本文庫藏 八三
- 二二三 蒙 求(十四行本) 中卷首 高本文庫藏 八三
- 二二四 蒙 求(無注本) 卷首 帝國圖書館藏 八三
- 二二五 韻府群玉(寛永二年刊) 刊記 帝國圖書館藏 八四
- 二二六 氏族大全(元和五年刊) 刊記 安田文庫藏 八四
- 二二七 剪燈新話句解 卷首 高本文庫藏 八四
- 二二八 新編剪燈餘話 卷首 大島雅太郎氏藏 八四
- 二二九 古注千字文(慶長十三年刊) 刊記 高本文庫藏 八五
- 二三〇 古注千字文(慶長中刊無刊記本) 卷末 高本文庫藏 八五
- 二三一 古注千字文(元和三年刊) 刊記 安田文庫藏 八五
- 二三二 古注千字文(元和寛永中刊) 卷首 安田文庫藏 八五
- 二三三 列子廬齋口義 卷首 成笈堂文庫藏 八六
- 二三四 莊子廬齋口義(七行本) 卷首 栗田元次氏藏 八六
- 二三五 莊子廬齋口義(十行本) 卷首 東洋文庫藏 八六
- 二三六 老子經 卷首 成笈堂文庫藏 八六
- 二三七 老子廬齋口義(九行本) 卷首 帝國圖書館藏 八七
- 二三八 老子廬齋口義(八行本) 卷首 成笈堂文庫藏 八七
- 二三九 老子廬齋口義(七行本) 卷首 東洋文庫藏 八七
- 二四〇 昌黎先生文集 卷首 成笈堂文庫藏 八七
- 二四一 白氏文集 卷首校語 安田文庫藏 八八
- 二四二 胡曾詩註 中卷首 高本文庫藏 八八
- 二四三 東坡先生詩 卷首 高本文庫藏 八八
- 二四四 長恨歌傳(第二種本) 卷首 安田文庫藏 八九
- 二四五 長恨歌傳(第三種本) 卷首 京都府立圖書館藏 八九
- 二四六 長恨歌傳(第四種本) 卷首 安田文庫藏 八九
- 二四七 長恨歌傳(第六種本) 卷首 高本文庫藏 八九
- 二四八 山谷詩集注(八行大字本) 卷首 安田文庫藏 九〇
- 二四九 山谷詩集注(第三種本) 卷首 久原文庫藏 九〇
- 二五〇 山谷詩集注(第四種本) 卷首 東洋文庫藏 九〇
- 二五一 山谷詩集注(無注本(八助衛門刊) 卷首 陽明文庫藏 九〇

- 二五二 江湖風月集略註(慶元) 卷首 京都府立圖書館藏 九一
二五三 江湖風月集略註(寬永六年刊) 刊記 東洋文庫藏 九一
二五四 古文眞寶前集 卷首 成簫堂文庫藏 九一
二五五 古文眞寶後集(慶長十四年刊) 刊記 靜嘉堂藏 九一
二五六 古文眞寶後集(第三種本) 卷首 高木文庫藏 九二
二五七 古文眞寶後集(第四種本) 卷首 東洋文庫藏 九二
二五八 古文眞寶後集(第五種本) 卷首 靜嘉堂文庫藏 九二
二五九 古文眞寶後集(第六種本) 卷首 靜嘉堂文庫藏 九二
二六〇 百聯抄解 卷首 陽明文庫藏 九三
二六一 城西聯句(元和四年刊) 刊記 高木文庫藏 九三
二六二 城西聯句(寬永元年刊) 刊記 高木文庫藏 九三
二六三 城西聯句(寬永五年刊) 刊記 東北帝國大學藏 九三
二六四 慶長九年平假名曆日 卷首 安田文庫藏 九四
二六五(考) 好古日錄所載傳慶長元年曆片 斷 安田文庫藏 九四
二六六 八 嶋 卷首 安田文庫藏 九四
- 二六七 伏見常盤 第二八章表挿畫 安田文庫藏 九五
二六八 滿 仲 第二章表 大島雅太郎氏藏 九五
二六九 寶物集(慶長十四年以前刊) 卷首 安田文庫藏 九五
二七〇 太平記賢愚抄(慶長十二年刊) 卷首、刊記 松井簡治氏藏 九六
二七一 太平記賢愚抄(慶長十五年刊) 刊記 高木文庫藏 九六
二七二 太平記(慶長十五年刊) 刊記 安田文庫藏 九六
二七三 本朝古今銘盡(八行大字本) 卷首、附銘圖 安田文庫藏 九七
二七四 本朝古今銘盡(小字八行本第一種) 卷首 安田文庫藏 九七
二七五 口傳書 卷末 安田文庫藏 九七
二七六 本朝古今銘盡(慶長十六年刊) 卷末 安田文庫藏 九八
二七七(イ) 解紛記(慶長十二年刊) 上卷末 帝國圖書館藏 九八
二七七(ロ) 太平記(慶長十四年刊) 卷首、刊記 成簫堂文庫藏 九八
二七八 伊勢物語(嵯峨本第一種本(ロ)版) 卷首、刊記、挿畫 東洋文庫藏 九九
二七九 伊勢物語(嵯峨本第五種本) 正宗教大氏藏 九九
二八〇 伊勢物語聞書(嵯峨本) 卷首、刊記 東京文理科大学藏 一二〇

二八一 方丈記(嵯峨本第一種) 卷首・墨書・讀語	東洋文庫藏 二〇二
二八二 撰集抄(嵯峨本) 表紙・卷首	安田文庫藏 二〇一
二八三 源氏小鏡(嵯峨本) 卷首	成賢堂文庫藏 二〇一
二八四 徒然草(嵯峨本第二種本) 卷首	東洋文庫藏 二〇一
二八五 謠本高砂(嵯峨本第一種本) 表紙・卷首	東洋文庫藏 二〇二
二八六 謠本高砂(嵯峨本第二種本) 卷首	東洋文庫藏 二〇三
二八七 謠本高砂(嵯峨本第四種本) 卷首	高本文庫藏 二〇三
二八八 謠本高砂(嵯峨本第七種本) 卷首	圖書寮尊藏 二〇三
二八九 謠本高砂(嵯峨本第七種本) 表紙	安田文庫藏 二〇三
二九〇 謠本高砂(嵯峨本第八種本) 卷首	安田文庫藏 二〇三
二九一 謠本高砂(嵯峨本第六種本) 卷首	安田文庫藏 二〇三
二九二 久世舞(嵯峨本三十曲本) 卷首	安田文庫藏 二〇四
二九三 久世舞(嵯峨本三十六曲本) 卷首	東洋文庫藏 二〇四
二九四 百人一首(嵯峨本第一種本) 卷首	東洋文庫藏 二〇四
二九五 百人一首(嵯峨本第二種本) 卷首	東洋文庫藏 二〇四

二九六 貞永式目抄(元和七年刊) 目記	刈谷町立圖書館藏 二〇五
二九七 貞永式目抄(慶元中刊(口)種) 卷首	高本文庫藏 二〇五
二九八 貞永式目抄(十三行本(イ)種) 卷首	圖書寮尊藏 二〇五
二九九 貞永式目抄(十三行本(ロ)種) 卷首	帝國圖書館藏 二〇五
三〇〇 貞永式目抄(十二行本) 卷首	成賢堂文庫藏 二〇六
三〇一 職原私抄(寛永四年刊) 目記	安田文庫藏 二〇六
三〇二 公事根源 卷首	成賢堂文庫藏 二〇六
三〇三 世諺問答 卷首	阿波國文庫藏 二〇六
三〇四 武家諸禮集(元和中刊) 卷首	安田文庫藏 二〇七
三〇五 武家諸禮集(元和・寛永中刊) 卷首	安田文庫藏 二〇七
三〇六 武家諸禮集(寛永中刊十三行本) 卷首	栗田元治氏藏 二〇七
三〇七 武家諸禮集(寛永八年刊) 目記	龜田次郎氏藏 二〇七
三〇八 しつけかた 卷首	安田文庫藏 二〇八
三〇九 女訓抄(寛永十四年刊) 目記	阿波國文庫藏 二〇八
三一〇 女訓抄(寛永十六年刊) 卷首・目記	高本文庫藏 二〇八

三一 一女訓集(十行本) 卷首	安田文庫藏 二〇九
三二 一女訓集(十一行本) 卷首	松井簡治氏藏 二〇九
三三 めのとのさうし(九行本) 卷首	東洋文庫藏 二〇九
三四 めのとのさうし(十一行本) 卷首	阿波國文庫藏 二〇九
三一五 騷騷全書(寛永六年刊) 卷首・刊記	帝國圖書館藏 二一〇
三一六 鞠の書 卷首	神宮文庫藏 二一〇
三一七 仙傳抄(第一種本) 卷首	栗田元次氏藏 二一〇
三一八 仙傳抄(第二種本) 卷首	東洋文庫藏 二一一
三一九 仙傳抄(第三種本(口)種) 卷首	久原文庫藏 二一一
三二〇 仙傳抄(第三種本(イ)種) 卷末・識語	帝國圖書館藏 二一一
三二一 仙傳抄(第四種本) 卷首	安田文庫藏 二一二
三二二 仙傳抄(寛永十七年刊) 刊記	高本文庫藏 二一二
三二三 花の傳書 卷首	久原文庫藏 二一二
三二四 碁(慶長十二年刊) 卷首・刊語(整版)	安田文庫藏 二二三
三二五 碁(慶長中刊平假名本) 卷末	高本文庫藏 二二三

三二六 象戲馬法	高本文庫藏 二二四
三二七 竹取物語(第一種本) 卷首	高本文庫藏 二二四
三二八 竹取物語(第二種本) 卷首	成實堂文庫藏 二二四
三二九 竹取物語(第三種本) 卷首	久原文庫藏 二二四
三三〇 竹取物語(第四種本(イ)種) 下卷首	神宮文庫藏 二二四
三三一 竹取物語(第四種本(ロ)種) 上卷首	光藤珠夫氏藏 二二五
三三二 伊勢物語(慶長中刊十一行本)	安田文庫藏 二二五
三三三 伊勢物語(慶長中刊十一行本) 卷首	成實堂文庫藏 二二五
三三四 伊勢物語(慶長中刊十一行本) 刊記	安田文庫藏 二二五
三三五 伊勢物語(慶長中刊十一行本) 卷首	安田文庫藏 二二六
三三六 伊勢物語(慶長中刊十一行本) 卷首	神宮文庫藏 二二六
三三七 伊勢物語(慶長中刊十一行本) 卷首	安田文庫藏 二二六
三三八 伊勢物語(慶長中刊十一行本) 卷首	成實堂文庫藏 二二六
三三九 大和物語(慶長中刊十一行本) 卷首	大島雅太郎氏藏 二二七
三四〇 大和物語(慶長中刊十一行本) 卷末	高本文庫藏 二二七

- 三四一大和物語(慶元中刊十二行本)(イ種) 卷首 安田文庫藏(震災) 一一七
- 三四二大和物語(元和中刊十二行本)(イ種) 卷首 高木文庫藏 一二七
- 三四三大和物語(元和中刊十二行本)(ロ種) 卷首 久原文庫藏 一二八
- 三四四大和物語(元和中刊十二行本)(ロ種) 卷首 岐阜師範學校藏 一二八
- 三四五大和物語(元和中刊十二行本)(ロ種) 卷首 松井簡治氏藏 一二八
- 三四六大和物語(寛永中刊十二行本) 卷末 靜嘉堂文庫藏 一二八
- 三四七大和物語(寛永十六年刊)(イ種) 刊記 成養堂文庫藏 一二九
- 三四八大和物語(寛永十六年刊)(ロ種) 刊記 阿波國文庫藏 一二九
- 三四九うつぼ物語(第一種本)(イ種) 卷首 成養堂文庫藏 一二九
- 三五〇うつぼ物語(第二種本)(ロ種) 卷首 東大寺佛教圖書館藏 一二九
- 三五一うつぼ物語(第二種本) 卷首 久原文庫藏 一二九
- 三五二源氏物語(傳藏版本) 卷首 安田文庫藏 一三〇
- 三五三源氏物語(元和九年刊本) 卷首刊記 安田文庫藏 一三〇
- 三五四源氏物語(寛永中刊無刊記本)(イ種)(ロ種) 卷首 久原文庫藏 一三一
- 三五五源氏小鏡(元和中刊十二行本) 卷首 鈴鹿三氏藏 一三一

- 三五六源氏小鏡(寛永中刊十二行本) 卷首 東洋文庫藏 一三一
- 三五七源氏小鏡(寛永中刊十二行本)(イ種) 卷首 高木文庫藏 一三二
- 三五八源氏小鏡(寛永中刊十二行本)(ロ種) 卷首 高木文庫藏 一三二
- 三五九源氏小鏡(寛永中刊十二行本)(ハ種) 卷首 東北帝國大學藏 一三二
- 三六〇源氏物語(元和中刊十二行本) 卷首 安田文庫藏 一三二
- 三六一狹衣物語(元和中刊) 卷首刊記 靜嘉堂文庫藏 一三三
- 三六二狹衣物語(元和中刊無刊記本)(イ種) 卷首 安田文庫藏 一三三
- 三六三狹衣物語(元和中刊無刊記本)(ロ種) 卷首 松井簡治氏藏 一三三
- 三六四狹衣物語(寛永中刊十二行本) 卷首 靜嘉堂文庫藏 一三四
- 三六五住吉物語(第一種本) 卷首 安田文庫藏 一三四
- 三六六住吉物語(第二種本) 卷首 安田文庫藏 一三四
- 三六七住吉物語(第三種本) 卷首 安田文庫藏(震災) 一三四
- 三六八宇治拾遺物語(イ種) 卷首 高木文庫藏 一三五
- 三六九寶物集(元和中刊第一種本)(イ種) 卷首 東京文理科大学藏 一三五
- 三七〇寶物集(元和中刊第一種本)(ロ種) 卷首 靜嘉堂文庫藏 一三五

三七一 寶物集	寛永中司第一種本(イ種) 卷首	安田文庫藏	一三五
三七二 寶物集	寛永十六年刊 前記	高本文庫藏	一三六
三七三 撰集抄	(第一種本) 卷首	安田文庫藏	一三六
三七四 撰集抄	(第二種本) 卷首	靜嘉堂文庫藏	一三七
三七五 撰集抄	(第三種本) (イ種) 卷首	松井簡治氏藏	一三八
三七六 沙石集	(元和二年刊) 前記	京都帝國大學藏	一三七
三七七 沙石集	(七行四年刊) 前記	安田文庫藏	一三七
三七八 清少納言枕草子	第三種本(イ種) 卷首	神宮文庫藏	一三七
三七九 清少納言枕草子	第二種本(ロ種) 卷首	高本文庫藏	一三七
三八〇 清少納言枕草子	十行本 卷首	内閣文庫藏	一三八
三八一 清少納言枕草子	(十一行本) 卷首	帝國圖書館藏	一三八
三八二 清少納言枕草子	(十行本) 卷首	靜嘉堂文庫藏	一三九
三八三 清少納言枕草子	(十行本) 卷首	安田文庫藏	一三九
三八四 清少納言枕草子	(十一行本) 卷首	安田文庫藏	一三九
三八五 徒然草	雲母瑠璃十行本 卷首	安田文庫藏	一四〇
三八六 徒然草	晴城本第五卷(九行本)	安田文庫藏	一四〇
三八七 徒然草	(鳥丸本) 卷首 前記	安田文庫藏	一四〇
三八八 徒然草	慶長中司十一行本(ロ種) 卷首	安田文庫藏	一四〇
三八九 徒然草	慶長中司十二行本 卷首	安田文庫藏	一四〇
三九〇 徒然草	慶元中司十一行本 卷首	和原退藏氏藏	一四〇
三九一 徒然草	元和寛永中司十一行本 卷首	鈴鹿三三氏藏	一四〇
三九二 方丈記	慶長中司十一行本 卷首	安田文庫藏	一四〇
三九三 十六夜日記	八行本	安田文庫藏	一四〇
三九四 榮華物語	八行本	松井簡治氏藏	一四〇
三九五 大鏡	卷首	安田文庫藏	一四〇
三九六 水鏡	卷首	安田文庫藏	一四〇
三九七 增鏡	卷首	安田文庫藏	一四〇
三九八 平家物語	平假名十行本 卷首	松井簡治氏藏	一四〇
三九九 平家物語	仁右衛門刊本 卷首	安田文庫藏	一四〇
四〇〇 平家物語	(仁右衛門刊本) 前記	安田文庫藏	一四〇

- 四〇一 平家物語(仁右衛門判本) 刊記墨版 京都府立圖書館藏 一三四
- 四〇二 平家物語(寛永元年刊) 卷首刊記 安田文庫藏 一三四
- 四〇三 平家物語(覺一本) 卷首 靜嘉堂文庫藏 一三五
- 四〇四 平家物語(單邊十二行片假名本) 卷首 久原文庫藏 一三五
- 四〇五 平家物語(雙邊十二行片假名本) 卷首 成養堂文庫藏 一三五
- 四〇六 平家物語(附誦片假名本) 卷首 安田文庫藏 一三五
- 四〇七 平家物語(中院本) 卷首校語 安田文庫藏 一三六
- 四〇八 平家物語(十二行平假名本) 卷三首 安田文庫藏 一三六
- 四〇九 平家物語(十二行平假名本墨版) 卷三首 安田文庫藏 一三六
- 四一〇 源平盛衰記(十一行本) 卷首 松井簡治氏藏 一三七
- 四一一 源平盛衰記(十二行本) 卷首 東洋文庫藏 一三七
- 四一二 源平盛衰記(附訓亂版) 安田文庫藏 一三七
- 四一三 保元物語(第一種本) 卷首 猪熊信男氏藏 一三七
- 四一四 保元物語(第二種本) 卷首 東洋文庫藏 一三八
- 四一五 保元物語(第三種本) 卷首 東洋文庫藏 一三八
- 四一六 平治物語(第二種本) 卷首 玉井幸助氏藏 一三八
- 四一七 平治物語(第三種本) 卷首 安田文庫藏 一三八
- 四一八 平治物語(第三種本) 刊記 京都帝國大學藏 一三九
- 四一九 保元物語(第五種本) 卷首 靜嘉堂文庫藏 一三九
- 四二〇 平治物語(第四種本) 卷首 東洋文庫藏 一三九
- 四二一 平治物語(第五種本) 卷首 高木文庫藏 一三九
- 四二二 保元物語(第六種本) 卷首 光藤珠夫氏藏 一四〇
- 四二三 保元物語(第七種本) 卷首 安田文庫藏 一四〇
- 四二四 平治物語(第六種本) 卷首 光藤珠夫氏藏 一四〇
- 四二五 平治物語(第七種本) 卷首 安田文庫藏 一四〇
- 四二六 保元物語(第八種本) 中卷首 杉浦三郎兵衛氏藏 一四一
- 四二七 保元物語(片假名十一行本) 卷首 類原退藏氏藏 一四一
- 四二八 平治物語(第八種本) 中卷首 東洋文庫藏 一四一
- 四二九 平治物語(片假名十一行本) 卷首 久原文庫藏 一四一
- 四三〇 保元物語(元和四年刊) 卷首 成養堂文庫藏 一四一

四三一 平治物語 <small>(元和四年刊)</small>	刊記	成書堂文庫藏	一四二
四三二 太平記 <small>(元和二年刊)</small>	卷一末刊記	安田文庫藏	一四三
四三三 太平記 <small>(寬永元年刊)</small>	卷首・刊記	成書堂文庫藏	一四三
四三四 太平記 <small>(慶安二年刊)</small>	卷首・刊記	圖書寮尊藏	一四三
四三五 太平記抄 <small>(第一種本)</small>	卷首	安田文庫藏	一四四
四三六 太平記抄 <small>(音義 第一種本)</small>	卷首	安田文庫藏	一四四
四三七 曾我物語 <small>(雙邊十行本)</small>	卷首	安田文庫藏	一四四
四三八 曾我物語 <small>(十一行本)</small>	卷首	高本文庫藏	一四五
四三九 曾我物語 <small>(十二行本)</small>	卷首	靜嘉堂文庫藏	一四五
四四〇 曾我物語 <small>(十二行挿書本)</small>	卷首	大島雅太郎氏藏	一四五
四四一 曾我物語 <small>(十二行挿書本)</small>	挿書	高本文庫藏	一四五
四四二 曾我物語 <small>(寬永中刊十二行本(イ)種)</small>		神宮文庫藏	一四六
四四三 曾我物語 <small>(寬永中刊十二行本(ロ)種)</small>		安田文庫藏	一四六
四四四 義經記 <small>(第一種本)</small>	卷二首	安田文庫藏	一四六
四四五 義經記 <small>(第四種本)</small>	卷首	刈谷町立圖書館藏	一四六

四四六 義經記 <small>(第二種本)</small>	卷首・挿書	京都帝國大學藏	一四七
四四七 義經記 <small>(第五種本)</small>	八首・挿書	東洋文庫藏	一四七
四四八 義經記 <small>(寬永十年刊)</small>	卷首・刊記	松本藩藏 東京文庫藏	一四八
四四九 八雲御抄	卷三首	成書堂文庫藏	一四八
四五〇 吉野參詣	卷首	安田文庫藏	一四八
四五一 萬葉集 <small>(何曲本)</small>	卷首	成書堂文庫藏	一四九
四五二 萬葉集 <small>(附調本)</small>	卷首	成書堂文庫藏	一四九
四五三 新古今和歌集 <small>(十一行本)</small>	卷首	高本文庫藏	一四九
四五四 新古今和歌集 <small>(十行本)</small>	卷首	安田文庫藏	一四九
四五五 見咲和歌集	卷首	東洋文庫藏	一五〇
四五六 自讃歌注 <small>(寬永十年刊)</small>	卷首	高本文庫藏	一五〇
四五七 百人一首抄 <small>(イ)種</small>	卷首	久原文庫藏	一五一
四五八 百人一首抄 <small>(ロ)種</small>	卷首	神宮文庫藏	一五一
四五九 左大將家六百番歌合 <small>(第一種本)</small>	卷首	高本文庫藏	一五一
四六〇 左大將家六百番歌合 <small>(第二種本)</small>	卷首	東京文理科大学藏	一五一

四六一	左大將家六百番歌合 ^(第二種本)	卷首刊記	東洋文庫藏	一五一
四六二	勅撰名所和歌抄出	卷首	成實堂文庫藏	一五二
四六三	類字名所和歌集 ^(第三種本)	卷首	安田文庫藏	一五二
四六四	類字名所和歌集 ^(第二種本)	卷首刊記	成實堂文庫藏	一五二
四六五	隨葉集	卷首	内閣文庫藏	一五三
四六六	分葉抄	卷首	刈谷町立圖書館藏	一五四
四六七	無言抄 ^(第一種本)	卷首	帝國圖書館藏	一五四
四六八	無言抄 ^(第二種本)	(イ)種	東洋文庫藏	一五四
四六九	無言抄 ^(第二種本)	(ロ)種	高本文庫藏	一五四
四七〇	匠材集 ^(第一種本)	(イ)種	東洋文庫藏	一五五
四七一	匠材集 ^(第一種本)	(ハ)種	久原文庫藏	一五五
四七二	匠材集 ^(第二種本)	卷首	高本文庫藏	一五五
四七三	連歌至寶抄 ^(第三種本)	卷首	久原文庫藏	一五五
四七四	藻鹽草 ^{(ロ)種}	卷首	神宮文庫藏	一五六
四七五	連歌至寶抄 ^(第一種本)	卷首	安田文庫藏	一五六

四七六	連歌至寶抄 ^(第二種本)	卷首	安田文庫藏	一五六
四七七	和歌題林抄	卷首	東洋文庫藏	一五六
四七八	發句帳 ^(第一種本)	(イ)版	安田文庫藏	一五七
四七九	發句帳 ^(第一種本)	(ロ)版	安田文庫藏	一五七
四八〇	發句帳 ^(第二種本)		安田文庫藏	一五七
四八一	新撰犬筑波集 ^(第二種本)	卷首	安田文庫藏	一五七
四八二	新撰犬筑波集 ^(第一種本)	(イ)種	竹冷文庫舊藏	一五八
四八三	新撰犬筑波集 ^(第一種本)	(ロ)種	伊藤爲之助氏藏	一五八
四八四	新撰犬筑波集 ^(第三種本)	卷首	竹冷文庫舊藏	一五八
四八五	新撰犬筑波集 ^(第四種本)	卷首	竹冷文庫舊藏	一五八
四八六	四生の歌合	卷首挿畫	東洋文庫藏	一五九
四八七	花傳書 ^(第一種本)	(イ)種	安田文庫藏	一五九
四八八	花傳書 ^(第一種本)	(ロ)種	安田文庫藏	一五九
四八九	花傳書 ^(第二種本)	(イ)種	安田文庫藏	一六〇
四九〇	花傳書 ^(第二種本)	(ハ)種	東洋文庫藏	一六〇

- | | | | | | |
|-------------------------|------------------|------------|----------------------|---------------|------------|
| 四九一 謠 | 抄(守古刊本) | 安田文庫藏 一六〇 | 五〇五 聚分韻略 | 卷首 | 久原文庫藏 一六五 |
| 四九二 謠 | 抄(今林刊本) | 安田文庫藏 一六一 | 五〇六 大和言葉 | 卷首 | 栗田元次氏藏 一六九 |
| 四九三 謠 | 抄(雙邊十行本) 卷首 | 安田文庫藏 一六二 | 五〇七 管蠡抄 | 卷首 | 靜嘉堂文庫藏 一六五 |
| 四九四 謠 | 抄(慶元中刊單邊十二行本) 卷首 | 蓬左文庫藏 一六三 | 五〇八 拾芥抄(第一種本) | 卷首 | 安田文庫藏 一六六 |
| 四九五 本朝文粹(寛永六年刊) 卷首刊記 | | 安田文庫藏 一六四 | 五〇九 拾芥抄(第二種本) | 卷首 | 安田文庫藏 一六六 |
| 四九六 (イ) 謠 | 抄(慶長中刊單邊十行本) | 安田文庫藏 一六五 | 五一〇 語 | 園(寛永元年刊) 卷首刊記 | 安田文庫藏 一六六 |
| 四九六 (ロ) 間の本 | | 安田文庫藏 一六五 | 五一一 卮言抄 | 卷首 | 安田文庫藏 一六七 |
| 四九七 錦繡段 | 卷首 | 久原文庫藏 一六六 | 五一二 日本書紀(慶長十五年刊) 刊記 | | 安田文庫藏 一六七 |
| 四九八 錦繡段抄(雙邊十四行本) 卷首 | 大島雅太郎氏藏 | 一六六 | 五一三 日本書紀(慶長十五年刊) 卷首 | | 安田文庫藏 一六七 |
| 四九九 錦繡段抄(寛永六年刊) 卷首刊記 | 東洋文庫藏 | 一六七 | 五一四 日本書紀(慶長十五年刊) 卷首 | 神代卷再印本 | 靜嘉堂文庫藏 一六八 |
| 五〇〇 錦繡段抄(單邊十三行本(イ)種) 卷首 | 高本文庫藏 | 一六八 | 五一五 日本書紀(別版) 卷首 | | 久原文庫藏 一六八 |
| 五〇一 錦繡段抄(單邊十三行本(ロ)種) 卷首 | 東洋文庫藏 | 一六八 | 五一六 日本書紀神代卷(第六種本) 卷首 | | 東洋文庫藏 一六八 |
| 五〇二 續錦繡段 | 卷首 | 高本文庫藏 一六八 | 五一七 日本書紀神代卷(第五種本) 卷首 | | 戊躰堂文庫藏 一六八 |
| 五〇三 續錦繡段抄 | 卷首 | 東洋文庫藏 一六八 | 五一八 先代舊事本紀 | 卷首 | 高本文庫藏 一六八 |
| 五〇四 倭名類聚抄 | 卷首 | 猪熊信男氏藏 一六九 | 五一九 保曆間記(第一種本) | | 安田文庫藏 一六九 |

五二〇 保屏間記(第二種本) 下巻首	安田文庫藏 一六九
五二一 承久記(元和四年刊) 巻首・再記	谷村一太郎氏藏 一六九
五二二 承久記(第二種本) 巻首	成簀堂文庫藏 一七〇
五二三 承久記(第三種本) 巻首	高本文庫藏 一七〇
五二四 新田左中將義貞軍記 巻首	京都帝國大學藏 一七〇
五二五 明德記(慶長十九年刊本) 巻首	蓬左文庫藏 一七一
五二六 明德記(元和三年刊本) 巻首	成簀堂文庫藏 一七一
五二七 明德記(寛永元年刊) 刊記	東洋文庫藏 一七一
五二八 應仁記(雙邊十二行本) 巻首	岩瀬文庫藏 一七一
五二九 應仁記(單邊十二行本) 巻首	久原文庫藏 一七一
五三〇 淨瑠璃物語 巻首・挿畫	東京帝國大學藏 一七二
五三一 花鳥風月(九行本) 巻首・挿畫	高本文庫藏 一七二
五三二 花鳥風月(十行本) 巻首	帝國圖書館藏 一七三
五三三 四十二の物語(第二種本) 巻首	東洋文庫藏 一七三
五三四 四十二の物語(第一種本) 巻首・挿畫	久原文庫藏 一七三

五三五 釋迦の本地(イ種) 下巻首	安田文庫藏 一七四
五三六 釋迦の本地(ロ種) 下巻首	高本文庫藏 一七四
五三七 秋夜長物語(平假名本) 巻首	高本文庫藏 一七四
五三八 秋夜長物語(片假名本) 巻首	鈴鹿三三氏藏 一七四
五三九 鴉鷺合戰物語(寛永中刊) 巻末	成簀堂文庫藏 一七五
五四〇 清水物語 巻首	高本文庫藏 一七五
五四一 鴉鷺合戰物語(慶安二年刊) 巻首・再記	靜嘉堂文庫藏 一七五
五四二 辨慶物語(慶長・元和中刊) 下巻首	高本文庫藏 一七六
五四三 辨慶物語(元和・寛永中刊) 下巻首	高本文庫藏 一七六
五四四 義經東下り 巻首	大谷大學藏 一七六
五四五 大しよくわん(十二行本) 巻首	九州帝國大學藏 一七六
五四六 舞の本ゑほし折(巻首) 日本紀・大誠冠(表紙)	東洋文庫藏 一七七
五四七 昨日は今日の物語(八行本(イ種) 第一葉裏	安田文庫藏(震災焼失) 一七七

五四八 昨日は今日の物語(八行本(口種)第一葉裏)

刻谷町立圖書館藏 一七五

五四九 昨日は今日の物語(九行本) 卷首

神宮文庫藏 一七八

五五〇 昨日は今日の物語(十行本) 下卷首

高木文庫藏 一七八

五五一 昨日は今日の物語(十行本) 卷首

安田文庫藏 一七八

五五二 昨日は今日の物語(十一行本) 卷首

久原文庫藏 一七八

五五三 竹 齋(十行本) 卷首

成實堂文庫藏 一七九

五五四 竹 齋(十一行本) 卷首

靜嘉堂文庫藏 一七九

五五五 恨の介 卷首

安田文庫藏 一七九

五五六 ぢんてき問答(第一種本) 卷首

神宮文庫藏 一七九

五五七 ぢんてき問答(第二種本) 卷首

成實堂文庫藏 一八〇

五五八 ぢんてき問答(第二種本) 卷首

久原文庫藏 一八〇

五五九 ぢんてき問答(第四種本) 卷首

東洋文庫藏 一八〇

五六〇 ぢんてき問答(第五種本) 卷首

高木文庫藏 一八〇

五六一 伊曾保物語(慶元中刊) 卷首

靜嘉堂文庫藏 一八一

五六二 伊曾保物語(元和中刊第二種本) 卷首

安田文庫藏 一八一

五六三 伊曾保物語(元和中刊第二種本) 下卷首

新村出氏藏 一八一

五六四 伊曾保物語(元和中刊第二種本)

佐々木信綱氏藏 一八一

五六五 伊曾保物語(寛永中刊) 卷首

圖書寮藏 一八一

五六六 伊曾保物語(寛永十六年刊(イ種)刊記)

安田文庫藏 一八一

五六七 伊曾保物語(寛永十六年刊(イ種)刊記)

成實堂文庫藏 一八一

五六八 一休水鏡(第二種本(イ種) 卷首

安田文庫藏 一八一

五六九 一休水鏡(第三種本(ロ種) 卷首

安田文庫藏 一八一

五七〇 一休水鏡(第一種本) 卷首

久原文庫藏 一八一

五七一 一休水鏡(第二種本) 卷首

東洋文庫藏 一八一

五七二 天正記(第一種本) 卷首

栗田元次氏藏 一八一

五七三 天正記(第二種本) 卷首

安田文庫藏 一八一

五七四 天正記(第三種本) 卷首

岩瀬文庫藏 一八一

五七五 天正記(第四種本) 卷首

小山弘房氏藏 一八一

五七六 信長記(元和八年刊) 卷首刊記

高木文庫藏 一八一

五七七 信長記(第二種本) 卷首	安田文庫藏 一八五
五七八 信長記(第三種本) 卷首	久原文庫藏 一八五
五七九 信長記(第四種本) 卷首	成實堂文庫藏 一八六
五八〇 信長記(第五種本) 卷首	東洋文庫藏 一八六
五八一 信長記(第六種本) 卷末	東京帝國大學藏 一八六
五八二 聚樂物語 卷首	成實堂文庫藏 一八六
五八三 大坂物語(第一種本) 卷首	帝國圖書館藏 一八七
五八四 大坂物語(第二種本) 卷首	成實堂文庫藏 一八七
五八五 大坂物語(第三種本) 附圖	成實堂文庫藏 一八七
五八六 大坂物語(第三種本) 卷首	久原文庫藏 一八八
五八七 大坂物語(第四種本) 下卷首	成實堂文庫藏 一八八
五八八 大坂物語(第五種本) 下卷首	成實堂文庫藏 一八八
五八九 大坂物語(第六種本) 下卷首	高本文庫藏 一八八
五九〇 前關白秀吉公御檢地帳之日録 卷首	帝國圖書館藏 一八九

五九一 朝鮮國御進發之人數帳 卷首	帝國圖書館藏 一八九
五九二 政要抄 卷首	帝國圖書館藏 一八九
五九三 寛永行幸記(眞名本) 卷首	靜嘉堂文庫藏 一八九
五九四 戲言養氣集 卷末	安田文庫藏 一九〇
五九五 塵劫記 卷首	吉澤義則氏藏 一九〇
五九六 寛永行幸記(第一種本)	正宗郭夫氏藏 一九一
五九七 寛永行幸記(第二種本(イ)版)	安田文庫藏 一九二
五九八 寛永行幸記(第二種本(ロ)版)	安田文庫藏 一九二
五九九 東大寺藏木活字	一九三
六〇〇 圓光寺藏伏見版木活字	一九四
六〇一 ドチリイナ・キリシタン	東洋文庫藏 一九五
六〇二 吉利支丹版落葉集(慶長三)	内野氏岐亭文庫藏 一九九
六〇三 ぎやどべかどる(慶長四年用) 扉卷首	丸善株式會社藏 一九六
六〇四 吉利支丹版太平記抜書	内野氏岐亭文庫藏 一九六

古活字版の研究附圖目次

六〇五 吉利支丹版どちりいな・きりしたん(平假名大字体)

飯島幡司氏藏 一九七

六〇六 吉利支丹版サカラメント

東洋文庫藏 一九八

六〇七 吉利支丹版こんてむつす・むん地(慶長十五年刊)

林若吉氏藏 一九九

日本書紀卷第一

神代上

古天地未剖陰陽不分渾沌如雞子溟滓而
含牙及其清陽者薄靡而爲天重濁者淹滯
而爲地精妙之合搏易重濁之凝場難故天
先成而地後定然後神聖生其中焉故曰開
闢之初洲壤浮漂譬猶游魚之浮水上也于
時天地之中生一物狀如葦牙便化爲神號

幽微非理不通鉅惟

下寬惠淑智之餘後世惜其流布之不廣
遂命鳩工於是始壽諸梓矣舊本頗絕駁
不一求數本考正之去其駁而錄其純用
之圖而及之天下則以成熙皞之治以紹
神尊之統保瑞穗之地千五百秋將必有
賴於斯焉

寶昌號藏

西條侯綱書樓藏

從帝王當宮御寄進神代已

新刊
日本書紀
卷上下

日本書紀
慶長己亥
季春新刊

勸學文

昇宗皇帝勸學

高家不用買良田

安居不用架高堂

出門莫恨無良朋

要事直須無良師

買兒欲遂平生志

仁宗皇帝勸學

書中自有千鍾粟

書中自有黃金屋

書中車馬多如簇

書中有女顏如玉

六經勤向窗前讀

爲爾惜居諸 思義有相奪 作詩勸躊躇

命工每一梓鏤一字基布之一版印之

此法出朝鮮甚無不便因茲模寫此書

慶長二年八月下泮

新刊錦繡段

天文

春月

柳塘漠漠暗啼鴉

好是夜闌人不寐

京城正月

秋滿西湖八月圓

西風茅葦長淮地

呂中孚

一鏡晴飛玉有華

半庭寒影在梨花

盧登用

家二辭竟倚欄干

庭有征人帶淚看

慶長第二歲在丁夷則下泮

臣僧南禪靈三誌焉

中庸

朱熹集註

子程子曰不偏之謂中不易之謂庸
天下之正道庸者天下之定理此篇乃孔
門傳授心法子思恐其久而差也故筆之
於書以授立子共書始言一理中散為萬

大學

朱熹章句

子程子曰大學孔氏之遺書而初學入德
之門也於今可見古人為學次第皆編賴

大學慶長
己亥刊行

中庸慶長
己亥刊行

論語學而第一

何晏集解

子曰學而時習之不亦悅乎有朋自遠方來
不亦樂乎人不知而不愠不亦君子乎有子
曰其為人也孝悌而好犯上者鮮矣不好犯
上而好作亂者未之有也君子務本本立而
道生孝悌也者其仁之本與子曰巧言令色
鮮矣仁曾子曰吾日三省吾身為人謀而不
忠乎與朋友交言而不信乎傳不習乎子曰

孟子卷第一

梁惠王章句上

孟子見梁惠王王曰叟不遠千里而來亦將
有以利吾國乎孟子對曰王何必曰利亦有
仁義而已矣王曰何以利吾國大夫曰何以
利吾家士庶人曰何以利吾身上下交征利
而國危矣萬乘之國弑其君者必千乘之家
千乘之國弑其君者必百乘之家萬取千焉

孝經慶長
己亥刊行

古文孝經序

孔安國

孝經者何也孝者人之高行經常也自有天地人民以來孝道著矣上有明王則大化溥流充塞六合若其無也則斯道滅息當吾先君孔子之世周失其柄諸侯力爭道德既隱禮誼又廢至乃臣弑其君子弑其父亂逆無紀莫之能正是以夫子每於閒居而歎述古之孝道也夫子敷先王之教於魯之洙泗門

職原抄上

百官

推古天皇御宇聖德太子攝政十二年甲子正月始定冠位十二階孝德天皇太化五年始置八省百官先是大臣大連等
有之文武天皇大寶元年正一位藤原太政大臣比等是也奉勅撰律令以官位及職負為其首其後多有減省又新加之

職原鈔慶長
己亥學曼物

197 (田 安) 語 苑類寶事朝皇版勅和元 二一

新雕 皇朝類苑卷第一

祖宗聖訓

太祖

太祖聖性至仁雖用兵亦戒殺戮親征太原道經潞州麻衣和尚院躬禱於佛前曰此行止以弔伐爲意誓不殺一人開寶中遣將平金陵親召曹彬潘美戒之曰城陷之日慎無殺戮設若困鬪則李煜一門不可加害故彬於江南得王師弔伐之體由聖訓丁寧也

初梁太祖因宣武府第修之爲建昌宮晉改命曰太寧宮周世宗復加營繕猶未盡如王者之制

太祖始命改營之一如洛陽宮之制旣成

太祖坐正殿令洞開諸門直望之謂左右曰此如我

全中

而其志

慶安女縣歲季安曆年日卜卦則臣

世道之樞要慎而莫怠

慶安玄戰 歲季箕番維 日卜朝臣

職原抄

百官

推古天皇御宇聖德太子攝政十二年甲子正月始定冠位十二階孝德天皇大化五年始置八省百官先是大臣大連号有之文武天皇大寶元年正一位藤原太政大臣藤海公不比等是也奉勅撰律令以官位及職負爲其首其後多有減省又新加之

此瞻魚鉢者伏見官中勢

押案板也。宝永十百歲拜領之永。

可為家藏者也

萬京權方知時清茂

標題句解孔子家語卷上

誅堂王

廣謀

景猷

句解

相魯第一

魯定公相位闕孔子攝行相事故以名篇

孔子為中都宰

孔子初仕為中都宰

孔子初仕魯為中都宰中宰之屬邑制

為養生送死之節

定生事死葬之禮使無過不及故謂之節長幼

異食

老少所食不同禮年十五異食疆弱異仕仕謂力作之事各從所仕

不用弱者也

男女別塗

男女有別不同路而行

路無拾遺

上道

唐鶴鶴者必免只願待博雅君子改制焉也謹跋

慶長第四龍集己亥仲夏吉辰

前學校三 要野納於城南伏見里書焉

國光寺常住

慈眼刊之

三

唐鶴鶴設者心矣只願待博雅君子改制焉也謹跋

慶長第四龍集己亥仲夏吉辰

前學校三 要野納城南於伏見里書焉

欽賞

慈眼刊之

貞觀政要卷第一

論君道一 論政體二

君道第一 凡五

貞觀初太宗謂侍臣曰為君之道必須先存百姓若損百姓以奉其身猶割股以啖腹腹

入聰明而治聚不異周勃霍光安劉氏輔昭帝也矧又海內弘此書而協和士民之心則為

明神不忘舊盟為

幼君盡至忠者其用太矣哉

慶長五年星轉庚子花朝節

前龍山見鹿苑承允叟謹誌

慈眼久修刊之

文翰

文師

文三將田史編布下曰田於渭陽將大得
 完龍赤影乘虎非馬兆得公侯天遣汝師以
 之昌施及三王文王曰兆改是乎史編曰
 編之太祖史疇為禹亡得阜閔兆於此
 王乃齊三日乘田車駕田焉田於渭陽卒見

維時 內府家康公以刊字數十萬時

即開六韜六韜是文武備書也吾 公

世不忘亂謂乎

慶長四龍集巳亥仲夏吉辰

前學後三要於此見城下書

藤金部郎中者本朝英武

之勇將也予嘗謂云古語云仁

賢之智聖明之慮興衰之事

將所宜聞也仍金板六張金部

投予被需朱墨為以系榮秘

本令令其畢報勿出函也

予時慶長五載難虞中司

吏部郎中書原不賢

黃石公三略卷之上

上略

夫主將之法務學英雄之心賞祿有功通志
 於衆故與衆同好靡不成與衆同惡靡不傾
 治國安家得人亡國破家失人也含氣之
 類咸願得其志軍識曰柔能制剛弱能制強
 柔者德也剛者賊也弱者人之所助強者怨
 直作人之所攻柔有所設剛有所施弱有所

黃石公三略卷之下終

右三略依 內大臣家康公命刻梓焉板
行誤以講直兩部改正者也

于時慶長五龍集庚子孟夏吉辰

前龍山元信史於伏見城下書焉

維時 內府家康公常學文興仁務武立

義故以刊字數十萬賜 予 即仰其厚恩開

六韜已以講直兩部正文字訛誤也 予 案

六韜是非治周家李貴權機也以此計之

文武備書也吾 公本此書治世不忘亂

亦宜哉

慶長五年庚子初夏吉辰

前龍山元信史於伏見城下書焉

六韜卷第一

文辭

文師

文王將田史編布卜曰田於渭陽將大得焉
非龍非黿非虎非黑兆得公侯天遣 予 師以
之作昌施及三王文王曰兆致是乎史編曰
編之太祖史疇為禹占得皋陶兆此 予 田文
王乃齋三日乘田車駕田馬相於渭陽卒也

維時 征夷大將軍家康公常學文興仁

務武立義故以刊字數十萬賜 予 即仰其

厚恩開六韜已以講直兩部正文字訛誤也 予 案

六韜是非治周家李貴權機也以此計之

文武備書也吾 公本此書治世不忘亂亦宜哉

慶長九年甲辰仲冬吉辰

前龍山元信史於伏見城下書焉

周易上經乾傳第一

○陸德明音義曰周代

今各書義取周易盈變反此經名也
翻注參同契云字從日下月上經上皆對
下立名經者常也法也徑也由乾卦名
傳直變反以傳述為義謂夫子十翼也

見發題第

王弼注

○本亦

無注音張具反今本或

乾下。乾元亨利貞。初九潛龍勿用。

乾陽也。初九。乾元。利。貞。初九。潛龍。勿用。利。貞。初九。潛龍。勿用。

大將軍源家康公鈞命印行周易其志要弘

聖道於萬年能校正舛差而加陸德明音義

於王輔嗣注集而大成者乎古德曰驚巖拓

華伏藏初畫少林面壁文王重爻然則於禪

門亦不可不究盡易道予於 禪師其情如

骨肉因雷震其後不獲堅辭漫書焉也

慶長十年星集乙巳孟夏初五日

鹿苑西笑叟承兌

高時

治十一年自正和五至嘉祿元年

高時

相摸守

高時

治八年自嘉祿五至元弘三年

高時

治二年自嘉祿元年至同二年

高時

相摸守武藏守赤橋殿

高時

治四年自元德二年至元弘三年

富春堂新刊

新刊吾妻鏡卷第一

高倉院第一皇子御母建礼門院

治四年二月廿一日受禪同四月廿二日即

位 永二年八月廿日新帝踐祚

又治元年三月廿四日長門國司浦邊入

御院內大臣 六条攝政一男

治承三年十一月十六日任內大臣

氏在者十七日二位 勅授牛車隨身司

可列注大臣上之由授 宣下四年二月廿一日

七書序

孫子吳子司馬法尉繚子三略六韜太宗問對兵家之書不知其幾也漢初有一百八十二家削取要用者三十五家其後任宏論次分其書爲四種唐有三十三家藏其書於四庫者凡六十部失姓名而不著錄者不與焉可謂繁且雜矣圯上一編足爲王者師奚以多爲哉

朝廷武舉之科惟用七書以

餘歲者乎太宗問李靖靖對曰先仁義後權譎可謂文武兼並也前

大將軍家康公以文安人以武威衆天下萬民咸歸服雖周漢不能過忽隨

公鈞命記七書於梓以講直正之畢矣予爲令知太平於後人跋其後也

慶長十一龍集丙午初秋念又一日

紫陽閑室元信史書焉

七書序

孫子吳子司馬法尉繚子三略六韜太宗問對兵家之書不知其幾也漢初有一百八十二家削取要用者三十五家其後任宏論次分其書爲四種唐有三十三家藏其書於四庫者凡六十部失姓名而不著錄者不與焉可謂繁且雜矣圯上一編足爲王者師奚以多爲哉

朝廷武舉之科惟用七書以

餘歲者乎太宗問李靖靖對曰先仁義後權譎可謂文武兼並也前

大將軍家康公以文安人以武威衆天下萬民咸歸服雖周漢不能過忽隨

公鈞命記七書於梓以講直正之畢矣予爲令知太平於後人跋其後也

慶長十一龍集丙午初秋念又一日

紫陽閑室元信史書焉

太平記卷第一

序

竊以探古今之變化察安危之來由覆而無外大德也明君體之保國家載而無棄地也良臣則之守社稷若其德缺則雖有位不持所謂夏策走南巢殷紂敗牧野其道違則雖有威不父曾聽趙高死威陽祿山亡鳳翔走以前聖慎而得垂法於將來後昆顧而不取識於既往乎

○後醍醐天皇御治世事付武家繁昌事

美二本朝入皇ノ始神武天皇ヨリ九十五代帝后醍醐天皇ノ御宇ニ當テ武臣相摸守平高時ト云者アリ此時上乖君之德下失臣之禮從是四海大ニ亂テ一トモト安樂無天爵降波地ノ動スコト至今四十餘年一人而不衛富春秋高民無所措手足猶尋其遺跡者匪獨一朝一夕之計以元暦年中ニ鎌倉ノ大將頼朝御進討平家而有其功是ハ後白河院以感之餘被補六十六箇之總追捕侍從是武家如テ立諸國仕護置庄園也頼朝朝長男左衛門督頼家次男右大臣實朝公相護官征夷將軍將三備是ノ号三代將軍矣頼家雖ハ為實朝

之方、右馬頭頼之ヲ武藏守ニ補任ノ御事職司外相内德ケキ人、二不違ニカハ氏、其カ重シ、外務モ彼命ヲ不背ノ由莫無為ノ代ニハテ用出カリ之事共也

太平記卷第四十終

慶長安邦春紀陸 富泰堂 新刊

○後醍醐天皇御治世事

美二本朝入皇ノ始神武天皇ヨリ九十五代帝后醍醐天皇ノ御宇ニ當テ武臣相摸守平高時ト云者アリ此時上乖君之德下失臣之禮從是四海大ニ亂テ一トモト安樂無天爵降波地ノ動スコト至今四十餘年一人而不衛富春秋高民無所措手足猶尋其遺跡者匪獨一朝一夕之計以元暦年中ニ鎌倉ノ大將頼朝御進討平家而有其功是ハ後白河院以感之餘被補六十六箇之總追捕侍從是武家如テ立諸國仕護置庄園也頼朝朝長男左衛門督頼家次男右大臣實朝公相護官征夷將軍將三備是ノ号三代將軍矣頼家雖ハ為實朝

大藏一覽集卷第一

寧德優婆塞陳 實謹編

第一冊 ○首標大覺先容俯為衆生作則凡

品十
三則

先王品第一 因地品第二

示生品第三 出家品第四

成道品第五 度生品第六

入滅品第七 常住品第八

羣書治要卷第一

周易

乾元亨利貞文言象曰天行健君子以自強

不息九三君子終日乾乾夕惕若厲無咎

體之極居上體之下統攝下道則上之

履從上道則處下之體積故終日乾乾至

于夕惕若九五飛龍在天利見大人

不名不若屬之也今天故曰飛龍也龍德在天則大人之屬尊

也夫位以德興德以位叙以至德而處位

不名宜乎上九亢龍有悔彖曰大哉乾元萬

帝鑑圖說叙

帝鑑圖說者今元輔少師張公驥以進

御者也

上初登大寶

召見公

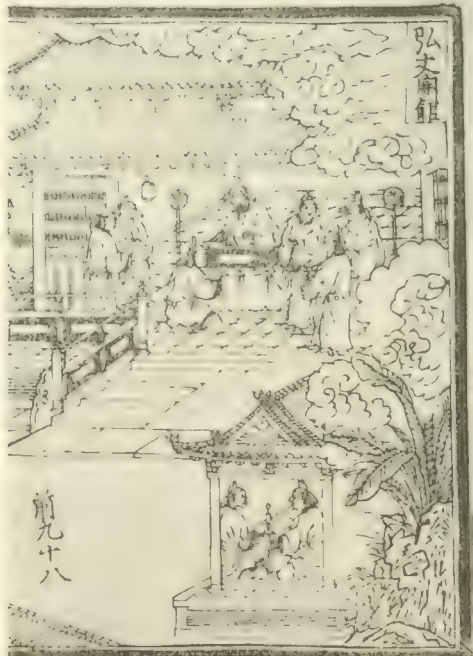
平臺隆倚眷公亦矢精白佐

上訪落理臺求也

上唐哲挺上智資公首陳勸學所簡進侍從儒臣

分日直講公偕少保呂公左右侍數承

弘治南銀



前九十八

治亂興敗者寔非萬代之龜鑑乎也

慶長拾壹拾星集丙午春三月 日

豐光老衲菜允

天台四教集解卷上

余治平四年冬於郡西之妙果而寄講焉明年夏諸
新學請事文墨消釋高麗觀師所錄天台四教于時
羅以雪川之科分即文之起盡散集諸部法言解釋
義之綱要未逾二旬乃成三卷題目謂之四教集解
焉草創纔畢尚未琢磨便為學者傳寫流布世人咸
將何晏集解致難而不曾以杜預集解為效且儒之
集解既存二說今之題目何必怪哉嗚呼管圃之石
也而有斯惑焉今熙寧九年居大雲西院講訓之餘
於是考覈雪川之科未為盡善吳逵乃自出科文一

前略錄二若要下勸尋廣文若論十乘亦須更云請
尋止觀而不云者但足略耳三自從下今示諸家判
教不同此如妙玄教相文中廣敘古來諸師之說尋
文可知不煩錄也

天台四教儀集解卷下

文祿四 未 曆十一月二十四日

法華私記錄起

沙門 灌頂 述

大法東漸僧史所載誰有幾人不曾聽講自
解佛乘者乎縱令發悟復能入定得陀羅尼
者不縱具定慧復帝京弘二法不縱令盛
席講道徒眾隱居山谷不縱避世守玄被戮
為二國師不縱帝者所尊太極殿對御講仁
王般若不縱正殿宣揚為主上三禮不縱令
萬乘屈膝百高座百官稱美讚歎彈指宣
不縱道俗顯顯玄悟法華周意不縱得經意

敘宗也本迹不喻者敘用也甘露門者敘教

奉寄進 法華玄義序 百部

文祿四 未 曆極月二十四日

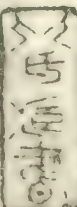
大光山本國寺常住 願主一輪房日保

蕭何攜接秦法

新刊徐狀元補註蒙求卷下

桑域洛陽西洞院通勤解由小路南
町住居甫庵道喜新刊一字板繡此
書以應童蒙之求也呼鳴未辨字耶
羊耶魚耶魯耶澗愧林慙莫博覽人
運郢斤多幸

惟時文祿第五丙申小春六辰道喜記



此係狀元補注卷上

王戎簡要 裴楷清通

晉書王戎字浚冲琅邪臨沂人幼而穎悟持彩秀徹親目不暇裴楷見而目之曰戎之類也如農下電阮籍素與戎交戎少友戎年十五隨渾在舍少籍二兄之文籍每適渾去輒過視戎戎後出渾曰浚冲清賞非鄉俗之類言其如共阿戎談厚官至司戎

皆慶長元年十二月五日
日東洛陽西洞院住 甫菴 道真撰行焉

手厥陰心包經之圖



此經之脈起於心包絡下腋上臂內行肘中下臂內行掌中出中衝穴
反掌其脈又於掌中入乎掌中神堂穴
本經之脈起於心包絡下腋上臂內行肘中下臂內行掌中出中衝穴
天地人寸陰陽五行之理
丁可也巳知後名醫代作
者夫此書又其後張仲景用此經之脈
則此書如東垣之書實經之脈

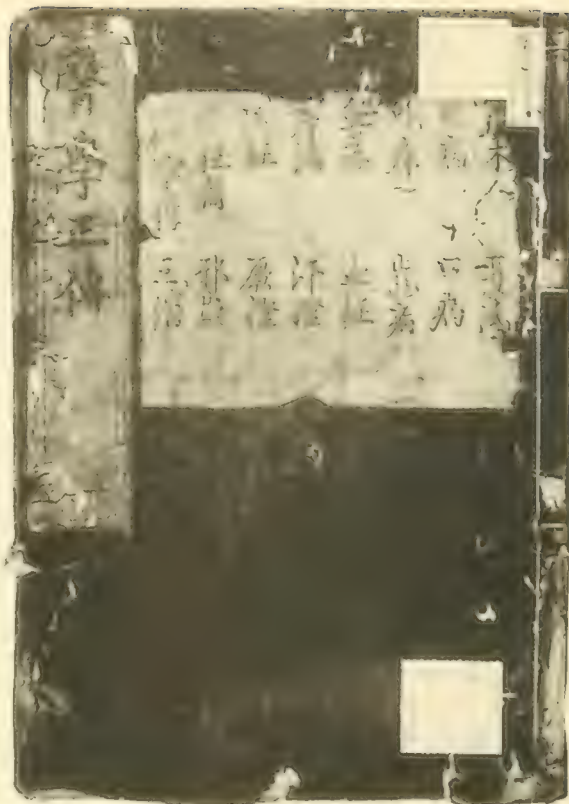
十四經發揮卷上

許昌，櫻寧生，滑壽伯仁著，吳郡，會仁，薛鏗良武校刊。

手足陰陽流注篇

凡人兩手足各有三陰脉三陽脉以合為十二經也。

三陰謂太陰少陰厥陰三陽謂陽明太陽少陽也。人兩手足各有三陰脉三陽脉相合為十二經也。手三陰謂太陰肺經少陰心經厥陰心包經。手三陽謂陽明大腸經太陽小腸經少陽三焦經。足三陰謂太陰



新編醫學正傳卷之一
花溪張老人震林天民編集
醫學或問 凡五十一條
源源集卷之四 校正
或問醫學源流自新岐以來以醫術鳴世與夫著書
立言俾後人之可法者幾何人哉請明以告我口
子嘗聞故學士宋公景衡之文而得其說矣請其
如左夫帝帝而雖疑生醫之士依微而作之其
言深而要其旨淺以弘其政詩信而有徵是當道
醫家之宗下此則秦越人和緩和緩無書可傳應
人所著八十一難經則皆舉內經之要而推明者
也又下此則淳于意華陀之能經脈圖亦準

東垣先生此事難知集卷上

醫之可法

自伏羲神農黃帝而下名醫雖多所可學者
有幾人哉至于范氏之割腹王氏之天賦乃
非不神也後人安得而微之非岐伯之正經
當公之炮炙和之湯液其子之此集始
之則非神也之傷寒叔紀之勝決亡安之甲
乙醫案子之傳難錢仲陽之論諸虛表裏
所可學者豈一古萬論印定後人眼目者
能比哉其間微而打者奇子異士與夫

凡用黑虎熟苜微炒假如一片斤用一
兩

外科精義卷下終

慶長刻梓
洛省

扶桑國平安城西洞院居住
愚意刊一字之板而印茲書校支那三朝之
所本宗其正者也雖然字字可多舛差若自
博覽之妙手斷泥者幸甚

省慶長第二丁酉初夏中泠

吳相

將軍

軍救朝鮮來請和

元丙大明國遊擊將

七月十二日大地震五

多有減省又新加之

或一日來而謂予曰考經者非百行之
本書半今世好事者多以雜費梓工未及
此書惜矣因冀刊綴之勞欣備知學也凡
索也予感其志遂出累代的本借與焉
亦時之加校訂者也
慶長壬寅八月壬子明經儒清原芳野記

音義考經

孔氏傳

開宗明義章第一

百二十四字

仲尼間居會子侍坐

仲尼者孔子字也凡名有五品有信有義有象

有假有類以名生信以類名仲尼首上巧似尼

丘山故名曰丘而字仲尼孔子者魯子之通

稱也仲尼之兄伯尼間居者靜而思道也

子者男子之通稱也名參其父曾點亦

孔子弟子也作參事左右問道訓也

參先王有至德要道以訓天下

子孔子也

百官略

神祇官

伯大副

權

少副

權

祐少史

大

太政官

太政大臣

內

大臣

左右

大納言

正

中納言

正

參議

權

少納言

外

外記

大少

大辨

左右

中辨

左右

少辨

左右

大史

左右

少史

左右

史生

左右

官掌

左右

中書省卿

大輔

權

少輔

權

丞大錄

大少

侍從

內舍人

內

內記

大少

慶長玄默困敦夾鍾 列之

本
題
士

新成

飄飄博和第八

一

釋慧如二

釋僧隆二

1

得大明

釋慧明

卷之四

驛志寶八

卷之九

釋志述十

唐國清寺釋灌煥一

爲漢江字法雲俗姓吳氏常州義興人也祖賦
二地事臨川而不返一爲臨海之普安高父
早亡祖親鞠養生自三月夜稱佛妹情名甫

補遺一化之始其費雖甚高而
 盛行于世爲談者之資矣然轉寫謬於豕亥
 割牛筆竟不同謂計予輩中僧史諸君嚴謹
 法等知此世所傳之有本據愈者愈實微
 工費碎一片幸勿輕感焉
 廬長庚不載季春望日 洛陽 釋圓智

特之真題

甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸
甲子	乙丑	丙寅	丁卯	戊辰	己巳	庚午	辛未	壬申	癸酉
甲戌	乙亥	丙子	丁丑	戊寅	己卯	庚辰	辛巳	壬午	癸未
甲申	乙酉	丙戌	丁亥	戊子	己丑	庚寅	辛卯	壬辰	癸巳
甲午	乙未	丙申	丁酉	戊戌	己亥	庚子	辛丑	壬寅	癸卯
甲辰	乙巳	丙午	丁未	戊申	己酉	庚戌	辛亥	壬戌	癸亥
甲寅	乙卯	丙辰	丁巳	戊午	己未	庚申	辛酉	壬戌	癸亥
甲子	乙丑	丙寅	丁卯	戊辰	己巳	庚午	辛未	壬申	癸酉
甲戌	乙亥	丙子	丁丑	戊寅	己卯	庚辰	辛巳	壬午	癸未
甲申	乙酉	丙戌	丁亥	戊子	己丑	庚寅	辛卯	壬辰	癸巳
甲午	乙未	丙申	丁酉	戊戌	己亥	庚子	辛丑	壬寅	癸卯
甲辰	乙巳	丙午	丁未	戊申	己酉	庚戌	辛亥	壬戌	癸亥
甲寅	乙卯	丙辰	丁巳	戊午	己未	庚申	辛酉	壬戌	癸亥

[illegible]

太神宮御事

去弘長年中^ニ大神宮^ニ詣テ、侍^ニ或神官ノ語シハ
當社^ニ三寶ノ御名ヲ忌御殿近クハ僧ナントモ詣^又事
ハ昔此國イマダ無リケル時大倭ノ底^ニ大日ノ印文有
ケルニヨリテ大神宮御鉢ヲ指入テサクリ給ケル其鉢
ノ滴^リ露^ノゴトクナリケル時第六天ノ魔王ハルカニ見
此滴國^ト成^テ佛法流布シ人倫生死ツイツヘキ相アリ
トテツミナハンタノニ下リケルズ大神宮魔王^ニ行ムカ
ヒゾヒタマヒテ我三寶ノ名ヲモイハシ我身ニモ近ツケシ
トク^ク歸^リ上^リ給ヘトコ^コラヘ給ケレハ歸ニケリ其御

却也有心人必可令加添削給耳

沙石集第十

此集行于世尚矣本有廣略條有前後不知
孰是也頃幸得無住師之直筆正本今也不
堪蘊藏於焉遂錄于梓十目所視豈其掉乎
勿敢疑也

慶長十^二年仲春下院八日 圓智投離

太神宮御事

去弘長年中^ニ大神宮^ニ詣テ、侍^ニ或神官ノ語シハ
當社^ニ三寶ノ御名ヲ忌御殿近クハ僧ナントモ詣^又事
ハ昔此國イマダ無リケル時大倭ノ底^ニ大日ノ印文有
ケルニヨリテ大神宮御鉢ヲ指入テサクリ給ケル其鉢
ノ滴^リ露^ノゴトクナリケル時第六天ノ魔王ハルカニ見
此滴國^ト成^テ佛法流布シ人倫生死ツイツヘキ相アリ
トテツミナハンタノニ下リケルズ大神宮魔王^ニ行ムカ
ヒゾヒタマヒテ我三寶ノ名ヲモイハシ我身ニモ近ツケシ
トク^ク歸^リ上^リ給ヘトコ^コラヘ給ケレハ歸ニケリ其御

今若御初推ノ若君ヲ可奉輔佐ト群議同趣ニ定^リ正
カハ右馬頭賴之ヲ武藏守ニ補任^テ執事職ヲ可ル外
相内德ケニモ人ノ云ニ不違シカハ比族^ニ是^ヲ重^シ
好康^ニ彼命ヲ不背^ノ中夏無爲ノ代^ニ成^テ目出^ス

太平記卷第四十

慶長十年^二九月上

文選卷第一

梁昭明太子撰

五臣并李善注

賦甲

善曰賦甲皆舊題甲乙所以犯卷先後今卷既改故甲乙並除存其首題以明舊式

京都上

班孟堅兩都賦二首

善曰自光武至和帝都洛陽西京父老有怨班固恐帝主

洛陽故上此詞以諫和帝大悅也

兩都賦序

班孟堅

號曰漢書云班固字孟堅扶風安陵人九歲能屬文至明帝時為蘭臺令史遷為郎

後竇憲出征匈奴又因為中護軍憲敗坐免官死獄中明帝脩洛陽西土父老怨帝

文選六臣註卷 品目

文選六臣註卷 七八

文選六臣註卷 九十

文選卷第六十

右文選卷第六十湯滅殆甚紹興二十八年冬十月

直閣趙公來其邦下車之初以儒雅飾吏事首加修正字畫蓋之一新俾學者開卷免魯魚三豎之訛且當垂斯文於無窮云右迪功郎明州司法參軍兼監盧欽謹書

文選卷第六十 終

才文選校旅久陽微殆甚紹興二十八年冬十月

直閣趙公來鎮是邦下車之初以儒雅飾吏事首加修正字畫為之一新俾學者開卷免魯魚三豕之訛且感斯文於無窮云右迪功郎明州司法參軍兼監盧欽謹書

文選卷第六十

文選卷第六十

三十七

文選卷第六十

文選卷第六十

論語學而第一 凡十六章

何晏集解

子曰學而時習之不亦說乎

馬融曰子者男
子之通稱謂其

子也王肅曰時習學也以此時誦習之
論語以時學在廟堂所說為誦

有朋自

遠方來不亦樂乎

包氏曰同
門曰朋

人不知而不慍

不亦君子乎

愠怒也凡人有
不知君子不慍

有子曰

孔安
國曰

其為人也孝弟而好犯上者鮮矣

鮮少
也

片在已上者言孝弟之人
必尊順好欲犯其上者少也

不好犯上而好

其是

論語卷第十

經一千二百二十三字
註一千一百七十五字

意眼刊

正運刊

冷溪要法寺內開板

夏多力... 俱不得... 死...

禹稷躬稼而有天下...

子曰... 哉若人...

子曰... 哉若人...

子曰... 哉若人...

子曰... 哉若人...

子曰... 哉若人...

子曰... 哉若人...

子曰... 哉若人...

子曰... 哉若人...

子曰... 哉若人...

子曰... 哉若人...

子曰... 哉若人...

子曰... 哉若人...

子曰... 哉若人...

大學

大舊音泰今讀如字

朱熹章句

予程子曰大學孔氏之遺書而初學入德之門也於今可見古人為學次第者獨賴此篇之存而論並次之學者必由是而學焉則庶乎其不差矣

大學之道在明明德在親民在止於至善
曰親當作新○大學者大人之學也○明明之也明德者人之所得乎天而虛靈不昧以具

第二十九章

注文射音妬詩作數

數詩音亦集傳叶丁故反

關東上慈生今關正蓮刊

中庸章句序

中庸何為而作也予思之憂道學之失其傳而作也蓋自上古聖神繼天立極而道統之傳有自來矣其見於經則允執厥中者堯之所以授舜也人心惟危道心惟微惟精惟一允執厥中者舜之所以授禹也堯之一言至矣盡矣而舜復興之以三言

第二十九章

注文射音妬詩作數

數詩音亦集傳叶丁故反

關東上慈生今關正蓮刊

天台四教儀集註卷上

南天竺 沙門 蒙潤 集

天台四教儀

天台山名也。天者顯也。元氣未分混而為一。兩儀既判清而為天。濁而為地。此本俗名。且依俗釋台者。星名也。其地分野應天三合。故以名焉。如輔行一止。此山即大師棲身入寂之所。蓋以西方風俗稱名為尊。此土避名為敬。故以此處顯其人也。復以人命家則天台為宗矣。今題意在焉。四教者。別文明化儀。化法有乎八教。今但言四教者。以通名立題義攝兩種。蓋非化儀無以判非化法。無以釋

有同異者。蓋迷所聞於先德。非任智臆也。若夫文未正修。初乘觀法。文雖簡約。理亦備焉。諸新學人究心于茲。忘語忘思。筌筌俱擲。莫以是為然。能爾也。則無適而不可。亦豈難哉。時元統甲戌夏五。南天竺白蓮華沙門 蒙潤 謹序

洪武十二年龍集己未正月。既望。明州府在城寶雲報祖天台教寺住持比丘必蒙謹募衆緣重刻流通

慶長十八 癸丑年 八月 日

於京師要法精舍板行

天台法華疏義續卷第一

東萊沙門

智度

釋經題五門。分別謂名體宗用教相。初名者。是慧解宗用。是別雖有體等名。為妙故。別即揀雖是一妙名。而其解非三。故揀即別別別。於揀揀揀。於別別名妙法也。玄文寄教約行者。辨其以弟耳。序品云。以是法今。佛欲說法華經。是名助發。實相義。是財雨法雨。是宗。斯三乘疑悔。是用此約。尋名得財。證財顯宗了。極有用。用即斷疑。此從自行辨次第也。神力品寄教。若云。如來所有一切諸法。是名自在。神力是財。秘要之財。是財甚深之事。是宗。此約化他門。故用若第

天台法華疏義續卷第六

有此抄記名。一家習學之士。雖勤書寫之功。展轉謬誤。亦有餘矣。因茲今聚集數百之舊本。粗校檢之。而輒發乎版。為庶幾留將來。永切詳審。廣遠也。倘恐魚魯訛錯。章句。隨隨文字。添脫敬請。後哲刪削。決正而已。

于特寬永三

丙寅

曆南呂仲旬

洛陽於本國寺

開之

西塔地之院生

通鑑卷之二十二

周穆王庚寅
世尊示現自
顯穆王壬申
大教東移自東
漢明帝戊辰

止元統元年計

二千三百二十	二千二百八	一千二百六
十四年	十二年	十六年

本國寺學校 玉潤日銳補爛脫耳

十住從 實乘進

法壽珠 金林慧

四僧集會異體同心鑲梓刊板流行天下

慶長十七 壬子 極月十九日

盛行于世為談者之資矣然轉寫誤於亥
刪有差脫不可稱計予嘗披僧史傳并衆經
錄等忽覺此記傳之有本據愈考愈覺輒命
工鏤梓學若幸勿疑感焉時
慶長庚子載李春望日 洛陽 釋圓智誌

慶長十九^{甲寅}孟冬仲三日洛陽 釋露閑誌

勸義應不應 如似苦毒藥 和合於石室
藥為破壞病 此論亦如是 正法中戲笑
譬如彼狂藥 佛正法寂定 明照於世間
如服吐下藥 以酥潤鉢中 我今以此義
顯發於寂定 如阿伽陀藥 樹葉而裏之
取藥塗毒危 樹葉還棄之 戲笑如藥裏
實義在其中 智者取正義 戲笑便應棄
尊者僧伽斯那造作癡華鬘竟

百喻經卷下

寬永三^{丙寅}極月吉日 百喻經
洛陽於木能寺 開判露閑

藏ハカリ作タトイフニ註ニハナセニ唐クワヘタソト云ニ
聖記盛ス家ヲ作ラクテ、先宗廟ノ休テ建、
作ルソ家ハカハ休ラメ物ヲカソ云テテノ
其書卷第二十

於洛陽六龍寺龍明閣

人ノ兄ノ云父ハ天照天神ノ子孫也母ハ龍王
ノ女也今風波越陸ニテハ人ニ得リシ海ニテハ
波ニ觸リルハ父母ノメクミ難ノリト被劬入海
タヘリ然野有人夢云龍王父貴孫ハ神可
謂之トノ劬一臂ヲ見タリ夢醒見ハ倉ノ内
一匊アリ此人持劬劬授神武々々神亡ハヘキ
瑞相ヲ喜ンテ起吉野歌ウヘリ此劬一葉葉ノ
寶劬也平家ノ時西海ニ沉メリ或云ク此劬ハ大
和國布留ノ社去ヘリ古野ニテ歌クウタヘル其事
ハ二道ノ節會ニ七葉ヨシアリ九月至宇多見城
中可伐天下ト思ヘリ其地ヲ名國見於是有
吉取天香山之土為土器祭天神地祇
其後天下々々即太平也

本書記之卷二終

於洛陽本龍寺龍明閣

門函入十二卷 入紙五牒十三張

福蓋正行所集經十二卷 同譯

紫雲函入二十卷 入紙十二牒九張

父子合集經二十卷 同譯

雞函入十卷 入紙十牒二張

續一切經音義十卷 撰

田赤城瓦池碣石鉅野洞函入一百卷

入紙二百六牒十四張

一切經音義一百卷 撰

大藏經目錄卷下

戊申年高麗國大藏部監奉

勅雕造

一代藏經開梓捐寫報佛恩德結緣衆生

同證佛果二世安樂乃至法界平等利益

大本願伊勢聖乘坊宗存

當施主

開板

吉野入道意齋

西田勝兵衛尉

沙門源信竊記

元和七辛酉年 七月吉日

伊勢兩太神宮內院一切

經本願常明寺宗存敬梓



法界次第初門卷第一

天台山修禪寺 智者大師 說

天台山修禪寺僧沙門釋智顗撰依經附論撰次
第法界初門三百科載為七卷流傳新學略為三
意一為讀經尋論隨見法門脫有迷於名數者二
為未解聖教所制法門淺深之次第三為學三觀
之者當以此諸法名相義理一一歷心而轉作則
觀解無礙觸境不迷若於一念心中通達一切佛
法者則三觀自然了了分明也故出此三百科名
數仍當名下略辨體相始得三卷

淨之業也

心聽法不以愛佛智了達不一心聽法
之人平等法界中滅退相畢竟不可得故無憂相
三聽者一心不以為喜佛智了達聽者平等法界
中增進相畢竟不可得故無喜相三常行於佛
智了達一切衆生即大涅槃不可復滅故於一切
言說所利益衆生衆生中常行捨心也故全剛般
若經云如是滅度無量衆生實無衆生得滅度者
也

法界次第卷第三

六條 刊堂

教誡新學比丘行護律儀

終南山沙門 道宣 述

觀夫剎入道門未即開其妙行要遵承以法
訓方乃曉其律儀事若關於師承持護冥然
無準故知不有教誡行相誰宜不有學人軌
模奚設然釋迦行化法本西天自金口收光
言流東域化教含其漸頓遷定水於三千制
教輕重斯分熏戒香於百億律制五年依止
意在調伏六根有智聽許離師無智猶須盡

慶長九年甲辰應鐘上旬

城西歡喜山寶珠院門幸朝

下村生藏刊之

元亨釋書卷第一

濟北沙門 師鍊 撰

傳智一之一

南天竺菩提達磨 高麗慧灌

吳國智藏 元興寺道昭

北天竺善無畏 興福寺慈訓

唐國鑑真 延曆寺最澄

金剛峯空海

菩提達磨者南印度香至王第三子也蕭梁

全

慶長乙巳歲仲夏日

下村生藏判之

中庸章句序

中庸何為而作也子思子愛道學之失其傳而作也蓋自上古聖神繼天立極而道統之傳有自來矣其見於經則允執厥中者堯之所以授舜也人心惟危道心惟微惟精惟一允執厥中者舜之所以授禹也堯之一言至矣盡矣而舜復益之以三言

第二十章

注文射音妬詩作豎

豎詩音亦集傳叶丁故反

清原秀雄

卷之四即秀雄初卷之

圖

下村

元

香樂物内を才ハ

香永う七月廿四日於夜半りわはるま
御使大御言方より御息大御頭時
計を内侍よりひきとりて出で給て
駒馬へ内侍より寺傍よりおれを
あうりひきとんとりまされいさ
縁に家樂と改めしりさうき
さうきと入て横川を解脱し殿場へ
のぞりまされ大御起りて東塔へ
内侍よりおれより寺傍より殿

香永物内を才ハ

山門記

香永二年七月廿四日於夜半りわはるま
御使大御言方より御息大御頭時
計を内侍よりひきとりて出で給て
駒馬へ内侍より寺傍よりおれを
あうりひきとんとりまされいさ
縁に家樂と改めしりさうき
さうきと入て横川を解脱し殿場へ
のぞりまされ大御起りて東塔へ
内侍よりおれより寺傍より殿

之資賢人之業其不泯矣上又自陳作意已
題別序以余本錄所趣欲重宣揚嘉旨再三
故疏此記俾夫後身廣惠遙證通方過去眾
賢永懃偏識云爾
俱舍論頌釋疏卷第一

中大雲寺沙門圓暉

粵燭天下之幽者其惟赫曰乎鼓蕩物而成
者其惟颯風乎匡太教而濟時者其惟菩薩
乎爰有六士厥號世親弘道於五天製論於

是諸煩惱方地時

應求解脫勿放逸

釋曰佛滅度後九百年中世親製諸論正法
壽命漸次淪亡如人欲終氣臨至候須臾便
死於此時中煩惱增長諸有知人應求解脫
勿令放逸起煩惱也
俱舍論頌疏
論本第二十九

慶長十六辛亥曆冬

條清和院新刊

德佛三、智慧佛四、如如佛此、約終教說、或立
 十佛、以顯無盡、如離世間品、說此約、一乘因
 教說、

德佛三、智慧佛四、如如佛此、約終教說、或立
 十佛、以顯無盡、如離世間品、說此約、一乘因
 教說、

華嚴經中一乘五教分齊義下

慶長十七年 子十月吉日

和玉篇上卷

金部

銅	鐵	鐵	金
鐵	鐵	鐵	金
鐵	鐵	鐵	金
鐵	鐵	鐵	金
鐵	鐵	鐵	金
鐵	鐵	鐵	金
鐵	鐵	鐵	金
鐵	鐵	鐵	金
鐵	鐵	鐵	金
鐵	鐵	鐵	金

和玉篇上卷

金部第一

銅	鐵	鐵	金
鐵	鐵	鐵	金
鐵	鐵	鐵	金
鐵	鐵	鐵	金
鐵	鐵	鐵	金
鐵	鐵	鐵	金
鐵	鐵	鐵	金
鐵	鐵	鐵	金
鐵	鐵	鐵	金
鐵	鐵	鐵	金

二開經卷持

塵等諸菩薩具普賢道、
 佛說於經時普賢等、
 聞及諸天龍人非人等、
 受持佛語作禮而去、
 妙法蓮華經卷第八終

于時寬永二年十月日於洛陽三條寺町
 寶藏寺捐刊之畢

若欲正綱直須大地荒秋來衡霄又不免露鋒鈍

據實商量

後來合眼微來餐起坐終諸勿兩般同道盡知言不
感十方刹土目前觀

委曲商量

得用由來處處通臨機施設認家風揚眉瞬目同一
眼豎拂敲林為耳聾

住福州鼓山圓覺

宗演

校勘

慶長癸丑歲仲春月洛陽 宗鑑重刊

住山身已老世事任難張來無待者客到自嫌香

隱靜岑頌云客舍井州已十霜歸心日夜憶咸陽無端
更過葉乾水却望井州是故鄉

權林類聚卷第二十

於洛陽高臺寺

參來之徒技出之誤多々

于時慶長十八 癸卯月吉辰

疏序嚴又謂就此門中分為四句此亦晉疏
玄談又已明矣源應之曰夫有條不紊表其
綱之在網探乎深緯貫其通於與義然則君
子博博覽祖訓負卓之識豈獨時昔有之乎
源愛通義師傅慈恩祖教講儒者五經而考
文責實章灼同異意猶吾心也於是乎題之
卷末云耳

于時寬永八年七月八日

於棋尾平等心王院

指寫之北

三筆諸書隆具普賢覺

此羅莊安初

詳說其經時普賢等諸菩薩各刊其

備及諸天龍人非人等

切大會皆大

受持佛語作禮而去

妙法蓮華經卷第八

于時慶長十六年十月日於延曆寺東坊

東谷月藏房摺刊之畢

天台四教儀義解卷上

余始年四冬於西之妙果而寄歸焉明
 年夏諸新字請事文墨沈精高觀師所錄
 天台四教于時權以雪川之科分簡文之起
 乃成三卷而自謂之四教儀義解焉耳則雖畢
 尚未臻磨便為學者傳焉況世人咸將何
 晏集解致難而不曾以和預集解者妨且
 之集解既存二今之四百何必
 管同之局也而有斯感諸令熙寧九年居六

知不煩錄也

科註天台四教儀義卷第六

右六冊者就諦觀所錄天台四教儀永嘉
 沙門從義令註釋之惟肯亮憲僧正冠科
 文為註解本末符契訖予又為末代弘傳
 集起字調卷之集加佛陀冥助令遂自他
 悉地給而已

延曆寺西谷覺林房素靈謹刊校
 惟時慶長八年龍集卯黃鐘中浣

護國界蓋謂其斯歟願我大家士住意取捨耳頌曰
 我今為護妙法城
 不欲已身類三虫
 三乘五性向一乘
 開示悟入佛知見
 守護國界章下之下卷

于時元和三年丁巳孟冬中旬
 於比叡山延曆寺西塔北谷正觀院捐之

入品或入初品神智英利矣 又八十云若被名譽
 羅網利養毛繩眷屬集樹矣 要象也 此集解下卷文
 忍無法愛之相具如止七往見
 集者因講授披覽次為最淺學卒抄粹之聊扶尋討
 勞焉或先事引後或後文殊先初後雜亂其相未詳
 見者思之冀補於羈脛鴨脚備於初學九下云爾
 集解要文卷之下 未終

寬永三 寅 年十一月二十七日

此所傳之法並重初漸即是三藏有空之門復無處
立。或臨人然則酪即共般若義通初漸云其第三
明前篇方等則爲了義故義與論方等二三亦爲未
了四中道勝圓爲了義約修證者若至細論之五時
中三箇圓猶是未了義未開竟故今且約分々了與
未了須信前次共般若等皆未了義諦取斯義更莫
孤疑云

授決集下

于時元和四年戊午八月上旬

於山門寶幢院摺判施

時所聞之法並爲初漸即是三藏有空之門復無處
立。小成酪人然則酪即共般若義通初漸。其第三
明前篇方等則爲了義故義與論方等二三亦爲未
了四中道勝圓爲了義約修證者若至細論之五時
中三箇圓猶是未了義未開竟故今且約分々了與
未了須信前次共般若等皆未了義諦取斯義更莫

授決集下

五十

孤疑云

于時元和四年戊午八月上旬

於山門寶幢院摺判施

天台名目類聚鈔第一 諸宗下

教起由來事

私云五教之內第一事

凡如經論說者一切衆生皆本覺真如妙體法
性覺月朗無迷悟差別無生佛不同只是獨
一法界妙理也依之妙樂大師釋云真如海之
內絕生佛假名平等性之中無自他形相。
涅槃經云生々不可說生不生不可說不生々不可
說不生々々不可說。法華經云止々不須說我法
妙難思。又云諸法寂滅相不可以言宣。是本覺
無被相也。但何法性一理迷始次第
々々危強凡夫成下依之起信論云以不

于時元和四年戊午六月上旬

於比叡山寶幢院摺判施

圖更之

華嚴經云於一塵中塵數佛
 各變菩薩衆會中無盡法
 界塵亦然深信諸佛皆元
 滿矣
 入大乘論云
 諸佛說言一世界中無二
 佛出者爲彼鈍根小心眾
 生不爲利根大心者說○
 然諸四天下實有衆多轉
 輪聖王諸佛出世亦復如

山門藏本

通人說別大乘爲別乘說
 圓教矣
 寬永九年申年築食
 於延曆寺寶幢重院刊行之畢

法華經文字聲韻字訓篇集上

平短分 上聲分

播陽書寫山比丘快倫撰

假名韻綱目

具音附假 各五音聚

一	二	三	四	五
歌韻	真韻	真韻	真韻	真韻
文韻	佳韻	佳韻	佳韻	佳韻

○短時二津假
○長時二津假

陀羅尼咒

覆

差

略

若

右三冊註小字皆用古刻字不足分列是
 之大文字者新雕之寫毛足點畫雖予書
 之字形尚短若有筆畫之相連音韻之失
 錯難辨代見添削異同屬非細註之功不
 成一非佛種之錄者乎

普慶長十八年三月日理教房快倫謹誌

純好刊之

大日經開題

主法界淨心超十地以絕絕一如本覺孕三
身而離離况復昇茶性佛圓圓之又圓大我
真言本有之又本風水之龍不得動其波瀾
業轉之霧不能蔽其赫日恒沙眷屬鎮住自
心之宮無盡莊嚴優遊本初之殿然非輪王

云
說此字義此字具無量無邊義且說小分經

大日經開題

慶長十五年戊戌年四月廿一日

幸悅刊之

古本為過去聖賢出離生死煩瑣善世乃集
本等利益國語所請如件數白

年月日 姓名

寄六續緣口傳其本經心符口寶

玉澤不渴抄下

元和十年五月廿一日

淨書

曼荼羅品云事業形悉地安置諸佛子
壇中用事業壇之證也總意云外即內故其秘密
秘密也內即外故秘密即事業也只拘一門不
可局執者欽巨細料簡重重義門如別鈔矣

開心鈔下

品野山於西院開之

寬永元年八月十六日

開心鈔下

寬永四年七月七日於高野山左平次入淨善坂開

歷却難殫又更有深秘行觀依法問之讚曰
奇哉一心含万法
月心即一一無數
顯寄万行開此道
深修一念證心佛
大哉滿月遍十方
性相常如如亦旁
金蓮三寶藏之倉
唯信四時成覺位

心月輪秘釋一卷

于時覽永拾九壬辰曆仲秋吉辰月

一門普門之事

△三寶院流相傳一門果即普門果也是云一門即普門傳也此流意大日德諸尊德全同也然隨機本緣性欲且一門普門差降立也言依智樂欲名文殊依悲性欲名觀音隨定性欲名普賢等也隨菩提心論文諸尊皆同大毗盧遮那讚文開其證云何答法華開題云以蓮華尊爲主則具三千七尊及無量佛刹微塵身文殊則觀音妙慧慈氏則觀音大慈乃至多寶即觀音攝聚身釋迦則觀音化葉皆分身佛亦是觀立正覺余尊等亦准知乎非此尊具如是德哉可謗佛非儀軌同謗世佛者是皆指此人於自身即佛教者雖無疑惑之患初心時猶作老倒事故謂我是凡夫救非謗佛罪隨其入用心可有取捨者也

右古簞鉢於高野山往生院開山板

寬永十二年乙亥九月吉日

宜焦開之

云彼云此可仰可信

妄以護持

饒瑜伽最上之壇場

修金剛童子之秘法

若余者

求願早圓滿悉地速成就

乃至法界平等利益敬白

延德三年正月廿三日

記之畢 沙門印融

嘗寬永十五年九月日

於高野山 蓮福院開板之

不可妄用之有他情者亦不得妄用

問明律者能之耳

四分律制等諸國行事錄卷下

余於唐武德九年六月內爾時搜訪僧伍無偽俗
舉且閉戶依所學撰次但意在行用並筆書通不
事此文故言多集腹想有通通士余亦記志

慶長十二丁曆五月七日

大和州添上郡於元興寺極樂律院

安樂集卷下

斯集一部就現行本開刻印雅為爾學致治蒼生

也但庸唐之謬與魯難詳正本流傳後昆制定鹿使

乃至一聞之類固結九品之綠西已

此一部二卷令按合畢尚又攸鑲梓也

下列龍澤山 大巖寺隨流 鑲梓主雲龍

平晴慶長十八年甲申四月 日

遍先師對眾示曰我年閱齡類在世不久思將來
癡闇肝膽不安然我法授然阿畢法燈何銷然阿
是予之成若也遺事對此人可決不審云華為時
言是求思出也亦過介之遺誠也今以三代相承
轉記五卷決疑而已

選擇傳弘決疑鈔卷第五

當世流布決疑鈔異本萬多損落非一今依數

本今遂校合做單鑲梓也矣下州龍澤山大巖寺
住世比丘肇蓮社源譽隨流於後日值御正本學
者宜有漆劑上
于時慶長十四配年七月六日 鑲梓主雲龍

選擇傳弘決疑鈔卷第一

涉門良忠述

夫宗圓通者無佛之行廢遺方技者住生之業
雄猛世尊集時利見馬鳴大士契道宜聞尚設西
方密諸群品况時靈流季人稀知揚領會之賓千
無一二至如未階網駕各陳乳色言無有問闕與
寧古先梵皇憐斯因感導以淨土之一門濟以金
佛之一行方今正雜俱生乎選勸正行助正兼行
乎適尚稱名蓋世法藏比丘於一子地五劫盡思
十念萌因之故也加之三輩難異專念歸虎一念

遍先師對眾示曰我年閱齡類在世不久思將來
癡闇肝膽不安然我法授然阿畢法燈何銷然阿
是予之成若也遺事對此人可決不審云華為時
言是求思出也亦過介之遺誠也今以三代相承
轉記五卷決疑而已

選擇傳弘決疑鈔卷第五

下州於龍澤山大巖寺隨流時代板行者也
于時慶長十九配年七月六日 鑲梓主雲龍

阿弥陀經秘直談鈔上

九於此經用三分一來意分二釋名分三依
文解釋分也初來意者又於是二意初惣
一代教來意次別淨土門來意也初一代教
來意者大師云諸佛大悲心無二方便化門
等無殊捨彼莊嚴無勝土八相示現出閻浮
或現真形而無利物或同雜類化凡愚分身
六道無停息變現隨宜度有流矣三世諸佛

右此秘直談一部三卷者為末代改略誤
之文字印瀉畢

皆元和七年辛酉九月日 沙門良心

三州於平地善宗寺 梓刊

延文元年八月四日於西山本坊記之同
九日於光師和尚影前一過讀過之畢
應安四年五月二十五日於廬山蓮社一
之次聊加添削畢未再治不可披露之

大乘沙門仁空記

下慈州香取郡飯高卿法輪學校之工

厄幸免此一本轉錄梓矣加慨者雖
積年累月為生產之謀天性不敏而瞻
字字或罔辨避俗從正或弗知所從所
非況於七七之形无无之類乎歎語不
大衆刪削之以其不差耳

元和第八壬戌年十月十四日

昔元和六年庚申十二月日 華林 日從

從正本於武州江戶梓刊 本妙 日慧 實乘 日進

助顯唱導文集卷第一 沙門日澄撰集

第一開法事

止一云昔王不立廟於寺立廟於屠况好世值聖無益耶又婆羅門貨觸騰孔達者半者不者達者起塔禮供得生天開法之要功德若此佛為此益付法藏也
弘一云昔王不立至貨觸騰等者此明付法得益之相廐者說文云馬舍也屠者殺也傳中列付法人竟云親近賢善聽聞正法遠益來世如昔華氏國有一白象氣力勇健能滅怨敵若有罪人令象踏殺後時

天海藏

維摩詰所說經卷上 一名不可思議解脫 樹 姚秦三藏法師鳩摩羅什 譯

佛國品第一
如是我聞一時佛在毗耶離菴羅樹園與大比丘衆八千人俱菩薩三萬二千衆所知識大智本行皆悉成就諸佛威神之所建立爲護法城受持正法能師子吼名聞十方衆人不請友而安之紹隆三寶能使不絕降伏魔怨制諸外道悉已清淨永離蓋纏心常安住無礙解脫念定摠持辯才不斷布施持戒忍辱精進禪定智慧及方便力無不具足逮無所得不起法忍已能隨順轉不退輪善解法

卷甲身 今言二十七卷

今上皇帝 玉體安穩 倍增威光

刺照權現

征東大將軍左大臣源家光公武運長久

四海泰平 國家豐饒

佛法紹隆 利益無窮

印相武州山門東叡山宮 日光宮

山門三虎執行探題前毘沙門堂門跡

大僧正永海願主

寬永十五戊寅曆六月十六日

林氏幸宿花溪居士 乘行

元亨釋書卷第一

濟北沙門 師鍊 撰

傳一之 一受禪注科也本朝前譯經事以傳記配詳經久以義傳宗始此科矣

妙善提達磨 高僧達磨

藏 元昭寺道昭

北天竺善無畏 興福寺慈訓

金剛峯空海 弘法 延暦寺取澄 傳教

茲 青田印度季王第三子也

本朝僧史之筆曰梁曰唐曰宋三傳雖同若
皎若宣若寧十科或異慨茲海藏龍宮之失
護俄驚琅函玉軸之歸空天道好還行看印
板打就斯文復作正好點筆疾書增濟北之
陰涼壯海東之福地

天子萬歲 幸臣千秋

至德元年甲子六月日 疏

千時慶長四年戊亥月日

日東 洛陽 如庵 宗軌 撰行

つるくわうきふ日くは硯小むひて心なう
つるくわうきふ日くは硯小むひて心なう
くれもあやうう物々るるけき

此ニテハ此草子ノ序分也序リハアミタノ義アリ
ト毛緒也廊也トテ蠶ノイトクチメハ堂へ入ニ
ツ廊へ入ル如ク其ノ書へ入ノ端ナリ編集ノ心
ヲ慨略メアラハス云也外アミタノ義アリ
ハミ草トハ發端ノ辞ヲ以テ題号トスル也然
テ此草子一部ノ心ナリ
ハミ草トハサヒシキ也トハカコチクサソフヒ草ナ

此抄者壽命院法立安 凌醫家救療之暇常見
遠聞而漸終篇予披覽最奇之餘揮短毫聊
錄事狀耳

慶長第六辛丑 孟冬初九 也是更素然

慶長九曆開逢執除姑洗良辰
日東 洛陽 如庵 宗軌 刊行

延壽撮要

養生總論

黃帝問岐伯曰余聞上古之人春秋皆度百
歲而功地不義今時之人年不滿百而動
皆衰何也岐伯曰人之所失之邪故伯曰上
古之人其知道者能法陽和術飲食飲
飲之者不妄能節其欲新與神後而
其氣多而人不能也又酒者樂之
常以慾竭其精以耗其氣者不為持滿不
可持滿也此是於生樂而害其也

右の本文はめんす。十七の人、自然に養生の道に合はる古より
て人の智慧盛んで養生の道に合はる古より
と一衣服をり酒色をこの形神を勞
と最も天年を失はるをてはくす。黃
帝は時さへかくのことしいんや今の世は
道に入らぬひて人々ち山林に入世を
離るゆゑはあつ朝又世俗よりしん
言行さへ道よりかひぬとぞれりち道に入
人も少壯の時より常は道にきりていかで
道はしつらふは養生の道ひらく

神淵閣文庫

延壽撮要

養生之總論

黃帝問岐伯曰余聞上古之人春秋皆度百
歲而功地不義今時之人年不滿百而動
皆衰何也岐伯曰人之所失之邪故伯曰上
古之人其知道者能法陽和術飲食飲
飲之者不妄能節其欲新與神後而
其氣多而人不能也又酒者樂之
常以慾竭其精以耗其氣者不為持滿不
可持滿也此是於生樂而害其也

男と女と
二日四日六日は胎をうくり

女と男と

○既に懷妊

月はおかばせも或は横生逆産やなす或は胎

死せり

○懷妊の間

辛辣の物を食せず慈愛の心で生

ひを常し善言を聞善事を見善事を行ぬを

忠孝也

難經本義卷下

許昌府志

四明呂氏校正

三十一難曰三焦者何稟何生何始何終其治在
許可曉以不然三焦者水穀之道路氣之所終始也上
焦者在心下下膈在胃上口主內而不出其治在膻中
手少陰一廿六分直兩乳間陷者是中焦者在胃中脘
不上不下主腐熟水穀其治在臍傍下焦者當臍臍上
口主分別清濁主出而不內以傳道也其治在臍下一
可故名曰三焦其府在氣街行解

八十一難經之註解古來頗多就中視

滑伯仁之李義其有超深奧而無疆其

文詞明白而易時李朝未能特行維

時門下之醫生宜慨爾道救聚數世

訂之仍因工而令鑄板可謂救恤之心二

哉矣

慶長丁未春分之節

洛下李敬識



新鑲雲林神教卷之一

太醫院醫官金谿雲林龔廷賢子才編著

男懋陞

門生同邑吳濟民 全校

金陵書林周曰校刊行

歌曰

雲林清隱著歧黃藥括歌中要審詳其脈其證分
實何方何藥淵源冰劫破玄機如中鶴勿勞歧路問
亡羊醫家有此其神教萬世若生慶澤長

真中風

○陽厥陰風木脉浮滑弦數順沉細短滑逆

○中風口禁遲浮言謔實火數三菟孩

雲林神教附贅

龔公當日太醫官 施療專治富貴翰

歷岐黃精素難 方書着處是名端

醫鑑回春尤作長 常攤二帙撮要肝

七言五四為歌訣 政令童蒙誦習安

去重刪復纔編簡 若赴選鄉納小繁

名是曰雲林神教 的然百發百中完

今求善本新開板 不辨烏焉錯于千

庶幾高君加改正 洛陽醫德堂下刊

慶長八年癸卯陽月日

守三謹識

新增醫方大成發提卷首

為鵲華陀察聲色定生死候訣

病人五藏已奪神明不守聲嘶者死

病人循衣縫謔言者不可治

病人陰陽俱絕掣衣掇空妄言者死

病人妄語錯亂及不能語者不治熱病

者可治

病人陰陽俱絕失音不能言者三日半

慶長八年癸卯臘月既望

洛陽醫德堂刊

此而善攝生者何嘗不消思慮盛以道御神也
無失天信無逆氣宜抑其有餘者而不翼於勝
助其不及者而不贊其復是以喜怒哀樂憂恐有
所一而莫能亂精神魂魄意有所養而莫能傷
春風秋雨冬寒夏暑雖天道之變如凶荒札
瘥不能戕其患嗚呼安得圓機之士而興之共
論五行哉
素問入式運氣論奧卷下終

慶長十六辛亥初冬吉辰梅毒壽重刊

炒 丁カ、ノウス物ナト、テイルコト也
煉 子ル也
熬 煎シカラス也
伏 灰ニツツミテラク、雄ノカイコノアタヘミホトラ云也
露 夜ルサラス云也
曝 日ニサラス云也
暴 サフス也
飛 研テ、ニスリタテ、イサカテ、也
製 薑汁薑水鹽水酢ナトニ浸シコラル、云ル也

元和九年歲次癸卯春良日梅毒壽重刊

按入ルニ先生此民ヲ仁愛スルノ心至テ深シ故ニ
 神聖難實胃氣傷者勿使攻擊論一篇ヲ著シ亦此一
 部ノ旨約ニ攻擊宜詳審正氣須保護ト云等ノ語ミナ
 聖學ノ極之間々用心スヘキタメノ於言ナリ世ニ局方
 論ニ行ハレテ醫人疎學淺識ニテ四知之法ニクラク九
 折ニ勞ミ廢シ妄ニ瀕ニ効テ攻擊ノ藥ヲ與人ハ心ヲ
 上ニ傷テ人ヲ殺セ也改先生書以戒

致政餘論抄卷之四終

寛永三年歲舍丙寅初秋良日

梅壽刊行

苓去皮各八錢

若要補益加白朮或一兩或一兩五
 錢或一兩八錢川牛膝一兩五錢共十
 一味最妙

慶長甲寅仲春吉日
 紀州和歌山見義堂梓

幸仁テ玉石散用枯樓乾薑略舉大體如此
 其餘復有數十條別注在後幸復有毒用之
 必須生薑此是取其所畏以相制爾其相須
 相使者不必同類猶如和羹調食魚肉葱豉
 各有所宜其相宣發也

藥有酸鹹甘苦辛五味又有寒熱溫涼四
 氣又有毒無毒陰陽燥濕燥濕燥濕生肌
 地所出真偽陳新並各有法

扶桑國平安城
 如庵宗軋模行

惟時文祿第五龍集系北湍難日南至

泰定養生主論

逸人洞虛子撰

○養生主論

甚哉墳素之書以心爲身中君主之官
神明出焉以此養生則壽沒齒不殆主
不明則道閉塞而不通形乃大傷以此
養生則殃故莊子有養生主篇蓋有心
者必有身故人我交相勝而物欲蔽其
明也昔者太王之去國也召其耆老而
告之曰君子不以其所以養人者害人

晉寬永第七給龍集上章敦辨

白藏夷則吉辰治板焉

新町通町頭

室町藥師町

蘆葦左衛門

宇野善五郎

難經提徑下卷終

寬永十四年孟秋申旬

二条通觀音町

風月宗知刊行

此難經提徑者爲身中君主之官
神明出焉以此養生則壽沒齒不殆主
不明則道閉塞而不通形乃大傷以此
養生則殃故莊子有養生主篇蓋有心
者必有身故人我交相勝而物欲蔽其
明也昔者太王之去國也召其耆老而
告之曰君子不以其所以養人者害人

庚辰年十月

廣文堂小治

天台四教儀集註卷上

南天竺門

榮國

集

天台四教儀

天台山名也。昔晉謝靈運始創之。一雨俄既。清而天。濁

是也。是二本。猶省。三。俗。釋。台。者。單。台。也。
一。定。分。下。應。天。三。合。款。以。名。焉。如。攝。行。六。上。
此。山。即。大。師。攝。身。入。寂。之。所。蓋。以。兩。方。風。俗。推
不。同。每。此。上。列。各。篇。皆。改。以。此。處。顯。其。人。之。復
以。入。合。之。則。天。合。為。守。戒。今。題。意。在。身。四。教。者
是。明。化。儀。化。法。有。乎。不。校。今。但。言。四。教。者。以
一。古。互。題。義。攝。兩。體。蓋。非。化。儀。無。以。明。化。法。也
以。釋。一。書。之。旨。莫。越。於。斯。教。者。單。入。被。下。之
言。亦。詮。理。化。物。為。我。門。或。約。化。儀。立。兩。乃。持。統
大。化。儀。四。教。文。義。整。足。付。運。攝。得。三。家。旨。義。

部之文註於其無便於披覽者歟其間一二與諸家有同異者蓋述所聞於先德非任曾臆也若夫文未正修乘觀法文雖簡約理亦備馬諸新學人究心于茲忘言忘思筌畢俱擲奚以是爲然能爾也則無適而不可亦豈雖是云手哉時無統甲戌夏五南天竺白蓮華沙門龍謹序

慶長第五庚子歲臘月下澣吉辰

正雲刊之

速聖入註畫龍

天海藏

清江雜錄

弄日寔法將者不帶刀杖之重陳
 之巨難若忍辱之堅甲於慈悲
 弱劍於信力手摧破執權之軍
 之魔賊猶恨重崇沙王之夙衛
 之清泉蠶雖然八教之堅陳
 軍三類之強敵漸挫得無之
 之

時慶長龍集舍于辛丑無射仲九遂功而已

願主俊長日燈

印造清純日源

校勘爲山日顯

三十七 四月廿五日 左馬廐頭相模中時宗
 西院卒號法光寺自文長五郎甲子
 年 安永三年二十一年 國許甲子
 王子惟親王二代也 初帥
 者父時宗子時宗二代也

日 入註讀卷第五
 歸身禮諸三寶 妙法蓮華經

上 山國穿業際 法界眾生共成

慶長 曆十月十日 卯申 工部卿

然傳燈不載名字機緣茲不及贅
 正宗讀終

小師 居汪 焚香拜手誓首謹書

千乳筆

慶長十三戊申仲秋吉辰
 西京花園一持軒板行之

一八
 三三

三三

正宗讀終

小師 居汪 焚香拜手誓首謹書

千乳筆

首知三申仲冬堂十雲南妙處方

工刊

慶長十三戊申仲秋吉辰

富小器讀州寺町 中村長兵衛

然傳燈不載名字機緣茲不及贅

正宗讀終

小師 居汪 焚香拜手誓首謹書

千乳筆

慶長十三戊申仲秋吉辰

富小器讀州寺町 中村長兵衛

大乘起信論

大者當體為目包含為義乘者就前

信即能信之心心境合目也此即大乘之起信又亦起大乘之信又大者就義謂體相用乘者就人謂菩薩等又依雜集論由與七種大性相應故名大乘一境二行三智四精進五方便善巧六證得七業起謂發起以有本覺內熏為因善友聞熏為緣於此勝境發希有信能令心淨如水清珠何故但明信而不言餘行以是行本故論為初機故下文云自信已性知心妄動修遠離法又華嚴云信為道源功德母等論者建立決了可軌文言判說甚深法相道理依決判義名之為論又論者集法議論也謂假立賓主往

深廣大義我今隨順惣持說

結上所說也於中上句結義下句結

迴此功德如法性普利一切衆生界

迴向利益

也於中上句明德廣下句辨遐露

大乘起信論疏卷下

惟時慶長第十七壬子曆桂秋良日

日東若耶府 利庵正節 撰行

洛陽 飯田久左衛門勝家新刊

無量壽經鈔卷第一

南無釋迦牟尼佛 望西樓沙門了慧述

南無阿彌陀佛

將釋此經略開三門一明大意二釋題名三解經文第一中四一教起所因二所說本欲三宗體定判四藏教所攝○初教起所因者如般舟讚云或漸或頓明空有根性利若皆蒙益鈍服無智難開悟萬劫修功實難續一時煩惱百千間若待娑婆證法忍六道恒沙

正安二年

子復

十月二十四日拭老眼清書也

留贈後見共期往生

沙門了惠

白

右望西樓七帖一部者為末代興隆後改文字開板措寫之畢

署慶長十九甲寅歲三月二十五日

願主權大僧部

遍照發揮性靈集卷第一

大遍照金剛和尚文

印融記之

遊山慕仙詩 并序

秋日有勅令看神泉苑

贈野陸別歌 并序

喜雨歌

贈良相公詩

入山興

山中有何樂

六識今何在

寒苔緣壞緣

襄中糧尚在

蒼蒼隴雲合

四大劣餘名

夏草鑽墳生

松下髮猶青

瑟瑟夜松聲

續遍照發揮性靈集補闕抄卷第十終

於洛陽寺町市右衛門開板之

性靈集十

四十二

慶長十九曆甲寅仲夏吉日

セラヒテソノ行狀ヲレレハハリマコノホカ法本房行空成
覺房幸西ハトモニ一念義ヲタテハ上人ノ命ヲモキレ
ニヨリテ門徒ヲ擯出セラレテ覺明房長西ハ上人没後
ニ出雲路ノ住心房ニ依止シ諸行本願ノムヲ執シテ選
擇集ニ違背スコノ三人名譽ノ仁タリトイヘトモ上人ノ
冥慮ハカリカタキニヨリテ門弟ノカスニセザルトコロナリミ
ム人アヤシムナカシ

傳繪詞卷十終

于昨宵永三 寅曆孟夏上旬

於四條寺町大文字町中野市右衛門尉開之

一恭畏而學文講武之士濟々胥會豈爲乏人材乎
談論說教之徒亦穆々布列豈復爲乏僧寶乎今也
恭畏一錫飄然如鳥鵲之遶樹而失可依之枝如一
蛇之無穴而號於中野矣欲出則無薦之者欲止則
無托之者不願爾旅困之鄙猥瑣細而出斯不可爲
之言非特誹一孤僧三州爲無學者矣僭踰之罪豈
可逃乎恭畏其念之

南浦文集卷之下終

寛永乙丑仲秋四條寺町校正刊行

元亨釋書卷第一

清比沙門 師錄 撰

傳智一之一

南天竺菩提薩磨

高麗慧灌

吳國智藏

元興寺道昭

北天竺善無畏

興福寺慈訓

唐國鑑真

延曆寺景澄

金剛峯空海

菩提達磨者南印度香至王第二子也蕭梁普通元年庚子來支那與武帝說第一義帝不契乃渡江入魏居嵩山少林寺經カ白歸天竺其後八十有六年

院事未幾百廢俱舉仍圖重刊茲書費用不貲遂命在城等持比丘周信儼詞製疏巡叩十方諸大

檀那貴官長者縉白男女若見聞者慨然樂施以濟版事其獲福可量也哉疏曰維元亨擇氏之編寔

本朝僧史之華曰梁曰唐曰宋三傳雖同若皎若宣

若寧十科或異慨茲海藏龍宮之失謹假驚琅函玉

軸之歸空天道好還行看印板打就斯文復作正好

點筆疾書增濟比之陰涼卅海東之渴地

天子萬歲 宰臣千秋 至德元年甲子六月日既

十六

洛陽二條通鶴屋町

元和三丁巳曆五秋上旬 寺開開板

鹽山和泥合水集上

俗人來問禪門ニハ教ノ外ニ別ニ傳テ文字ヲ立スト云ト一ヘトモ師ヲ尋子道ヲ訪フコト敎家ヨリモ甚レ何レノ契シカ敎ノ外ト云ン又古人ノ語録ヲ見詰顯シ提撕スルヲ見ニ豈是ヲ文字ヲ立スト云ンヤ 敎外別傳ノ真旨如何師便居士ト喚彼即應諾ス師曰何レノ教ヨリカ這箇ヲ得タル彼便點頭レテ禮ヲナス 師曰來ラント要スレハ自ラ來リ問ハント要スレハ自ラ問テ他人ノ力ヲニ依ス佛祖ノ敎ヘシカラ

與麼若要爲兒孫作擎策曲一任命工鐫梓焉丙子之鹽山和泥合水集耳

鹽山和泥合水終

寬永丙寅林鐘日

板開

夢中問答集上

此集有兩本

此本爲正

問衆生ノ苦ヲヌキテ樂ヲアタルコトハ佛ノ大慈大悲ナリシカルシ佛教ノ中ニ入ノ福ヲ求テ制スルコトハ何故ソヤ
答世間ニ福ヲモトムル人或ハ商賈農作ノ業ヲイトナミ或ハ利錢賣買ノ計コトシメクラシ或ハ工巧伎藝ノ能ヲホトコシ或ハ奉公給仕ノ功ヲイタス其シワサハ各コトナシトモ其志ハ皆同シ其アリサマシ見ニ生涯タ、身心ヲ苦勞スルハカリニテ其志ノコトクニ求得タル福ヲナシ其中ニ

夢中問答集上

此集有兩本

此本爲正

問衆生ノ苦ヲヌキテ樂ヲアタル事ハ佛ノ大慈大悲ナリシカルヲ所教ノ中ニ人ノ福ヲ求テ制スル事ハ何故ソヤ
答世間ニ福ヲモトムル人或ハ商賈農作ノ業ヲイトナミ或ハ利錢賣買ノ計コトシメクラシ或ハ工巧伎藝ノ能ヲホトコシ或ハ奉公給仕ノ功ヲイタス其シワサハ各コトナシトモ其志ハ皆同シ其アリサマシ見ニ生涯タ、身心ヲ苦勞スルハカリニテ其志ノコトクニ求得タル福ヲナシ其中ニ

夢中問答集上

此集有兩本

此本爲正

問衆生ノ苦ヲヌキテ樂ヲアタル事ハ佛ノ大慈大悲ナリシカルヲ佛教ノ中ニ人ノ福ヲ求テ制スル事ハ何故ソヤ
答世間ニ福ヲモトムル人或ハ商賈農作ノ業ヲイトナミ或ハ利錢賣買ノ計コトシメクラシ或ハ工巧伎藝ノ能ヲホトコシ或ハ奉公給仕ノ功ヲイタス其シワサハ各コトナシトモ其志ハ皆同シ其アリサマシ見ニ生涯タ、身心ヲ苦勞スルハカリニテ其志ノコトクニ求得タル福ヲナシ其中ニ

夢中問答集上

此集有兩本

此本爲正

問衆生ノ苦ヲヌキテ樂ヲアタル事ハ佛ノ大慈大悲ナリシカルヲ佛教ノ中ニ人ノ福ヲ求テ制スル事ハ何故ソヤ
答世間ニ福ヲモトムル人或ハ商賈農作ノ業ヲイトナミ或ハ利錢賣買ノ計コトシメクラシ或ハ工巧伎藝ノ能ヲホトコシ或ハ奉公給仕ノ功ヲイタス其シワサハ各コトナシトモ其志ハ皆同シ其アリサマシ見ニ生涯タ、身心ヲ苦勞スルハカリニテ其志ノコトクニ求得タル福ヲナシ其中ニ

ノ礼墮ニ危ノ不安事ハ仕用スル所ノ一人ニヨル也不
賢人ヲ用レハ邦ハ不安也邦ノ光榮ナル事ハ一人
ノ賢人ノ善ヲコイテカヘハツノ甘ハサカヘ安也國家ニ
用賢トキハ榮ヲ賢ヲ皆トキハ危也魏公ノ自誓テ前ノ
過ヲ改メ賢人ヲ用イトスル也

前集第十二卷

于時寛永元年 歲次月吉辰

二兵衛門板

大學章句序 輯釋ニハ作大學朱子序 大全ニハ作

○明經ノ儒者ハ十三經ヲ以テ本トス十三經トハ毛詩尚
書禮記周易左傳五經之加公羊穀梁七經加周禮儀禮九經
加論語孝經十一經加莊子老子十三經也四書ト云
事ハ昔ハシ宋程明道程伊川禮記ノ中ニ大學中
庸ノ二篇ヲ抽出テ論孟ニ加テ四書ト名テタリ是ヨリ以テ
四書ト云事アラハタリ本注ハ禮記ニアリハ聖文カ庄也
漢儒ハ心理ノ學問ヲ本支トモ見カス此書ノ正ツムリト
スル二程子カ見テ顛倒スル文ヲキナシテ注フガル也
此書ハ皇子ノ作スル也類同早世ノ不傳諸曾參ハ魯地ノ
上ニキ孔子道ヲ以テ心傳心ス一貫ノ道ヲハ曾子カ一

大學章句序 輯釋ニハ作大學朱子序 大全ニハ作

明經ノ儒者ハ十三經ヲ以テ本トス十三經トハ毛詩尚
書禮記周易左傳五經之加公羊穀梁七經加周禮儀禮九經
加論語孝經十一經加莊子老子十三經也四書ト云事ハ昔ハシ宋程明道程伊川禮記ノ中
ヨリ大學中庸ノ二篇ヲ抽出テ論孟ニ加テ四書ト名テ
タリ是ヨリ以テ四書ト云事アラハタリ本注ハ禮記ニ
アルハ鄭玄カ注也漢儒ハ心理ノ學問ヲ本支トモ見分
ス此書ノ注シムサトスル二程子カ見テ顛倒スル文ヲ
シキナシテ注フガル也此書ハ曾子カ作スル也類同早
世ノ不傳諸曾參ハ魯地ノ上ニキ孔子道ヲ以テ心傳心

丹

中庸章句序

中庸何爲而作也子思子愛道學之失

其傳而作也

先出中庸ハ禮記ノ十六卷ノ
子カニタツ中庸ノ二字ハ程明道程伊川ノ兩
有程ニシテコトサタメ也句ハ人學ノ時ノ如クガノ
ソレト云章句ト云事ハ注ヲ作テ一章ノ一分テミリタ
程ニシテ章句ノ序ハ朱子カ注ヲ作テ其後序ヲ
書ニ載ニテ章句ノ序ト云ツ章句ハ明道程伊川ノ
以テ明ニシテ程ニ云ツ句ハ局也一一句ノ分テ見ル
事ハ餘ハ局ヲ明ノ一局ハ有テ其起カ見ル程ニ
ノ序ハ論語ノ序ニ似ト云云似ト云ハ似ハノリ也
此序一部ノ書ノ心ノフル程ニシテ序ハ緒也アガ

恨歌

白樂天

此ノ帳歌 起ハ唐ノ玄宗皇帝御在位年久シテ一天
ノ政ヲ正シ玉ヘルニヨリ勤政樓花萼宮務本閣ト云三
ノ宮殿ヲ立ラシメリ先勤政樓ト云ハ政ヲ勤リ樓閣也
此ノ宮殿ハ何モ是ハ玄宗ノ平生ノ御在所ヨリハ西
ニアル也花萼宮ヨリ少シ南ニアル勤政樓務本閣ト
云勤政樓ト云題ニテ三體詩ニ杜牧カ作詩ニ八千
狄佳節名在次承露絲囊世已無唯有紫苔偏稱
當年年雨上金鋪此ハ玄宗蜀國へ落ラレテ乱
後ノ事也玄宗誕生ノ日百僚花萼樓ニテ酒宴ハ八月
初五日ヲ以テ萬歳ノ千飲萬歳ノ祝也ハ廿一

長恨歌

連當氏

白樂天

此長恨歌ノ起ハ唐ノ玄宗皇帝御在位年ヲシテ天下
ノ政ヲ正シ玉ヘルニヨテ勤政樓花萼宮務本閣ト云三ノ
宮殿ノ立ラシタリ朱勣政樓ト云ハ政ヲ勤ル樓閣也此三ノ
宮殿ハ何モ是ハ玄宗ノ平生ノ御在所ヨリハ西ニアル也花
萼宮ヨリ少シ南アルヲ勤政樓務本閣ト云勣政樓ト
云通ニテ三體詩ニ杜牧力作詩ニハ千秋佳節名空在承
露絲叢世已無惟有紫苔偏滿懸年々雨上金鋪此
ハ玄宗獨閣ノ落シテ亂以後ノ跡也玄宗誕生ノ日百傳
花萼樓ニテ酒宴ス八月初五日ヲ千秋節トス千秋萬歲
ト祝也其モ昔ニトシハ名ハカリ空ク幾テ今ハナキ也承露絲
臺世已無ハ八仙臺ハ曉ノ露ヲナステ夕ク生ルハ浦山ニ

四河入海卷第一之二 前建長笑雲清三述

二十七日自陽平至斜谷宿於南山中蟠龍寺

皇祐元年譜帝祐八年癸卯先生二十八
宿蠲龍寺詩又詩續紀作熙寧祐七年壬寅
先生二十七在鳳翔七月二十七日全軫錄
由下馬發懷遠蕭蠲龍寺詩有之兩說不
同故并錄之 勝云此篇二段起句以下十
六句一段門前以下四句一段
一云前詩一題二是口上云六集祐七年七月廿六
日以此詩八其次口上云九程七月廿七日一作ソ
橫槎晚渡碧澗口 霜夜入南山谷 俗谷中晴
水響澗々 崖上星明燈々
橫槎 勝云或云橫槎蓋言独木橋也刻謂卷

真寶之抄卷之十三終

○已前共十五首 第一句假令問意第二句
之休巾以一二呼以三四應也趙瞻氏曰
此詩皆呼應開合也一句呼二句應三句
開四句合也
虛接詩至此四十四首實接ヲ第一トスルハ
詩ハ實事ヲ賦スルカ本也サテ虛接ヲ次トスルハ
以虛接實ハトニ

增註唐賢絕句三體詩法卷之三

寬永第三 丙寅 李秋念七

木室二兵衛尉
刊行了



德島大學
藏書

周易上經乾傳第一

王弼註

䷀ 乾元亨利貞初九潛龍勿用 文皆
機矣

九二見龍在田利九大人 龍居於地上故曰
見龍在田利九大人

九三君子終日乾乾夕惕若厲无 九三居下上之間故曰夕惕若厲无
咎

九四或躍或潛天不 九四居上二之下故曰或躍或潛天不
吝

九五夫大人 九五居上二之上故曰夫大人
知時

反丈

自大過以下卦不反對或疑其詩簡今以韻協
之人以非誤未詳何義

周易卷之二十終

寬永二年南呂下句

二條觀音町中嶋久兵衛聞之

尚書卷第一

堯典第一

虞書

孔氏傳

昔在帝堯聰明文思光宅天下言聖德將遜

于位讓于虞舜遜也老使作堯典堯典言堯

可為百代曰若稽古帝堯若順皆也恭順

帝曰放勳欽明文思安安如上也之功德而

以敬明天思之四德允恭克讓光被四表格

于上下允信克讓能光格至也既有四德又

地克明俊德以親九族能明俊德之士任用

尚書卷第一

堯典第一

虞書

孔氏傳

昔在帝堯聰明文思光宅天下言聖德將遜

于位讓于虞舜遜也老使作堯典堯典言堯

可為百代曰若稽古帝堯若順皆也恭順

帝曰放勳欽明文思安安如上也之功德而

以敬明天思之四德允恭克讓光被四表格

于上下允信克讓能光格至也既有四德又

信恭克讓故其名聞充格四外至于

尚書卷第一

堯典第一

虞書

孔氏傳

昔在帝堯聰明文思光宅天下言聖德將遜

于位讓于虞舜遜也老使作堯典堯典言堯

可為百代曰若稽古帝堯若順皆也恭順

帝曰放勳欽明文思安安如上也之功德而

以敬明天思之四德允恭克讓光被四表格

于上下允信克讓能光格至也既有四德又

信恭克讓故其名聞充格四外至于

尚書卷第一

堯典第一

虞書

孔氏傳

昔在帝堯聰明文思光宅天下言聖德將遜

于位讓于虞舜遜也老使作堯典堯典言堯

可為百代曰若稽古帝堯若順皆也恭順

帝曰放勳欽明文思安安如上也之功德而

以敬明天思之四德允恭克讓光被四表格

于上下允信克讓能光格至也既有四德又

信恭克讓故其名聞充格四外至于

毛詩卷第一

周南關雎詁訓傳第一

毛詩國風

鄭氏箋

關雎后妃之德也風之始也所以風化天下而正夫婦也故用之鄉人焉用之邦國焉風也教也風以動之教以化之詩者志之所之也在心為志發言為詩情動於中而形於言言之不足故嗟歎之嗟歎之不足故求歌

毛詩卷第一

周南關雎詁訓傳第一

毛詩國風

鄭氏箋

關雎后妃之德也風之始也所以風天下而正夫婦也故用之鄉人焉用之邦國焉風風也教也風以動之教以化之詩者志之所之也在心為志發言為詩情動於中而形於言言之不足故嗟歎之嗟歎之不足故求歌

毛詩卷第一

周南關雎詁訓傳第一

毛詩國風

鄭氏箋

關雎后妃之德也風之始也所以風化天下而正夫婦也故用之鄉人焉用之邦國焉風也教也風以動之教以化之詩者志之所之也在心為志發言為詩情動於中而形於言言之不足故嗟歎之嗟歎之不足故求歌

寵於桓王桓王屬詒周公辛伯諫曰並后

匹嫡庶也兩政臣道禍國都也亂之本也

周公弗從及於

春秋經傳集解桓公第二

與三有佳入宗程氏之入古增林津梁宋幸此也遺此若作尚序什物慶長七年壬子閏十月廿七日

禮記卷第十三

禮記卷第十三

喪大記第二十二

禮記

鄭氏註

喪大記第二十二

君大夫徹縣士

去琴瑟

縣諸侯軒縣大夫判縣士特縣去琴瑟

者不命

寢東首於北牖下者恒居北牖下北牖

比墻下

廢牀徹囊衣加新衣體一人始生在地

去牀

其生氣未滅衣則所加者新朝服矣

互言之也

加朝服者視其終於正也體手足也

四人持之

男女改服為賓客來問病亦

不能自屈伸也

男女改服朝服也庶人深衣

疾

病外內皆埽病也疾困曰病君大夫徹縣士

去琴瑟

縣諸侯軒縣大夫判縣士特縣去琴瑟

者不命

寢東首於北牖下者恒居北牖下北牖

之士

廢牀徹囊衣加新衣體一人始生在地

比墻下

廢牀徹囊衣加新衣體一人始生在地

去牀

其生氣未滅衣則所加者新朝服矣

互言之也

加朝服者視其終於正也體手足也

四人持之

男女改服為賓客來問病亦

禮記卷第十三

喪大記第二十二

禮記

鄭氏註

春秋經傳集解隱公第一

杜氏 盡十一年

傳惠公元妃孟子

言元妃明始適孟子卒

夫死不從夫

繼室以聲子生滕公

也蓋孟子之姪婦也

諸侯始娶則同姓之國

以姓婦元妃死則次妃攝治內事猶不得

謂之繼室宋武公生仲子仲子生而有文在

其手曰為魯夫人故仲子歸于我

婦人謂嫁

理自然成字有若

生桓公而惠公薨

春秋經傳集解隱公第一

杜氏 盡十一年

傳惠公元妃孟子

言元妃明始適孟子卒

夫死不從夫

繼室以聲子生隱公

也蓋孟子之姪婦也

諸侯始娶則同姓之國

以姓婦元妃死則次妃攝治內事猶不得

謂之繼室宋武公生仲子仲子生而有文在

其手曰為魯夫人故仲子歸于我

婦人謂嫁

理自然成字有若

生桓公而惠公薨

別其是非也

論語卷第十

經一千二百二十三字
註一千一百七十五字

慶長十四年巳酉九月日

洛納宗典開板

友傳刊

別其是非也

論語卷第十

經一千二百一十三字
註一千一百七十五字

慶長十四年巳酉九月日

洛納宗典開板

友傳刊

論語學而第一

何晏集解

子曰學而時習之不亦說乎

馬融曰子者男
子之通稱謂孔

子也王肅曰時者學者以時論習之有則自

遠方來不亦樂乎

包氏曰同人不知而不愠

不亦君子乎

包氏曰凡人有有子曰

弟其為人也孝弟而好犯上者鮮矣

包氏曰凡人有有子曰

論語學而第一 凡十六章

何晏集解

子曰學而時習之不亦說乎

馬融曰子者男
子之通稱謂孔

子也王肅曰時者學者以時論習之有朋自

遠方來不亦樂乎

包氏曰同人不知而不愠

不亦君子乎

包氏曰凡人有有子曰

弟其為人也孝弟而好犯上者鮮矣

包氏曰凡人有有子曰

別其是非也

論語卷第十

經一千二百二十三字
註一千一百七十五字

世園珠考以大學情士清原秀順本

寫點輒莫許他之瞬一秘

慶長訪集牙八隻不吉辰涉川豐前寄

孟子題辭

孟子題辭者所以題號孟子之書本末指義
文辭之表也孟姓也子者男子之通稱也此
書孟子之所作也故摛謂之孟子其篇目則
各自有名孟子鄒人也名軻字則未聞也鄒
本春秋邾子之國至孟子時改曰鄒矣國近
魯後為魯所并又言邾為楚所并非魯也

孟子卷第十四

開卷上慈生今明正題月

孟子卷第三

金澤文庫

公孫丑章句上

凡九章

公孫丑者公孫姓丑名孟子弟子也丑有
政事之才問管晏之功篇論語子路問政
故以
題篇

公孫丑問曰夫子當路於齊管仲晏子之功

可復許乎

夫子謂孟子許猶與也如使夫子
得當仕路於齊而可以行道管夷

可復與乎

孟子曰子誠齊人也知管仲晏

趙氏孟子題辭



孟子題辭者所以題號孟子之書本末指義
文辭之表也孟姓也子者男子之通稱也此
書孟子之所作也故摛謂之孟子其篇目則
各自有名孟子鄒人也名軻字則未聞也鄒
本春秋邾子之國至孟子時改曰鄒矣國近
魯後為魯所并又言邾為楚所并非魯也今

梁惠王者魏惠王也魏國名惠謚也王號也時天下有七王皆僭號者也猶春秋之時吳楚之君稱王也魏惠王居於大梁故號曰梁王聖人及大賢有道德者王公侯伯及卿大夫咸願以爲師孔子時諸侯問疑賢體若弟子之問師也曾衛之君皆尊事焉故論語或以弟子名篇而有衛靈公李氏之篇孟子亦以大儒爲諸侯所師是以梁惠王滕文公題篇與公孫丑等爲一例也

又音銅也又音入聲

案七音韻鏡云舊韻上平聲東字爲頭山字爲末有謂曰出東方甲乙木內山之沒也下平聲先字爲頭平聲本無上者謂先聲傳而後輩之精也詳七音韻平聲本無上之說分舊韻但以平聲字繁以盡爲二卷宋景祐間丁怡林李詒與司馬文正公爲傳作集韻始以平聲上平聲下爲卷目今因之

五
樂獨用

四 支與趾之通

六 魚蜀用

古今韻會舉要卷之一

平聲上

七音韻鏡云舊韻上平聲東等爲韻山字爲末者謂日出東方甲乙木西山之沒也下平聲支字爲韻凡字爲末者謂先輩傳與後輩之精也詳七音韻平聲本無上下之分舊韻但以平聲字爲韻故極爲一卷宋景祐初丁翰林奏詔與司馬文正公等備作算韻始以平聲上平聲下平聲自今因之

- 一 東獨用
- 二 冬與鍾通
- 三 江獨用
- 四 支與脂之通
- 五 微獨用
- 六 魚獨用

古今韻會舉要卷之一

平聲上

七音韻鏡云舊韻上平聲東字爲韻山字爲末者謂日出東方甲乙木西山之沒也下平聲支字爲韻凡字爲末者謂先輩傳與後輩之精也今詳七音韻平聲本無上下之分舊韻但以平聲字爲韻故極爲二卷宋景祐初丁翰林奏詔與司馬文正公等備作算韻始以平聲上平聲下平聲自今因之

- 一 東獨用
- 二 冬與鍾通
- 三 江獨用
- 四 支與脂之通
- 五 微獨用
- 六 魚獨用



指微韻鑑卷終

慶長戊申中春吉日
下洛潤軒書院藏

董部 一 五十	檻部 三 五十	琰部 七 五十	寢部 七 四十	有部 四 四十	迥部 一 四十	梗部 八 三十
董部 一 五十	儼部 四 五十	忝部 一 五十	咸部 八 四十	厚部 五 四十	拯部 二 四十	耿部 九 三十
董部 一 五十	范部 二 五十	湛部 二 五十	敢部 九 四十	黠部 六 四十	等部 三 四十	靜部 四 四十

三皇本紀

補史記

小司馬氏撰并注

小司馬氏云太史公作史記古今君臣宜應上自開闢下迄當代以爲一家之首尾今闕三皇而以五帝爲首者正以大戴禮有五帝德篇又帝世皆叙自黃帝已下故因以五帝本紀爲首其實三皇已還載籍罕備然君臣之始教化之先既論古史不合全闕近代皇甫謐作帝王世紀徐整作三五歷皆論三皇已來事勢亦近古之一證今並採而集之作三皇本紀雖復淺近聊補闕云

太皞庖犧氏風姓代燧人氏繼天而王母曰華胥履大人迹於雷澤而生庖犧於成紀蛇

三皇本紀

補史記

小司馬氏撰并注

小司馬氏云太史公作史記古今君臣宜應上自開闢下迄當代以爲一家之首尾今闕三皇而以五帝爲首者正以大戴禮有五帝德篇又帝世皆叙自黃帝已下故因以五帝本紀爲首其實三皇已還載籍罕備然君臣之始教化之先既論古史不合全闕近代皇甫謐作帝王世紀徐整作三五歷皆論三皇已來事勢亦近古之一證今並採而集之作三皇本紀雖復淺近聊補闕云

本皞庖犧氏風姓代燧人氏繼天而王母曰

三皇本紀

補史記

小司馬氏撰并注

小司馬氏云太史公作史記古今君臣宜應上自開闢下迄當代以爲一家之首尾今闕三皇而以五帝爲首者正以大戴禮有五帝德篇又帝世皆叙自黃帝已下故因以五帝本紀爲首其實三皇已還載籍罕備然君臣之始教化之先既論古史不合全闕近代皇甫謐作帝王世紀徐整作三五歷皆論三皇已來事勢亦近古之一證今並採而集之作三皇本紀雖復淺近聊補闕云

太皞庖犧氏風姓代燧人氏繼天而王母曰華胥履大人迹於雷澤而生庖犧於成紀蛇

後漢書注補志序

臣昭曰昔司馬遷作史記爰建八書班固因廣是曰十志天人經緯帝政絃維區分源與開廓著述創藏山之秘寶肇刊石之遐貴誠有繁於春秋亦自敏於改作至乎陳氏執簡東觀紀傳雖顯書志未聞推檢舊記先有地理張衡欲存炳發未有成功靈憲精遠天文已煥自桑邕大弘鳴條寔多紹宣協妙元卓律曆以詳承洽伯始禮儀克舉郊廟社稷祭

立齋先生標題解註音釋十八史略卷之一

前建上黨陵

後學臨川

審易松塢

王逢

建陽縣

南康

何景春

指休列

太古

以本德王

六

歲起攝提

寅口攝提格

而化

上

古氏

弟

兄弟十二人

各一萬八千歲

以火德王

兄弟

十一人

亦各一萬八千歲

兄弟九人

分

歷

上

之

也

易曰

君子

鮮

九

古今歷代十九史略通考總括

歷代國號歌

天皇地皇人皇氏名曰三皇居上世太昊炎帝

及軒轅唐虞紹之為五帝

高辛唐虞為五帝今依五帝

胡氏并易大傳止之如此

一國鼎峙漢魏吳

魏魏禪晉晉又平吳天下混

晉者為五胡

此隅

言天下分而為

南則東晉過江左宋齊梁

魏魏禪晉晉又平吳天下混

晉者為五胡

此隅

言天下分而為

南則東晉過江左宋齊梁

魏魏禪晉晉又平吳天下混

晉者為五胡

此隅

貞觀政要卷第十終

元和九

三條白壁町

要令字內之人

參末

元和才二歷丙辰書雲

五山

守藤誌

白樂天



歷代君臣圖像序

謹按語曰見賢思齊焉見不賢而內自省也又曰三人行必有我師焉擇其善者而從之其不善者而改之夫見其賢與善則思齊而從之不善則自省而改之是二者皆我之師而爲學切已之功無過乎此矣一日

內出孔聖畫真一軸歷代君臣圖

像一帙

命揀弘文館員製贊以進仍

命臣符序之臣伏念

孔子通紀卷之一

廣東提學副使上虞潘府校著
弟建陽縣典史潘正捐俸刊行

前紀上

古者庖犧氏之王天下也仰則觀象於天
府則觀法於地觀鳥獸之文與地之宜近
取諸身遠取諸物於是始作八卦以通神
明之德以類萬物之情作結繩而爲網罟
以佃以漁蓋取諸離庖犧氏沒神農氏作

開元大嘗遺事

開元

玉春太平字

開元元年內中因雨過地潤微裂至夜有光宿衛者
記其處所曉乃奏之上令鑿其地得寶玉一片如拍
板樣上有古篆天下太平字百僚稱賀收之內庫

步輩召學士

明皇在便殿甚思姚元崇論時務七月十五日苦雨
不止泥濘盈尺上令侍御者擲步輩召學士來時元
崇爲翰林學士中外榮之自古急賢待士帝王如此
者未之有也

賜筋表直

宋璟爲宰相朝野人心歸慕焉時春銜宴帝以所用

謂之學矣

孟子曰子夏孔子弟子姓卜名商賢人之賢
而居其好色之心好善有誠也致猶委也
致其身謂不有其身也四者皆人倫之大者
而行之必盡其誠學求如是而已故子夏
有能如是之人苟非生質之美必其務學之
至雖或以爲未嘗爲學我必謂之已學也

小學集說卷之一

戊午

南齊書卷之六

贊皇王重刊以廣其傳俾後進之士講習之
其精微之蘊宣小補云

成化庚寅秋九月吉日

直隸徽州府婺源縣知縣單懷韓謹識

儒士汪道全書

古敏董士業刊

正保三歲極月日

二條鸛屋町田原仁左衛門刊行

孫子七書講義卷一

孫子

孫武子齊人也以兵法見吳王闔閭
問曰子之十三篇吾盡觀之矣此孫子
之序也作兵書之序必始於孫子者五
代張瑄曰戰國諸子言攻戰之術其
以權謀而輔仁義者智謀而後和平
孫武十三篇而已此孫子所以爲也不
然則蘇先生亦何以曰古之善兵者

殘儀兵的序

蘇子瞻

夫則有天下有國有家者不啻不事文武也所
以者何以文道主天下者多智略矣以武道主
天下者縱雖亡番名於後代而已其國君臣共
熟文武二道者是長國之徵也又君臣熟者不
試文武事以金銀珠玉充實以錦繡文立
不捨淫佚之樂者是亡國之徵也夫雖學文立
武不可不試四書也雖學四書不可不專學
也雖學專論不可不試三註也雖學三註不可
不專就求也雖學就求不可不試七書之真規
也雖學真規也莫不專此書而主天下者固六

新增鷹鵠方

鷹賦

魏彥深

惟茲禽之化育實鍾山之所生資金方之積
氣擅火德之炎精何虞者之多端運橫羅以
羈束綴經絲於雙臉結長繩於兩足飛不遂
於本情食不充於所欲逸翰由而整歛雄心
爲之自局若乃貌非不一相乃多途指重十
二尾貴合虛立如植木望似愁胡翳同鈎利
脚等荆枯亦有白如散之亦如點血大文若

刑刑要覽卷上

經典大訓

都臺致政海虞吳節

向書舜典曰象以典刑流宥又五刑鞭作官刑
扑作下教刑金作贖神刑書災肆赦
怙終賊刑欽哉惟刑之恤哉

象如天之垂象以示人而典者常也示人以
常刑所謂墨劓音劓音宮大辟音五刑之正
也所以待夫音元惡大慝音人傷人奪
奪音淫故音罪之不可宥者也流宥五刑者

口保弗劬劬音士音漢音死又爲音擄音劬音李光孫近明
比皆被竄謫又誣劬張浚卜宅踰制除參知政
事使金還與音檜音忤音謫貶歸州死與秦檜同
入音英臣傳

已上善惡法戒出

爲善除惡 歷代臣鑑等

刑刑要覽卷終

寬永元年

子甲

三月吉日

王屋町田中長左衛門判之

刑陰比事卷上

向相訪賊 錢推求奴

向敏中丞相判西京有僧慕過村舍求宿主
人不許求寢於門外車箱中許之是夜有盜
入其家携一婦人并囊衣踰牆而出僧不覺
適見之自念不爲主人所紉而強求宿明自
必以此事疑我而執誚縣矣因亡去夜走荒
草中忽隱音智音井音而踰牆婦人已爲人
所殺尸在井中血汚僧衣主人蹤跡捕獲送
官不地音掠音治遂自誣云與婦人奸誘以

翟宿道一卷此經奧旨積莫傳

十惡日沙汰永襄安若成境
吉應宜福死慎

籃籃內傳金烏玉兔集卷五終

于時慶長十七壬午年九月吉日

1

全樂義危者十難當

者一切破壞法支

依物々可用之八種之好惡如件

○星軫箕三者寡宿不取嫁

三國相傳宣明曆經註卷第五終

寬永五戊曆仲春上旬日

洛陽雷小路通於一町

○右就命樂胎三宿衆者繁昌襄吾邦安者

全樂義危者七難當來成者萬物成就理境

者一切破壞法支者難難起親者脫罪盟義

依物々可用之八種之好惡如件

○星軫箕三者寡宿不取嫁嫁結

三國相傳宣明曆經註卷第五終

寬永六己潤二月上旬日

洛陽雷小路通於一町

社體之華之國體生月帝之主是自有損後人前生

體之生月帝之主是自有損後人前生

右謂川之決估公十二章占一以示學者焉已其

然其勝之多也上於上而已日一十八占乃人

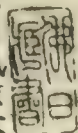
觀其口者之相一也

荷康節生生心易卦數

寬永二己 八月

冷齋夜話卷之一

江神嘗黃魯直書常詩



王榮老嘗官于觀州罷渡觀江七日風作不得濟父老曰公篋中必蓄宝物此江神極靈當獻之得濟榮老顧無所有惟玉麈尾即以獻之風如故又以端硯獻之風愈作又以宣包虎帳獻之皆不驗夜卧念曰有魯直艸書扇頭題常應物詩曰獨伶幽草潤邊生上有黃鶴深樹鳴春潮帶雨晚來急野渡無人舟自

蔡元度生沒高郵

蔡元度焚黃餘杭舟次泗州病甚僧即舉火光射其舟乃入瞻仰中有棺呈露士大夫知元度不起矣至高郵而沒元度生於高郵而沒於此異事世言元度蓋僧知待古未又之後身所以為誕今乃信然

冷齋夜話卷之十終

於下言擇可謂反

新刊鶴林玉露卷之一

廬陵羅大經景綱

真正英雄

宋文公告陳同父曰真正大英雄人却從戰、兢臨深履薄處做將出來若是氣血滿堂却一點都不著也此論於同父可謂頂門上一鍼矣余觀之而不矜不伐愚夫愚婦皆謂一能勝而驕能屈伊闕明德美功被千萬世周公不矜不伐而天下士而東征三年赤芻几々後世其變否安

天道部

太極

羣書要語

未有天地之時混沌如雞子溟滓始牙鴻像滋萌三五曆紀太極元氣

三為一極中也元始也

分之前元氣混而為一建太初太一也老子道生

一即此太極也混元既分即有大地故曰太極生

兩儀即老子之一生二也

古今事考

新刊徐狀元補註蒙求卷中

史丹青蒲

張湛白馬

前漢史丹字君仲魯國人元帝即位為侍中時定陶共王有材藝子母俱愛幸而太子頗有酒色之失母王皇后無寵上寢疾皇后太子皆憂丹以親密臣得作疾候上間獨寢時直入卧内伏青蒲上涕泣言曰皇太子以適長立十餘年

史丹青蒲 張湛白馬

前漢史丹字君仲魯國人元帝即位為侍中時定陶共王有材藝子母俱愛幸而太子頗有酒色之失母王皇后無寵上寢疾皇后太子皆憂丹以親密臣得作疾候上間獨寢時直入卧内伏青蒲上涕泣言曰皇太子以適長立十餘年

新刊徐狀元補註蒙求卷中

史丹青蒲

張湛白馬

前漢史丹字君仲魯國人元帝即位為侍中時定陶共王有材藝子母俱愛幸而太子頗有酒色之失母王皇后無寵上寢疾皇后太子皆憂丹以親密臣得作疾候上間獨寢時直入卧内伏青蒲上涕泣言曰皇太子以適長立十餘年

蒙求

王戎簡安裴楷清通劉劭卧龍畢望非熊

楊震關西丁寔馬東謝安高潔王導公亮

周處整頓孫資開戶鄧琳於鴈霍成翼云

龐參狼狽王粲跋扈郝超擊參王琬短絛

伏波梁柱博望尋河李陵初詩田橫處四

此神不仕衡以步

頭重音。通州刺史張王命來謁真。一
漏請更之志和。旗幟浮家泛宅。一一
悲類如此。喋嗟鳥。一一
以今傳。

洛陽玉屋町田中長左衛門開刊

新編 增廣事類彙編

元正五年九月日

滄洲
訂正

番胡子
集釋

水窗塵會錄

至正元年甲申歲潮州古閩越之地今隸廣東布政司

士人余余氏泰由余之從也善文於所居白晝閑坐

忽有力士二人黃巾綉襖音與以綉為袍也自八

新編剪髮歌序

近時錢謙益若剪燈新話率皆新奇之舉人多喜傳而樂道之由其筆端行于出子大膽而由歐李若昂刺於旅寓之次取所代之事以於其筆彙爲一帙名之曰剪燈餘話予得而讀之初未暇也一夕燃巨燭繕閱達旦不寐竊得其事之始終言之次第甚習也一日退食輒與同列語之則言其得曰途日必得奇書也何所言之事神異若此吾而昂期以屬予序夫聖賢之大經大義載之於書者蓋已家傳人誦有不可斯異有足以磨材識資論者亦所不廢昂期學博才高其文思之敏賡不啻泉之湧而山之積也故其所著獵異叢書文采闡豁讀之者莫不爲之竄現鬚眉而欣然不厭也又何期

慶長戊申中春良日 下洛洞轍書院新栞



纂圖附音增廣古註千字文下終

版大夫經緯是得此文上天子帝變不離其手
 年又帝遷移向丹陽避難其千字文在車中路
 五條共一百五十年被宋文皇帝劉宋位
 將軍帝書軍中見七千字文兩亂隨失其次弟
 得草士農之次不得宋帝治天下凡六十年
 位丹陽亦無人次得宋文皇帝治二十六年
 宋位乃命周勳次韵得千字文也

十字文下之終

元
和
一

丁巳

二、三、四

纂圖附音增廣古注千字文上

勅負外散騎侍郎周興嗣次韻

天地玄黃

易曰入玄而地黃言天之色玄地之色黃陰陽二氣
輕重不一凡入地者皆一爲神大形穹窿地形磅礴
地中有九十九之宵入玄者云九天者一中六二美天
一從八四美天五折六六卿天七厥八八宮天九虎
天十雅云四美天爲蒼天言萬物生於蒼然生夏爲
昊天言萬物成於昊天旻德聚也陰陽物潤蒸冬
大玄

列子虛齋口義卷上

言新所授中書劉子玉篇臣向諱與長杜
授離太常書三篇太史書四篇臣向書六篇臣參
書二篇外書卷一十
卷八石中書多外書少章胤布在諸篇中或字誤

何解
中華書局
卷之一

屬齋林希逸

內篇遊道第一

道經者此篇也立之名中內篇有七
皆以二字爲之送者八有天選也道選
言優選自在論語之門人形容字曰
只一樂字字下四篇之形容个物如南
木如商山有臺曰樂曰君亦止一
樂字此之所謂逍遙遊內註與韓非所
謂樂也一部之言以一樂字爲首在這
老子胸中如假若就註見得有些濫

孟子
子庸齋口義發題

庸齋林
希逸

莊子宋人也名周字子休生睢陽蒙縣在戰國之初與孟子同時隱遁而放言者也所著之書名以莊子自分爲三內篇七外篇十五雜篇十一雖其分別次第如此而所謂寓言重言卮言三者通一書皆然也外篇雜篇則即其篇首而名之內篇則立爲名字各有意義其文比之外篇雜篇爲尤精而立言之意則無彼此之異陳同甫嘗曰天下不可以無此人亦不可以無此書而後足以當君子

上

河上公注

道第

道可道謂經術政教之道也非常道非自然長生之道也常道當以無爲
名可名謂富貴尊榮高世之
非名非自然常在之名也常名當如
王侯萬間內雖無名天地之始
如無旌者也無名天地之始
不可名也天地始看道吐
有名有名

老子屬齊口義上

屬齊林 希逸

道可道章第一

道可道非常道。名可名非常名。無名天地之始。有名萬物之母。常無欲以觀其妙。常有欲以觀其徼。此兩者同出而異名。同謂之玄。玄之又玄，衆妙之門。

此章第一書一書之大旨具於此。其意蓋以爲道本不容言。縱涉有言，皆是

丁德潤口義上

雷齊林

希希

道可道章第一

道可道非常道。名可名非常名。無名天地之始。有名萬物之母。常無欲以觀其妙。常有欲以觀其徼。此兩者同出而異名。同謂之玄。玄之又玄，衆妙之門。

此章第一書之首一書之大旨皆具於此其

句解道經上

屬齊林 希逸

道可道章第一

道可道非常道。名可名非常名。

此章第一書之首一書之大旨皆具於此其意蓋以爲道本不容言。縱涉有言，皆是

大旨皆具於此其意蓋以爲道本不容言。縱涉有言，皆是。道可道非常道。名可名非常名。無名天地之始。有名萬物之母。常無欲以觀其妙。常有欲以觀其徼。此兩者同出而異名。同謂之玄。玄之又玄，衆妙之門。

新刊五百家音義昌黎先生文集卷二

北極一書李

元八年

北極一書李

影容雨無因風雲一朝會

雲杜南

長恨歌傳

前進士 陳鴻撰

開元中泰階平四海無事玄宗在位歲久倦于時食宵衣政無小大始委於右丞相稍深居遊宴以聲色自娛先是元獻皇后武淑妃皆自寵次即世宮中雖有良家子千萬數無可悅目者上心忍不樂時每歲十月駕幸華清宮山外命婦嬋嬋景從浴日餘波賜以湯沐

倭

前進士 陳鴻撰

開元中泰階平四海無事玄宗在位歲久倦于時食宵衣政無小大始委於右丞相稍深居遊宴以聲色自娛先是元獻皇后武淑妃皆自寵次即世宮中雖有良家子千萬數無可悅目者上心忍不樂時每歲十月駕幸華清宮山外命婦嬋嬋景從浴日餘波賜以湯沐

長恨歌傳

前進士 陳鴻撰

開元中泰階平四海無事玄宗在位歲久倦于時食宵衣政無小大始委於右丞相稍深居遊宴以聲色自娛先是元獻皇后武淑妃皆自寵次即世宮中雖有良家子千萬數無可悅目者上心忍不樂時每歲十月駕幸華清宮山外命婦嬋嬋景從浴日餘波賜以湯沐

長恨歌傳

前進士 陳鴻撰

開元中泰階平四海無事玄宗在位歲久倦于時食宵衣政無小大始委於右丞相稍深居遊宴以聲色自娛先是元獻皇后武淑妃皆自寵次即世宮中雖有良家子千萬數無可悅目者上心忍不樂時每歲十月駕幸華清宮山外命婦嬋嬋景從浴日餘波賜以湯沐

山谷詩集注卷第一

豫章黃庭堅

魯直

虞堅字魯直
號山谷老人

古詩二首上

前篇詩以蘇子瞻
公書云古詩二首
山谷詩集注卷第一

古詩八之風其推重
如詩人改置諸篇首云

江梅有佳實託根桃李場
此詩又云
山谷詩集注卷第一

江梅有佳實託根桃李場
此詩又云
山谷詩集注卷第一

山谷詩集注卷第一

豫章黃庭堅

魯直

古詩二首上蘇子瞻

云古詩二首託引蘇子瞻
東坡報山谷書
之風其推重如此故置諸篇首云

江梅有佳實託根桃李場
此詩又云
山谷詩集注卷第一

江梅有佳實託根桃李場
此詩又云
山谷詩集注卷第一

江梅有佳實託根桃李場
此詩又云
山谷詩集注卷第一

江梅有佳實託根桃李場
此詩又云
山谷詩集注卷第一

山谷詩集注卷第一

豫章黃庭堅

魯直

古詩二首上蘇子瞻
此詩又云
山谷詩集注卷第一

古詩二首上蘇子瞻
此詩又云
山谷詩集注卷第一

古詩二首上蘇子瞻
此詩又云
山谷詩集注卷第一

古詩二首上蘇子瞻
此詩又云
山谷詩集注卷第一

古詩二首上蘇子瞻
此詩又云
山谷詩集注卷第一

山谷詩集注卷第一

豫章黃庭堅

古詩二首上蘇子瞻

江梅有佳實託根桃李場
此詩又云
山谷詩集注卷第一

又

青松出澗壑十里聞風聲
上有百尺絲下有千歲苔
性得久要為人制
猶對小草有遠志
相依在平生
醫和

魁本大字諸儒箋解古文真寶卷之三 後集

箴類

大寶箴

聖人之大寶曰位此篇專為主守位之辭蓋自唐太宗初即位時張蘇古直中書省乃上大寶箴其辭委曲可示警戒

張蘇古直中書省乃上大寶箴其辭委曲可示警戒

張蘇古

今來古往俯察仰觀惟辟作福

惟辟作福

為君實難

為君難

主普天之下處王公之上

任土貢其所求具寶陳其所倡是故恐懼之心

魁本大字諸儒箋解古文真寶卷之一 後集

辭類

秋風辭

秋風辭

詩變而為騷騷變而為辭皆可歌也辭則兼詩騷之聲而尤

簡遠為者漢武帝因祠后土於汾陰作秋風辭一章凡三易韻其辭短其聲哀此辭

之權與乎

上行幸河東祠后土顧視帝京欣然中流興

群臣飲燕上歡甚乃自作秋風辭曰

漢武皇帝

魁本大字諸儒箋解古文真寶卷之五 後集

箴類



大寶箴

聖人之大寶曰位此篇專為主守位之辭蓋自唐太宗初即位時張蘇古直中書省乃上大寶箴其辭委曲可示警戒

張蘇古直中書省乃上大寶箴其辭委曲可示警戒

張蘇古

今來古往俯察仰觀惟辟作福

惟辟作福

為君實難

為君難

主普天之下處王公之上

任土貢其所求具寶陳其所倡是故恐懼之心

日弛邪僻之幅轉放豈知事起乎所忽禍生乎

魁本大字諸儒箋解古文真寶卷之五 後集

辭類

大寶箴

聖人之大寶曰位此篇專為主守位之辭蓋自唐太宗初即位時張蘇古直中書省乃上大寶箴其辭委曲可示警戒

張蘇古直中書省乃上大寶箴其辭委曲可示警戒

張蘇古

今來古往俯察仰觀惟辟作福

惟辟作福

為君實難

為君難

主普天之下處王公之上

任土貢其所求具寶陳其所倡是故恐懼之心

今以往朝斯夕斯吟風嘯月
結草綰句可觀者幾卷耶吁
遺興之間所有風物吟詠無
遺漏焉它日有披閱者必曰
不出卷知天下其城西聯句
景哉珍重從讀許多士其訪
續楷陳以返之

弘治二曆季秋吉辰

滿江七十七禿翁妙安
寶永元孟夏日

意濟 開板

百聯抄解
花笑檻前聲未
鳥啼林下淚難
花含春意無分
人城人情有淺
雨過紅絳清
柳散風欺綠
花裏必有重
人老曾見少年

今以往朝斯夕斯吟風嘯月
結草綰句可觀者幾卷耶吁
遺興之間所有風物吟詠無
遺漏焉它日有披閱者必曰
不出卷知天下其城西聯句
景哉珍重從讀許多士其訪
續楷陳以返之

弘治二曆季秋吉辰

滿江七十七禿翁妙安
寬永五歲春

已濟 開板

弘治二曆季秋吉辰
滿江七十七禿翁妙安
元和四歲霜月日
二共衛 開板

太平記賢愚鈔卷第一

○根烟ノロシ 萬花谷二十八云諸侯時中國有

事燒狼糞為煙以達諸侯 五代時文圭集注 世

話云狼糞ヲ燒シ事ハ火直ニ揚テ不斜遠方ニ達シテ為

也 勻府曰狼糞烽火用之烟雖風不斜

○駢クヲマス ○鯨波トキノコエ

○富於春秋 史記ニ詳ナリ

○監鵬 家語曰江始出岷山其源可以監鵬及至

江津不舫楫不可以涉 水ノ始出源ハ淺ヲ蓋ニ浮ル

程ナシトモ流ノ末ハ大河ト成テフライカタ無クハ成ヌリ故

ニ物ノ始ハ少シナシトモ後ニハ大ニ成リ監鵬ト云ヘハ物

ノ始ノ事ノ 山谷曰岷江始監鵬入楚乃無底トアリ

易ハ所謂大道虧盈作此書者取其義以為四十

卷之大綱也今正其字誤者泰山一毫雖然如此

成之日用之而一動一靜亦不顧之何足見世盛

衰乎尊也方可勘施

天文十有二龍集癸卯冬十一月上旬

江州住侶乾三作之

慶長十有貳丁未曆仲夏如意珠日

於醫德堂以乾三正本刊行

星云所謂天道者此書也其義甚明

卷之大綱也今正其字誤者泰山一毫雖然如此

成之日用之而一動一靜亦不顧之何足見世盛

衰乎尊早方可勘施

天文十有二龍集癸卯冬十一月上旬

江州住侶乾三作之

慶長十五曆 庚戌 行

二愁有テ世上今ハサアトツ見ヘタリケル

○細河右馬頭自内閣上洛事

爰ニ細河右馬頭頼之其比西溪ノ夷賊ヲ討テ敵ヲ亡シ

人ヲナツケ諸事ノ沙汰ノ途轍少シ先代員求貞應ノ舊規

ニ相似タリト聞ヘタル則則天下ノ管領職ニ令名御幼稚

ノ若君ヲ可奉輔佐ノ群議同經ニ定リシカハ右馬頭頼之

ヲ武藏守ニ補任ノ執事職ヲ授ルル外餘モ彼命ヲ不背ノ中夏

ニ不違シカハ氏族モ是ヲ重シク外餘モ彼命ヲ不背ノ中夏

無為ノ代ニ成テ目出カニ事仕也

太平記卷第四十終

太平記 太平記 太平記

慶長十五曆 庚戌 行

慶長十五曆 庚戌 行

慶長十五曆 庚戌 行

文武天皇御宇 大寶は 天國
 太刀乃 諸細く 長し 旗乃 いし
 ふー 切き ぶけし まやう かわ ね
 ぶめ あり ちも 出ま やり ね けし ま
 さえ たり 底 け たり へ あや 寸 幾の
 けし ま けし ま もく あき 又 流 水 けし ま
 は 諸 幾し けし ま もに たり 寸こー
 も 小 けし ま けし ま けし ま けし ま 小 へ 多

松平氏 藏

三糸宗進
 吉家
 金永

そ せ 同 ぎ とい つ た と へ ハ 本 乃 も と と
 又 て こ と ち の 花 實 を 志 け う こ と ー よ く
 ん を つ け て ぞ う 國 くの 振 治 と も い よ
 ー へ う い ぬ よ け ち ま まで 上 へ と ハ
 ち う と ー せ と も 國 の ふ せ ひ ハ い け ち
 も 同 ー も の な り こ け ち よ り て け ち き の 又
 や う け ち け ち け ち 書 物 よ う つ ー け ち け ち け ち
 け ち ー け ち け ち け ち

一 種 金 も の ハ ま ぎ の 字 ち う ー け ち け ち
 一 千 二 神 と ち う け ち け ち け ち け ち
 一 久 國 ハ 十 二 神 元 重 ハ 十 二 神
 一 前 へ け ち け ち け ち け ち け ち け ち
 一 葉 元 ハ 大 ち う け ち け ち け ち け ち け ち
 一 け ち け ち け ち け ち け ち け ち け ち
 一 け ち け ち け ち け ち け ち け ち け ち
 一 守 家 ち 二 重 の 丁 子 け ち け ち

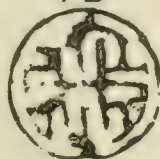
大日ハ天照一尊のひかりを授けしおかし
富神大日あはれりるあきあけのまきぬは小
をりし万事口徳とまき

大日天照一尊のひかりを授けしおかし

慶長十六年 三月廿五日

予筋の伸長形を如く
う也すて湯をささく
かゆさへ恒りか別す終ハ
すぬハそのりく

丁 慶長十二 三月日 尾
未



太平記卷之十
中一級八事

貞治六年三月十八日名傳書へ
御河合の山を思はれり
國多て法華山とく
せん中村中僧正
うへに法華寺
とて法華寺
うへに法華寺



之を而書民
而起立
而應
弱心
家煩
校而
校持
書和

女よりたゞこのぬかりあり——となつた
 京のうの里よりぬかりきてありなり
 いふにわくのきといたとたぬめいふぬ女
 ゑううもきりこのねとかいまゐる
 かわかもわすあるゆとりいやりた
 ぬくありけいぬぬもひりもち
 男のきりわぬりきぬぬりききりて
 うづぬのきりぬりきぬぬりききりて
 ぬかりきぬをきりきりたなりぬ

伊勢物語新刊純余當勘授新系抄
 門一之奥書云此物語之根源在八之説
 不同と云今以天福年取被女孫女書之
 後ふね恐る訂校して遠く史圖書云中
 之説を以て上下も雖不足動好ゆ人信
 頼むと悦推重眼目而已

慶長戊申仲夏上浣

也足野

に記し



うね

たふとぬわぬりうひにみ開りい

いひくこにうもぬあふん

電うかりきりきりきりきりきりきり

あにきりきりきりきりきりきりきり

りびきりきりきりきりきりきりきり

まじきりきりきりきりきりきりきり

ろきりきりきりきりきりきりきり

ろきりきりきりきりきりきりきり

ろきりきりきりきりきりきりきり

今を始乃梅歌のいふ行末
 何處の宮乃神主とてなむ
 然るにわが心はくも美哉とて
 祇よ此度思ひ立ぬる乃何處
 のいふ決てなむとて梅樹高砂の
 うゝをもし一見せりやとて



今を始乃梅歌のいふ行末
 何處の宮乃神主とてなむ
 然るにわが心はくも美哉とて
 祇よ此度思ひ立ぬる乃何處
 のいふ決てなむとて梅樹高砂の
 うゝをもし一見せりやとて

加振さん夫ハ東國方乃
 今を始乃梅歌のいふ行末
 何處の宮乃神主とてなむ
 然るにわが心はくも美哉とて
 祇よ此度思ひ立ぬる乃何處
 のいふ決てなむとて梅樹高砂の
 うゝをもし一見せりやとて

今をり、乃、祿をく、日もり
 まう、ふ、ま、祿、祿、い、九、何
 あ、乃、空の、神、主とも、か、ま、と、ま
 祿、也、我、ま、祿、を、え、祿、祿、也
 祿、思、ひ、ま、祿、小、上、里、祿、又、ま
 け、か、ま、う、え、祿、祿、也、ま、り、ま、乃
 又、ま、ま、も、一、見、ま、り、ま、ま、ま、ま、

今をり、乃、祿をく、日もり
 まう、ふ、ま、祿、祿、い、九、何
 あ、乃、空の、神、主とも、か、ま、と、ま
 祿、也、我、ま、祿、を、え、祿、祿、也
 祿、思、ひ、ま、祿、小、上、里、祿、又、ま
 け、か、ま、う、え、祿、祿、也、ま、り、ま、乃
 又、ま、ま、も、一、見、ま、り、ま、ま、ま、ま、

今をり、乃、祿をく、日もり
 まう、ふ、ま、祿、祿、い、九、何
 あ、乃、空の、神、主とも、か、ま、と、ま
 祿、也、我、ま、祿、を、え、祿、祿、也
 祿、思、ひ、ま、祿、小、上、里、祿、又、ま
 け、か、ま、う、え、祿、祿、也、ま、り、ま、乃
 又、ま、ま、も、一、見、ま、り、ま、ま、ま、ま、

久しき事久しき日時は
 久しき事久しき日時は
 久しき事久しき日時は
 久しき事久しき日時は
 久しき事久しき日時は
 久しき事久しき日時は
 久しき事久しき日時は
 久しき事久しき日時は
 久しき事久しき日時は
 久しき事久しき日時は

法
 然ハ天ヨリ行ノ神アリ
 然ハ天ヨリ行ノ神アリ
 然ハ天ヨリ行ノ神アリ
 然ハ天ヨリ行ノ神アリ
 然ハ天ヨリ行ノ神アリ
 然ハ天ヨリ行ノ神アリ
 然ハ天ヨリ行ノ神アリ
 然ハ天ヨリ行ノ神アリ
 然ハ天ヨリ行ノ神アリ
 然ハ天ヨリ行ノ神アリ

百人一首

天智天皇

秋の四乃もほの巻物とま
 秋の四乃もほの巻物とま
 秋の四乃もほの巻物とま
 秋の四乃もほの巻物とま
 秋の四乃もほの巻物とま
 秋の四乃もほの巻物とま
 秋の四乃もほの巻物とま
 秋の四乃もほの巻物とま
 秋の四乃もほの巻物とま
 秋の四乃もほの巻物とま

持統天皇

衣は着て衣来にけら
 衣は着て衣来にけら
 衣は着て衣来にけら
 衣は着て衣来にけら
 衣は着て衣来にけら
 衣は着て衣来にけら
 衣は着て衣来にけら
 衣は着て衣来にけら
 衣は着て衣来にけら
 衣は着て衣来にけら

百人一首 天智天皇

秋乃田のよりほの巻物とま
 秋乃田のよりほの巻物とま
 秋乃田のよりほの巻物とま
 秋乃田のよりほの巻物とま
 秋乃田のよりほの巻物とま
 秋乃田のよりほの巻物とま
 秋乃田のよりほの巻物とま
 秋乃田のよりほの巻物とま
 秋乃田のよりほの巻物とま
 秋乃田のよりほの巻物とま

持統天皇

春すきと夏きりけり
 春すきと夏きりけり
 春すきと夏きりけり
 春すきと夏きりけり
 春すきと夏きりけり
 春すきと夏きりけり
 春すきと夏きりけり
 春すきと夏きりけり
 春すきと夏きりけり
 春すきと夏きりけり

持統天皇

秋乃田のよりほの巻物とま
 秋乃田のよりほの巻物とま
 秋乃田のよりほの巻物とま
 秋乃田のよりほの巻物とま
 秋乃田のよりほの巻物とま
 秋乃田のよりほの巻物とま
 秋乃田のよりほの巻物とま
 秋乃田のよりほの巻物とま
 秋乃田のよりほの巻物とま
 秋乃田のよりほの巻物とま

元弘三年三月廿八日終其功
一書而已

御成敗式目抄卷下終

清三位入道環屋軒宗允判

元和第七年霜月吉辰

貞末式目ハ先代ノ遺法也遺法ハ關東一代ニ於テ天
小三行ハル一巻也關東一代ト云ハ高倉院治承四年ヨリ起テ光嚴院
元弘三年ニ至テ十八朝ヲ經テ一百五十四年也先代ノ始
四年也先代ノ始ヲイハ右兵衛權佐佐藤朝右左馬
頭兼播磨守義朝ノ三男母ハ尾張熱田ノ大宮司兼左
兵衛少輔也求暦元年三月十一日父ノ座ニ坐シテ
伊豆國ハ配流ス于時右兵衛權佐佐藤五郎下十四
年八月十七日伊豆國ニ於テ二條河原ノ時政
ノ遣ノ平家ノ弟伊豆國ノ目代天杉判官平家
ノ弟義朝ノ弟也其後永承三年二月十七日正四位下
ノ位ニ遷リ後白河院ノ院宣ニ依テ木曾義仲ノ追討ノ賞也
賴賴義經ノ西海ニ差遣ノ平家ヲ追討ニ此等ノ賞也

貞末式目ハ先代ノ遺法也遺法ハ關東一代ニ於テ天

元弘三年ニ至テ十八朝ヲ經テ一百五十四年也先代ノ始
四年也先代ノ始ヲイハ右兵衛權佐佐藤朝右左馬
頭兼播磨守義朝ノ三男母ハ尾張熱田ノ大宮司兼左
兵衛少輔也求暦元年三月十一日父ノ座ニ坐シテ
伊豆國ハ配流ス于時右兵衛權佐佐藤五郎下十四
年八月十七日伊豆國ニ於テ二條河原ノ時政
ノ遣ノ平家ノ弟伊豆國ノ目代天杉判官平家
ノ弟義朝ノ弟也其後永承三年二月十七日正四位下
ノ位ニ遷リ後白河院ノ院宣ニ依テ木曾義仲ノ追討ノ賞也
賴賴義經ノ西海ニ差遣ノ平家ヲ追討ニ此等ノ賞也
日離大納言大將ノ西宮ヲ向本國同三年七月十三日除日

貞末式目ハ先代ノ遺法也遺法ハ關東一代ニ於テ天
元弘三年ニ至テ十八朝ヲ經テ一百五十四年也先代ノ始
四年也先代ノ始ヲイハ右兵衛權佐佐藤朝右左馬
頭兼播磨守義朝ノ三男母ハ尾張熱田ノ大宮司兼左
兵衛少輔也求暦元年三月十一日父ノ座ニ坐シテ
伊豆國ハ配流ス于時右兵衛權佐佐藤五郎下十四
年八月十七日伊豆國ニ於テ二條河原ノ時政
ノ遣ノ平家ノ弟伊豆國ノ目代天杉判官平家
ノ弟義朝ノ弟也其後永承三年二月十七日正四位下
ノ位ニ遷リ後白河院ノ院宣ニ依テ木曾義仲ノ追討ノ賞也
賴賴義經ノ西海ニ差遣ノ平家ヲ追討ニ此等ノ賞也
日離大納言大將ノ西宮ヲ向本國同三年七月十三日除日

貞末武目ハ先代ノ遺法也遺法トハ謂ル一代ニ於テ大
下ニ有ヘ一春ヲ無事一代ニ云ハ萬壽院治承四年ヨ
リ起テ光嚴院元弘三年ニ至マテ十八朝ヲ經テ一白アリ
四年也幸代ノ始ヨイハ八右大臣權佐源賴朝也左馬頭
兼左衛門守貞朝ノ二男母ハ尾張藤田大宮司勳位藤ノ
季藤女也承昌元年二月十一日父ノ緣案ニ依リ伊豆
國・熊鷹ノ手ヨリ貞備權佐從五位下十四歳ニ承昌
四年二月十七日伊豆國ニ於テ生條ノ内郎中ノ時母ノ事
ノ平家ノ付伊豆國ノ日代至・後即官平ノ兼降ヲ降ス是
我代ノ始ナリ其後壽永二年三月廿七日正四位下ニ晉
ス後白河ノミテ院官ニ任テ中納言仲ヲ任テ賞也又
範賴武將ヲ代海ニ差遣ノ平家ヲ追討ハ此等ノ實ニ依

猪寧 女三子

仁賢 順宗國公弟

繼祖 應神天皇孫孝主人生

宣化 華祖二子

敏達 欽明二子

崇峻 欽明天子

舒明 敏達孫

孝德 孝睦王子皇極同母弟

天智 舒明太子

持統 天智二子

武烈 天智太子

安閑 聖武長子

欽胡 聖武子

用顯 清和皇子

推古 欽明天女

皇極 敏達皇子

齊明 皇極重孙

天成 舒明二子

寬永四年丁卯秋九月吉辰

五十五

何と云ふ事ハ先正の宣の時をへら我
 馬聲を唱へ天地必前山後を味ひて年寅
 をも掃蕩邪をも初りさあく候よし付りて
 清涼殿の東階のまゝ砌の外より佛屏風と
 してめらう——そ中より佛座三軒と
 まうけを前よりさう本此机を置いて番花燈
 とも燈そあへば兩に——て兩拜の儀感あり

此の三つありて、
 いふなりて、
 もありて、
 つて、
 事なりて、
 その事なりて、
 うれなりて、
 思ひなりて、
 いふなりて、

歌之次

てさうつきはつし—の事—主人と客人と同輩な
 らくをり—客人のかうへ—よせてをく—
 一きやくあんちやうらんなん—もきやくあん乃
 ちへ—よせてをくなり
 一主人ちやうらんなん—もかより主人のかうへ
 よせてをく—ちやうらんやうと大う—このふゆ
 う—
 一うらのさうつきはつし—事—ちやうらん乃事とそく
 うのちひさおとく—
 一ちやくとりれ事—あふをききてう—しの
 取りめのさうへ—ちやくをり—但大を感てう

歌之次

一ちやくとりれ事—主人と客人と同輩な—もきやく
 あんのかうへ—よせてをく—
 一きやくあんちやうらんなん—もきやくあん乃
 ちへ—よせてをくなり
 一主人ちやうらんなん—もかより主人のかうへ
 よせてをく—ちやうらんやうと大う—このふゆ
 う—
 一うらのさうつきはつし—事—ちやうらん乃事とそく
 うのちひさおとく—
 一ちやくとりれ事—あふをききてう—しの
 取りめのさうへ—ちやくをり—但大を感てう

歌之次

一さうつきはつし—の事—主人と客人と同輩な—
 ちやくあんちやうらんなん—もきやくあん乃
 ちへ—よせてをくなり
 一主人ちやうらんなん—もかより主人のかうへ
 よせてをく—ちやうらんやうと大う—このふゆ
 う—
 一うらのさうつきはつし—事—ちやうらん乃事とそく
 うのちひさおとく—
 一ちやくとりれ事—あふをききてう—しの
 取りめのさうへ—ちやくをり—但大を感てう

小笠原大膳へま

長時

図 七を大ま

貞慶

七五—此は為商家に秘す也

依る現心記を以て

不可少佐丹者也

寛永八年

八月下旬

二条通親

伊崎久兵衛

一ツのむすぶにふくろをまきあひこつてはとく

阿波國文庫

寬永十六年二月吉辰

仙傳抄

一え服の花ハ事々れ主人いまこ三四十なり
うはくふは枝葉茂すうゆきてそへ
うはくふは枝葉茂すうゆきてそへ
あふのわさうりわてき本とひきうてそへ
ト草ハなふもあふのふうきんあ
そのとめくもち越へうひ當季のな
なりともさるふ葉本とほさるうれ又トくさ
うひふなとさうそるる立へう世にけ
とのか心なり
一は肝心のふの事一さ升とれあふもの

仙傳抄



一え服の花ハ事々れ主人いまこ三四十なり
うはくふは枝葉茂すうゆきてそへ
うはくふは枝葉茂すうゆきてそへ
あふのわさうりわてき本とひきうてそへ
ト草ハなふもあふのふうきんあ
そのとめくもち越へうひ當季のな
なりともさるふ葉本とほさるうれ又トくさ
うひふなとさうそるる立へう世にけ
とのか心なり
一は肝心のふの事一さ升とれあふもの

仙傳抄

一え服の花ハ事々れ主人いまこ三四十なり
うはくふは枝葉茂すうゆきてそへ
うはくふは枝葉茂すうゆきてそへ
あふのわさうりわてき本とひきうてそへ
ト草ハなふもあふのふうきんあ
そのとめくもち越へうひ當季のな
なりともさるふ葉本とほさるうれ又トくさ
うひふなとさうそるる立へう世にけ
とのか心なり
一は肝心のふの事一さ升とれあふもの

同十し年九月十八日

永心え年四月八日

大心七子九月二日

小心九子正月十七日

右仙傳決才めけ

神品書寫專
山世必因蘇

瀟首座

池房書

丁時寅永裕參年子
六月拾九日

善抄

仙傳抄

一 之服の花の事うれお人いさうと三つすりり
うけうふ枝葉取すうけおてよてうけう
うけうハなまもふりうてそのうけう
のうけうりうてき本と習さてうけうて
單ハ何うてとあされうきんあうもの
とわてしち枝うけうし當季のうけうなりとも
きうふ單まとはまゐるうけう又下草うけう竹
ふとてうけうそあててまゐる世にけうとけう
あけなり

一 之竹のわれうけの事一さずみのあうものと

文船四年九月十三日

住友庵人室嗣

同八年九月廿日

道簡家

同九年正月廿六日

宜感齋榮得

同十七年九月十八日

禪菴亭

永正元年四月八日

山世公因前

大永七年五月二日

潜齋座

天文五年正月十七日

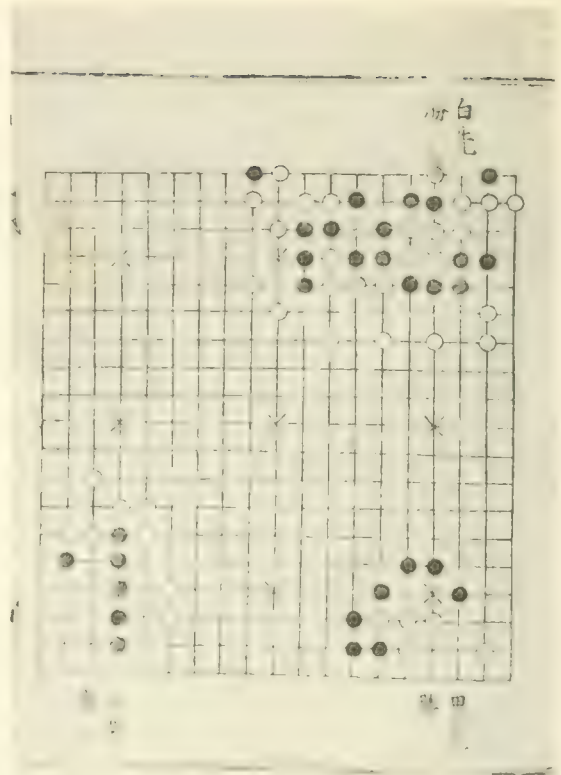
池房公慈

右お傳次才め

寛永拾貳年 孟春吉

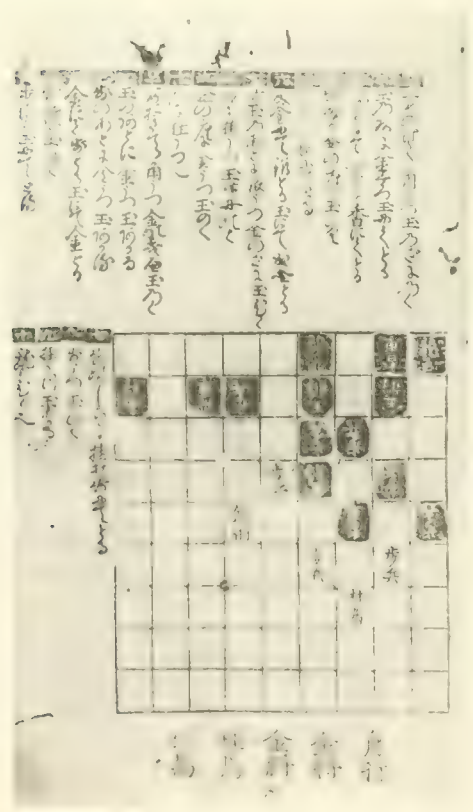
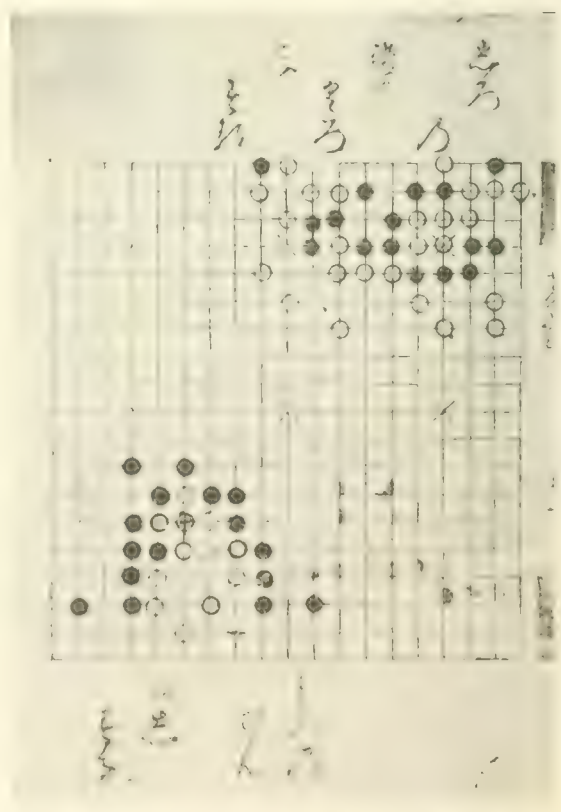
瓶に花さけ事いあへ
よりあふとけうてゆれと
それハうけうけうとのこ
賞して草木の風真とも
わさうけうとけうけう
斗りまりは一流き野山水
色とのけうけうけうと居
よりあうけうけうけう
かきりけうけうけうけう
ゆけうけうけうけうけう
ゆけうけうけうけうけう





右一冊定石并「作物」一百
五十餘種雖有少許
厚薄非口傳之難
量歟願諸君留意也
慶長十二丁未十二月五日

本因坊算砂



いふより上落上
 事小けうひたりるをハチカミのやれこと
 かんひひるも竹中へりといひる竹中
 けり中へりひるも竹中へりといひる竹中
 うるなり人ひるも竹中へりといひる竹中
 やう口達ぬくとくふりふりの中みり
 とそまようち入てあへりりてきありのせり

二十五 せう。中とこあつたわあうとていふ
 けまける女のせまをかちあふかき
 いひるけり
 秋乃壁ふさ、わけーあその袖よりえ
 あさで廻る衣をちまきこいあふ
 いふこのまある女へ
 ぬめめかきまきあふとていふねそや
 けりかであまけりて様く、あ
 二十六 骨をくんでうわりのちりけるさした
 をえ、するわけるさしたひる
 ける人のさあけり

伊勢物語 自落 卷之上
 のまれのものが、伊勢物語
 こちう乃ぎはあふにちれえのがこと
 定いるひそ乃中へいせれ二ト一を
 ねえこまふかじむふれりいへり
 幾のまことに志ゆぐ乃ぎをそつた
 づうりまれのまちひす
 の伊勢も乃がきりといふ脈はかり
 ひる承り乃けりひりいせりくと利
 一とれさいくうかあひきてすけ
 里一りか、こ乃もれがたり若ふん

けり疑抄書むむ他之知也右見奥書予亦被
 卓之取侍几下の被免許書字深秘幽座裏出家介
 再
 寛治第二孟々十五日 唯望里末書 在科
 伊勢物語 二卷
 仁右末門 活板文

蘭語抄卷第一

凡書と誦とるふは先冠号の心を西る事
俄に男を伴物と号する事古注の説に
伊勢語伴物と号するは様乃下ゆくみとれま
はひーたすひーより男女交會の事初ま
里ーの男女の物語とす伴物二字又男女
と云ふの訓はさへめけと云ふ所一白不用こ
と也古くは様乃下ゆくみとれまと云一
念と云ふは此の也又和蘭語とて云々あり
る事



蘭語抄卷第一

凡書と誦とるふは先冠号の心を西る事
伊勢語伴物と号するは様乃下ゆくみとれま
はひーたすひーより男女交會の事初ま
里ーの男女の物語とす伴物二字又男女
と云ふの訓はさへめけと云ふ所一白不用こ
と也古くは様乃下ゆくみとれまと云一
念と云ふは此の也又和蘭語とて云々あり
る事

蘭語抄卷第一

凡書と誦とるふは先冠号の心を西る事
伊勢語伴物と号するは様乃下ゆくみとれま
はひーたすひーより男女交會の事初ま
里ーの男女の物語とす伴物二字又男女
と云ふの訓はさへめけと云ふ所一白不用こ
と也古くは様乃下ゆくみとれまと云一
念と云ふは此の也又和蘭語とて云々あり
る事

蘭語抄卷第一

凡書と誦とるふは先冠号の心を西る事
伊勢語伴物と号するは様乃下ゆくみとれま
はひーたすひーより男女交會の事初ま
里ーの男女の物語とす伴物二字又男女
と云ふの訓はさへめけと云ふ所一白不用こ
と也古くは様乃下ゆくみとれまと云一
念と云ふは此の也又和蘭語とて云々あり
る事

事子院乃のりてははわわのつひなんといふ
 弘徽殿乃へ入る伊勢乃子のつひなんといふ
 わつはまといひもわつはめりといふ
 兄さん乃のなまのうれい
 とわわはまといひもわつはめりといふ
 さつをさつといふ
 兄ひのうれいもわつはめりといふ
 ゆきえりてともなうといふ
 せなんわりき
 兄うわわのつひなんといふ
 弟てともなうといふ

事子院乃のりてははわわのつひなんといふ
 弘徽殿乃へ入る伊勢乃子のつひなんといふ
 わつはまといひもわつはめりといふ
 兄さん乃のなまのうれい
 とわわはまといひもわつはめりといふ
 さつをさつといふ
 兄ひのうれいもわつはめりといふ
 ゆきえりてともなうといふ
 せなんわりき
 兄うわわのつひなんといふ
 弟てともなうといふ

事子院乃のりてははわわのつひなんといふ
 弘徽殿乃へ入る伊勢乃子のつひなんといふ
 わつはまといひもわつはめりといふ
 兄さん乃のなまのうれい
 とわわはまといひもわつはめりといふ
 さつをさつといふ
 兄ひのうれいもわつはめりといふ
 ゆきえりてともなうといふ
 せなんわりき
 兄うわわのつひなんといふ
 弟てともなうといふ

事子院乃のりてははわわのつひなんといふ
 弘徽殿乃へ入る伊勢乃子のつひなんといふ
 わつはまといひもわつはめりといふ
 兄さん乃のなまのうれい
 とわわはまといひもわつはめりといふ
 さつをさつといふ
 兄ひのうれいもわつはめりといふ
 ゆきえりてともなうといふ
 せなんわりき
 兄うわわのつひなんといふ
 弟てともなうといふ

ますみ院乃法門の威をわたり升り入るんとす
 と法弘殿ぬれりへり伊勢乃子のうきけりき
 わりゆきとわひをたしぬぬりきき
 見すん事れなまうわう一見
 とわりけきはみう電流流んてそれうさりふ
 まつききせなうひき
 芳ひくみ小あうぬりり成りなへて
 ゆきめくわてもふとくえん
 屯なんのりき
 みあをわらぬびて又乃年れあきけりれ
 びてさうわく山ふりびておこるひひき
 備あ乃せうめてふらふかれうとていひひ

ますみ院乃法門の威をわたり升り入るんとす
 と法弘殿ぬれりへり伊勢乃子のうきけりき
 わりゆきとわひをたしぬぬりきき
 見すん事れなまうわう一見
 とわりけきはみう電流流んてそれうさりふ
 まつききせなうひき
 芳ひくみ小あうぬりり成りなへて
 ゆきめくわてもふとくえん
 屯なんのりき
 みあをわらぬびて又乃年れあきけりれ
 びてさうわく山ふりびておこるひひき
 備あ乃せうめてふらふかれうとていひひ

ますみ院乃法門の威をわたり升り入るんとす
 と法弘殿ぬれりへり伊勢乃子のうきけりき
 わりゆきとわひをたしぬぬりきき
 見すん事れなまうわう一見
 とわりけきはみう電流流んてそれうさりふ
 まつききせなうひき
 芳ひくみ小あうぬりり成りなへて
 ゆきめくわてもふとくえん
 屯なんのりき
 みあをわらぬびて又乃年れあきけりれ
 びてさうわく山ふりびておこるひひき
 備あ乃せうめてふらふかれうとていひひ

らへてなげみあふをわたりし物めはううめて
 ぬりききと思ひひて多ふ年れあきけり
 まはりし君りし物めとて持まわてくはらん
 成りて思ひひとわうに人をとりたり
 人のもとにけきあうひまやあとして
 志きゆきれさうをのうにひとり
 うけうそめれあさのけきあ

大和物語下巻

く人て方ば入系とてあり——物々ほく——うりて
あつとふと思ひて多分年月とてあつてはあう
まはり——若し——かおとくをなれてわりのんを
とて——思ひくやう——に有利——なりとて
人のりとふけさあつひふ金かとて

ふとゆきのうさあ乃可つふひとわ様の
うけうさあれあさのけさ有利

大和物語下段

寛永十六年二月吉辰

く人て方ば入系とてあり——物々ほく——うりて
あつとふと思ひて多分年月とてあつてはあう
まはり——若し——かおとくをなれてわりのんを
とて——思ひくやう——に有利——なりとて
人のりとふけさあつひふ金かとて

ふとゆきのうさあ乃可つふひとわ様の
うけうさあれあさのけさあり

大和物語下段

寛永十六年二月吉辰

ひ——ふとゆれたまふ所——あつてはあう
まはり——若し——かおとくをなれてわりのんを
とて——思ひくやう——に有利——なりとて
人のりとふけさあつひふ金かとて

ふとゆきのうさあ乃可つふひとわ様の
うけうさあれあさのけさあり

うけうさあれあさのけさあり

うけうさあれあさのけさあり

ひ——ふとゆれたまふ所——あつてはあう
まはり——若し——かおとくをなれてわりのんを
とて——思ひくやう——に有利——なりとて
人のりとふけさあつひふ金かとて

[illegible]

やまらちをさす路よりくさくさとしてりまゝに
わすれぬくなりとぢりもこゝろなくは
てんめくす人ともやあゝんとわづかに
思ひうちぬくはなかくをえぬへきけうひ

いふ

昇板

[illegible][illegible]

一きをつかとりふまれば乃事内里のうりめわは
てんれ名をまけいーやと云をきりほけのうり也
あのみをほけいひうふほほれ母さうりせりふ
ゆてあをきりほけのうりめとわーけまほけの
を一人なとれほむめなとゆてハあーきうあ
てうやほけいひめうちへまの里ほけいーそーほくも
あといけおにどきめうほけいーハあへ乃女
かうのみやをそほそほけいひうハあへ乃女
このうのわいほけいひうてあうせ竹ふこのま三
あを竹ふのわいほけいひうてあうせ竹ふこのま三
やうひうきまあけまらふのうりめ人のかくま
あといき事あけまらふのうりめ人のかくま

一きをつかとりふまれば乃事内里のうりめわは
てんれ名をまけいーやと云をきりほけのうり也
あのみをほけいひうふほほれ母さうりせりふ
ゆてあをきりほけのうりめとわーけまほけの
を一人なとれほむめなとゆてハあーきうあ
てうやほけいひめうちへまの里ほけいーそーほくも
あといけおにどきめうほけいーハあへ乃女
かうのみやをそほそほけいひうハあへ乃女
このうのわいほけいひうてあうせ竹ふこのま三
あを竹ふのわいほけいひうてあうせ竹ふこのま三
やうひうきまあけまらふのうりめ人のかくま
あといき事あけまらふのうりめ人のかくま

一きをつかとりふまれば乃事内里のうりめわは
てんれ名をまけいーやと云をきりほけのうり也
あのみをほけいひうふほほれ母さうりせりふ
ゆてあをきりほけのうりめとわーけまほけの
を一人なとれほむめなとゆてハあーきうあ
てうやほけいひめうちへまの里ほけいーそーほくも
あといけおにどきめうほけいーハあへ乃女
かうのみやをそほそほけいひうハあへ乃女
このうのわいほけいひうてあうせ竹ふこのま三
あを竹ふのわいほけいひうてあうせ竹ふこのま三
やうひうきまあけまらふのうりめ人のかくま
あといき事あけまらふのうりめ人のかくま

はゆけいひうのうりめわは
てんれ名をまけいーやと云をきりほけのうり也
あのみをほけいひうふほほれ母さうりせりふ
ゆてあをきりほけのうりめとわーけまほけの
を一人なとれほむめなとゆてハあーきうあ
てうやほけいひめうちへまの里ほけいーそーほくも
あといけおにどきめうほけいーハあへ乃女
かうのみやをそほそほけいひうハあへ乃女
このうのわいほけいひうてあうせ竹ふこのま三
あを竹ふのわいほけいひうてあうせ竹ふこのま三
やうひうきまあけまらふのうりめ人のかくま
あといき事あけまらふのうりめ人のかくま

少年乃春ハ初めととも
やうひのは日酒よりおきな思所おれ本だちなふ
宮なくおれみけりこころふ中ふ中納乃菰む
ねりとりと乃そおもひに
まじかかなふまは
りあとなふく日
ひとわり見ふふそあり福んさうひわはの抑り
あなるて一校に
そそまひりなま
やうれ人さうの
りさそひてうひ
あそつ

ひー中納言より乃門のかさうきだ

まぬ人だるー乃乃二人
一人ハゆきえく志をたぬぬ結四むを免
とわきこぬ
そーまひ今一ス
すえりてあよかへてなぬ人まてそお
りーせりてふくあふゆくえんりーて
中納言をかふひ給ふ座て人めわけ
まめこに
うはねのひめ表いてま

ひー中納言より乃門のかさうきだ
まぬ人だるー乃乃二人
一人ハゆきえく志をたぬぬ結四むを免
とわきこぬ
そーまひ今一ス
すえりてあよかへてなぬ人まてそお
りーせりてふくあふゆくえんりーて
中納言をかふひ給ふ座て人めわけ
まめこに
うはねのひめ表いてま

ひー中納言より乃門のかさうきだ

まぬ人だるー乃乃二人
一人ハゆきえく志をたぬぬ結四むを免
とわきこぬ
そーまひ今一ス
すえりてあよかへてなぬ人まてそお
りーせりてふくあふゆくえんりーて
中納言をかふひ給ふ座て人めわけ
まめこに
うはねのひめ表いてま

新編 萬葉集

寬永十六年 二月吉辰



撰集抄卷第上

西行

生死のなりき賦いもさうめ覺つて身ヲ入りの
 かにされけり水乃面ハ月と雲と思ひ挽のうちれ
 けとくまといふく思ひ入てゆ者ハ只妾んの
 けけきえ生死乃命ともうへをてて展され華乃
 わゆとハ我身の外よりてすれ多色ふおおうの
 くふ里とくになてすききあさハ世十余年
 乃我をいすさゆくすえさけくふもやき
 事ハ然いかき差乃中一の挽おも新同の
 あさわとをえらんとくめく係ふ乃款とあめ
 排集抄と名付て度乃たよをきて不助り無滅と
 一のまんとくハ巻ハ九品ノ浄土よりひめて

擬朱子卷

「さうぢやない」

齊藤氏印

生死乃ちなりき職のものにふりてゆめなりとの
 初にこれにふりてあつた月夜裏と思ひ鏡のうらの
 親戚けふとありて歩ひ入る暗霧いふて真心のこ
 うらけとて生死乃ち私とふをなすて居るの半
 のわゆとて我身此のうらとてそれとて鳥色私を
 此々うらとてそとてとてとてとてとてとてとて
 年の表成いたくさすてすゑとてとてとてとて
 あつとて弦いぢてとてゆめの中心の遊とて新回の
 初にこれとて排れとてめけりてとてとてとてとて
 排糸抄と名付て座の石とてとてとてとてとてとて

撰集抄卷之一

西

ちやうしー乃ちう底賸のうへに所あ敷くてゆき
 乃ちうさうま川へあれおもひ月夜交とありひ
 のうち乃彩とをよとぬく思ひいさそあけられ
 をきとゆふふ乃ちう川へきてさうーれちう
 ちうへとてとふのひつれおもひを授かり
 乃ちうにきてわかれやり盆舟思のきふ里城よそ
 ぬくまうさうーかこをさす余ふれおといふ
 ひり来ちうれちうちうりやちうらんぬてちう
 ゆめれちうのあうひちとちんきうのー西兒
 とえうさうめ々ふく乃ちうまのめ撰集抄
 と君河く鹿のたふとてあふふちうーれと金の

沙石集卷第十下終

此猿行亦壯尚矣本有癭瘰條有前後不知孰是也項
幸得無佳師之直善正奉今也不堪蘊藏於焉遂歸于
梓十日所視豈其拚乎勿敢疑也

元和二年六月吉日

圓智校讎

閑縁上巳給へ干時弘安六年中秋落畢林下ノ貴上

此物語書始事者弘安二年其後打置ノ後年
今半額ノ草之仍前後其語不同有歟萬役
聯記之又同尋ノ車ノ書之老後ノ流却
必可令加添削給耳

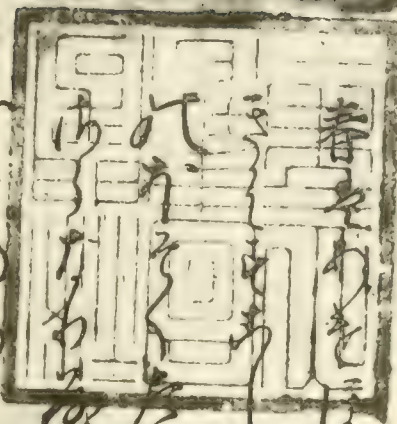
白集第十

此集行于世尚矣平有竇略條舊前後不短類此
引幸得無佳師之責然亦不令也不堪繼藏前
讀于梓十日所視置長惜乎勿舉茲也

元和四年正月

卷之四

[illegible]



春をねもほのやうくさるるなりゆく
 けがれをたれひきこるる憂やうる月日は
 おとのあうあう秋をたふさるる夕日
 なやふさうてふさうあてちうく成る
 こちひのねやうへゆくとてみうら
 かなをみわさうあてまなりまうてる
 なとのつねうらやちひさきるる
 けおう日入して風のをさひりね

大正御教心ゆく折にわぬ泉も三々
 ひうて言ふはわらうらてはは介帳と
 しぬにわ物録になううう事なり
 さ頼の人ひをえんうううとつうう
 わりき見ふ事ふをうううううう
 不用也とて奥ふる屋より酒乃と物くひ
 圓要双六なとあうひて機あふ人五
 ぼとはわたりさううううううう
 さむつううううううううううう

這兩拓書固兼好詩。燕。病。自。使。然。而。
暮。年。業。寫。情。老。也。頭。泉。南。亡。年。死。亡。
其。路。修。草。序。而。後。未。老。虛。無。
說。在。生。自。然。且。以。時。日。對。三。子。戲。海。
要。之。仁。將。以。令。於。三。子。戲。海。而。付。
丈。三。子。矣。越。句。讀。情。獨。以。下。俾。子。糾。
之。子。坐。好。其。志。忘。其。醜。卒。加。校。訂。而。已。
復。恐。有。其。遺。也。

光廣

けさくならまゝお目くらゝすゝまゝ一ひり
 ひてむまゝつりゆゝなりなりとさうこゝろ
 となくさけくさくさくやうううう油さく
 へいやうの世はひまきてをぬりし
 へいことうおほくられみくされぬく井や
 へいおのうのうれみかひすをふく人
 の種もぬやんととなふ一の人のけりさ
 目をさうなりぬ人もさゆりなと語りさ
 をゆくとみあられみむごみでさふれみ
 けさくならまゝお目くらゝすゝまゝ一ひり
 ひてむまゝつりゆゝなりなりとさうこゝろ

けさくならまゝお目くらゝすゝまゝ一ひり
 ひてむまゝつりゆゝなりなりとさうこゝろ
 となくさけくさくさくやううう油さく
 へいやうの世はひまきてをぬりし
 へいことうおほくられみくされぬく井や
 へいおのうのうれみかひすをふく人
 の種もぬやんととなふ一の人のけりさ
 目をさうなりぬ人もさゆりなと語りさ
 をゆくとみあられみむごみでさふれみ
 けさくならまゝお目くらゝすゝまゝ一ひり
 ひてむまゝつりゆゝなりなりとさうこゝろ

けさくならまゝお目くらゝすゝまゝ一ひり
 ひてむまゝつりゆゝなりなりとさうこゝろ
 となくさけくさくさくやううう油さく
 へいやうの世はひまきてをぬりし
 へいことうおほくられみくされぬく井や
 へいおのうのうれみかひすをふく人
 の種もぬやんととなふ一の人のけりさ
 目をさうなりぬ人もさゆりなと語りさ
 をゆくとみあられみむごみでさふれみ
 けさくならまゝお目くらゝすゝまゝ一ひり
 ひてむまゝつりゆゝなりなりとさうこゝろ

けさくならまゝお目くらゝすゝまゝ一ひり
 ひてむまゝつりゆゝなりなりとさうこゝろ
 となくさけくさくさくやううう油さく
 へいやうの世はひまきてをぬりし
 へいことうおほくられみくされぬく井や
 へいおのうのうれみかひすをふく人
 の種もぬやんととなふ一の人のけりさ
 目をさうなりぬ人もさゆりなと語りさ
 をゆくとみあられみむごみでさふれみ
 けさくならまゝお目くらゝすゝまゝ一ひり
 ひてむまゝつりゆゝなりなりとさうこゝろ

新御所なりきり経ひてまうともしく
 水ありしきも欠にうりうりうり
 がけ浦かた結ひてろくろまるる事
 世中いあふ人も極と又くろろろ
 かききりたのよりふ様をあらへ
 あうりつるたりきりやきん信信
 代々を経て書きぬものあはれ
 うろめまはむありあまき
 あうりあまきうひて小家なる
 又先に用ひてあらうりあまき

ひろく色あうりうりめつてろろ
 足り名とは今ろ世の人あはれ
 う包のあはれとあらうりうり
 かれろろろろろろろろろろ
 うろろろろろろろろろろろろ
 又きんうりうりうりうりうり
 もれろろろろろろろろろろ
 うろろろろろろろろろろろろ
 ありろろろろろろろろろろろ
 うろろろろろろろろろろろろ

林

月番

せりきりては、世の中、六十
 らをさききれとあつたつてつて
 すありまわては事あらうり
 のつてごりあうりうりうり
 のきりうりうりうりうり
 親王と申りうりうりうり
 嗣の帝と申りうりうり
 せにたりうりうりうり
 つてせめて三年と申りうり
 うろろろろろろろろろろ

うろろろろろろろろろろろろ
 うろろろろろろろろろろろろ
 うろろろろろろろろろろろろ
 うろろろろろろろろろろろろ
 うろろろろろろろろろろろろ
 うろろろろろろろろろろろろ
 うろろろろろろろろろろろろ
 うろろろろろろろろろろろろ
 うろろろろろろろろろろろろ
 うろろろろろろろろろろろろ

けしきむをみとてとにに——ふけふきの
 りつひふ目龍蓋奇へまうて約てななくをし
 うりて例候またとうきの程よりつたり
 志にやこれよりばもふさくらね——ちなりえ
 て竹よりとふきり——程を見ゆる程よりち海と
 鳴まれふたり初夜のとしの聲はねとちうもて
 清まにすのり事通然——物ふ世れあう
 らまのまね程は懐け者け世に五郎ともやあう
 らんとて——う煙をいとなうとくよむわり
 うるう地うくおさねをうする人乃つてこ
 うりあふくかそ所程おとのうけ者よりうや
 去りうむるもあつねうてまのちんとゆふにば

三つと云ふの事、五つに傳へられたるは、
 佛のみ、目も通さず、のち衆二傳の如くせん。夫
 ゐのまゝにこれに流すはまゝて考在蓋
 龍の山々と云乃うちにと句へてたうかぬてま
 はるわさう小八世絶やあまらねらむと見
 極る度むより端れはともかく中へはいりて
 もうりありてたゞく思ひあちつと云々あり
 いさきてふんううめりひと此處よりちや
 と是なん所中にて外ありなりきあるいど
 とそくゝぬらわぬ女乃つみくちさかと組
 れをかうゝぬまり叔迦年后佛とふひく
 て夕目れたる座のみきりありぬをうちみや

平丸物語卷一

[illegible]

平風物治表、第

きんしやうや

きんきうとやの（？）に（？）あふふふふふふふふ
乃ちきあり（？）やうう（？）あふの（？）わたり（？）
（？）し（？）い（？）と（？）り（？）ふ（？）す（？）お（？）き（？）
（？）う（？）す（？）只（？）の（？）め（？）れ（？）
きんきう（？）わ（？）ひ（？）び（？）
り（？）同（？）と（？）い（？）ふ（？）ふ（？）あ（？）の
（？）ん（？）と（？）う（？）あ（？）
の（？）ふ（？）あ（？）は（？）み（？）あ（？）
（？）あ（？）ふ（？）あ（？）の（？）ふ（？）あ（？）

祇園精舎ノ鐘ノ聲諸行無常ノ響在婆羅雙樹ノ花ノ色盛者必衰ノ理ヲ顯ス者レ人モ不又只春ノ夜ノ夢ノ如シ猛キ者モ終ニハ滅ス偏ニ風ノ前ノ塵ニ同シ遠ク異朝ヲ問ラハハ秦ノ趙高漢ノ王莽梁周伊唐ノ祿山是等ハ皆舊主先皇ノ政ニモ不從樂シミヲ極メ諫ヲ不
知シカハ不又レ滅ビニ者共也此ク本朝ヲ竊フニ承平ノ將門天慶ノ亂友康和ノ義親平治ノ信賴是等ハ猛
五皇子一品式部卿爲親王九代後醍醐護政守正

平家物語

祇園精舎

祇園精舎ノ鐘ノ聲諸行無常ノ響在婆羅雙樹ノ花ノ色盛者必衰ノ理ヲ顯ス者レ人モ不又只春ノ夜ノ夢ノ如シ猛キ者モ終ニハ滅ス偏ニ風ノ前ノ塵ニ同シ遠ク異朝ヲ問ラハハ秦ノ趙高漢ノ王莽梁周伊唐ノ祿山是等ハ皆舊主先皇ノ政ニモ不從樂シミヲ極メ諫ヲ不
知シカハ不又レ滅ビニ者共也此ク本朝ヲ竊フニ承平ノ將門天慶ノ亂友康和ノ義親平治ノ信賴是等ハ猛
力間近クハ六波羅ノ入道前大政大臣平朝臣

平家物語卷第一

祇園精舎

祇園精舎ノ鐘ノ聲諸行無常ノ響アリ沙羅雙樹ノ花ノ色盛者必衰ノ理ヲ顯ス者レ人モ不又只春ノ夜ノ夢ノ如シ猛キ者モ終ニハ滅ス偏ニ風ノ前ノ塵ニ同シ遠ク異朝ヲ問ラハハ秦ノ趙高漢ノ王莽梁周伊唐ノ祿山是等ハ皆舊主先皇ノ政ニモ不從樂シミヲ極メ諫ヲ不
知シカハ不又レ滅ビニ者共也此ク本朝ヲ竊フニ承平ノ將門天慶ノ亂友康和ノ義親平治ノ信賴是等ハ猛
ノ入道前大政大臣平朝臣

平家物語卷第一

祇園精舎

祇園精舎ノ鐘ノ聲諸行無常ノ響アリ沙羅雙樹ノ花ノ色盛者必衰ノ理ヲ顯ス者レ人モ不又只春ノ夜ノ夢ノ如シ猛キ者モ終ニハ滅ス偏ニ風ノ前ノ塵ニ同シ遠ク異朝ヲ問ラハハ秦ノ趙高漢ノ王莽梁周伊唐ノ祿山是等ハ皆舊主先皇ノ政ニモ不從樂シミヲ極メ諫ヲ不
知シカハ不又レ滅ビニ者共也此ク本朝ヲ竊フニ承平ノ將門天慶ノ亂友康和ノ義親平治ノ信賴是等ハ猛
ノ入道前大政大臣平朝臣

源平盛衰記卷第一

祇園精舍ノ鐘聲諸行無常響アリ沙羅雙樹ノ花
盛衰ノ衰 輝ヲ顯ス者シル者モ久カラズイ
異朝夏寒泥桑趙高王莽周周伊禮律
三ノ皇ノ政ニモ不隨民間ノ愁世ノ亂ヲ不知
モカハカラスノ滅ニト近尋我朝承平ノ時
終支康和ノ義親平治ノ信賴修
申ケルハノ有據傳聞コソ心モ詞モ及ハレテ桓武未
卑乎五王ノ一品武部卿葛原親王九代傳凡

源平盛衰記以卷第一

平家繁昌并德長壽院導師事

祇園精舍ノ鐘聲諸行無常ノ響アリ沙羅雙樹ノ花也盛
衰ノ衰ノ輝ヲ顯ス者シル者モ久カラズイ
使心モ終ニハ亡メ風論ノ塵ニ同レテ訪異朝夏寒泥
泰趙高漢王莽周周伊禮律山雪是舊主先皇ノ政ニモ
不隨民間ノ愁世ノ亂ヲモ不知シカハカラスシテ滅ニキ
一ノ事我朝承平ノ將門天慶ノ純友康和ノ義親平治ノ
信賴後ル心モ武キ事モトリクニ有ケレ共ニチカク入道
太政大臣平清盛ト申ケル人ノ有據傳聞コソ心モ詞モ
及ハレテ桓武天皇第五王子一品武部卿葛原親王九
代ノ後傳凡

源平盛衰記以卷第一

平家繁昌并德長壽院導師事

祇園精舍ノ鐘聲諸行無常ノ響アリ沙羅雙樹ノ花也盛
衰ノ衰ノ輝ヲ顯ス者シル者モ久カラズイ
使心モ終ニハ亡メ風論ノ塵ニ同レテ訪異朝夏寒泥
泰趙高漢王莽周周伊禮律山雪是舊主先皇ノ政ニモ
不隨民間ノ愁世ノ亂ヲモ不知シカハカラスシテ滅ニキ
一ノ事我朝承平ノ將門天慶ノ純友康和ノ義親平治ノ
信賴後ル心モ武キ事モトリクニ有ケレ共ニチカク入道
太政大臣平清盛ト申ケル人ノ有據傳聞コソ心モ詞モ
及ハレテ桓武天皇第五王子一品武部卿葛原親王九
代ノ後傳凡

信之物語卷上

父易といくく父をみる時愛を込しノ
父をみて下を化感としたりあつたり
改さるるはくも 面内いふり
家々競なりと名を并るるささるる海な
よりて凶賊にこれ事なりと上よりてまろ
うあやうう小町を國みさるるさるるし
居下として礼に背とさるるをうう力
をかるがすあはれむさほひまうう
ううんううさるる下をに改さるるさるる

うれあふくく天又みて明察と察し
 済みて天下は他族すしりりあくとりて改
 理しあたるそこの風俗明くあさく明察
 鏡なり君臣合辨す時し四海泰平なりて凶賊
 をとれしとあささるるくあささつりしと
 たりし時しくくくこれ成るあささるるく
 てれしとむる時あ家とくくくあささるるく
 わさひとわさひすくあ家とくくくむるたあ
 天下と乱ふ勢成るあささるるくくくく
 くくくあ家とくくくくくくくあ家とくく
 あささるるあささるるくくくくくくく
 旗と

三

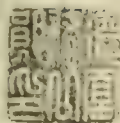
一、ハリ是以て百二萬九千八百兩時ニ隨テ國家豐饒
 ナリトシテスルヲ其ハ四海泰平ニシ凶賊タコル事ナシ君
 臣以て謀善ハ國計バク九ノム臣モトテ禮ニ背時ハ
 是ニ任テ愁フ或根レク官職ヲ爭ニ恠テ國家ヲ傾ク群臣
 二、漢書 武帝 卓トイヘ天運ノムルシタラ
 朝ニ殘スナヨリ今ニ至テ誰カ一人

朝ニ殘スナヨリ今ニ至テ護カ一人

職ニ外ノ年ノ入ハケニ便有アルモノカナ

平江卷之三

元和四曆二月日



問叔

德壽
文庫

1871

[illegible]

大
一
三

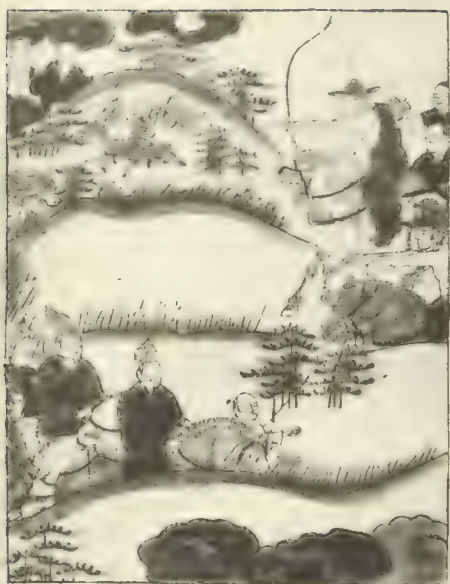
二愁有テ世上今ハサテトソ見ヘタリフル

○細河右馬頭自北關上洛襄

愛ニ蘇河右馬頭賴之其比西國ノ成敗ヲ司テ
 入ヲナツテ諸事ノ爲メニ先任テ之ヲ
 ニ相叙タリト稱ハケル間則天下ノ管轄ニ
 若君ゾニ奉舉佐ト許議同趣ニ定リシカハ
 之ニ嚴守ニ補任ノ幹事ヲ付ケル外相ノ事
 不違レカハ氏族ニ是ヲ重シ氣格モ彼會
 無爲ノ代ニ成テ出カレ共也

太平記卷第四十終

時雨應為公物云云

[illegible]

うゑに二つなり

かんていふひりーまためまにひりーひとまき
 つやすこしをわうーやうらひくまうりん乃てんこ
 ちやうーやうをぬうーやう人にも名をんえんて用
 もをみよまのあたるとーあひ清をよほとめー数事
 の光をわやうーのひーをえまつあのみ海のうと
 りーくこのすゑの子れ赤うーつひとてまうてうう
 ひりーひなふめのとやうくんまてなうーけりちう
 やもいゑにち元年十二月二十七日おゑさん乃と
 ぬちりーけりふもち乃きやうーをみーて家のや
 さいうちまけぬちうたひ乃らうーとやもみかうて



義經記卷第一

わんてうのひーとめえたひーとひとま

うどすもわうあうらいらうくんとんくとい
ちやうやうをぬふうとんかばうきて目や
みまのあうりあいとせうわとあひれめ
とれとぬーひーしをふはあれさぬ乃うこ
ととのまふれふ九部義經とてわうてうひなひあ
めいあうぐんあておりーまうくうともをぬい
くふ人移ん十二月二十七日うりるんのうに
乃うわのまううーくうてふやうれりまう
うりまけぬちうふい乃らうととみあうこまう
えそれせい二十余部うりて東國のうをわ

あううううううううとてふんわふうううう
ううううううううう

義經記卷第八

寛永十年五月吉辰

天象部

天

あま ひさかへと云ひさかへと云

あまのけー みそく ぞうの道 そろ乃海

おやそく うううみ 倭部抄

かこわの電と云ハ 樺皮経祝 南河州ハ倭部山

碧瑠璃うつてミうり也といわ

あまれうさうーと云ハ 天地けりてわ水と水

とてわ給て所がことわうて青海とさくを給取

あまのいとうーと云ハ あまのいとのあま

あまのいとうーと云ハ あまのいとのあま

吉野系譜

寛永二年十二月廿七日所記とて吉野系譜之御坂

の上の御坂とて 六箇条

吉野山後うりあふ家乃つちひとととゆのゆふりあけり

同 同 同 同 同

芳が山後うり定とひりりあけりて吉野山後うりせされり

同 同 同 同 同

本くし吉野山後うり定とひりりあけりて吉野山後うりせされり

丹後中御門

うりてふもーと云ハ 吉野山後うり定とひりりあけりて吉野山後うりせされり

雜歌

泊瀬朝倉宮御宇天皇代

太泊瀬雅武天皇

天皇御製歌

龍毛與葵籠母乳布父思毛與美夫君志持此
岳爾葉採須兒家吉開名告沙根虛見津山跡
乃國者押奈戸手吾許曾居師告名倍手吾
宮座我許者背蘭告目家乎毛名雄母
高市齒本宮御宇天皇代 息長足日廣額

雜歌

泊瀬朝倉宮御宇天皇代

太泊瀬雅武天皇

天皇御製歌

龍毛與美籠母乳布父思毛與美夫君志持此
岳爾葉採須兒家吉開名告沙根虛見津山跡
乃國者押奈戸手吾許曾居師告名倍手吾
宮座我許者背蘭告目家乎毛名雄母
高市齒本宮御宇天皇代 息長足日廣額

新古今和歌集卷第一

春之上

去つ心をとくはるけく

標取太政大臣

凡吾望ハ山も罷ておろ雲れづわや一里よ雲は

き小きり

去れりめはるけく

太上天皇

わのくともきこう雲よきに雲らしあまの月

龍たふびき

百首云てまの月一は雲の

新古今和歌集卷第一

春之上

去つ心をとくはるけく

標取太政大臣

凡吾望ハ山も罷ておろ雲れづわや一里よ雲は

き小きり

太上天皇

わのくともきこう雲よきに雲らしあまの月

龍たふびき

百首云てまの月一は雲の

見嘆 三百首あき

人ちまづに義持いちはうーとて
慈悲正ちまきかんてあふへー
うー何ちとあつひきやほ乃く小お
な小おれりも力のかと茂ちま
ここまき思ひよわうさふゆこものハ
まういさうもんくにいやうう
あ人能れもとひなうわわさう死を
僧俗ともまうつうぬへー

自讃 奇海上

太上天皇

揚さくま山とりけふうり毛乃
かりくーし目をあうぬきつか
ま乃日陰月あのかうくす見あうと浅山のさう
と派めあうぬり也あうと人ぬ乃うよ
の山をれ尾のちさるた乃うくしねとひとわ
うを孫ひと云ととりてあそとせ里さふみうまて
ふけとたうくさうさもれさうゆふりやあさ
れのあうくー屯いへんあうくみ執心ふささ
さゆ凡さうあさう毎首絶あ乃ありい入う

小倉山を名に和奇席

ま百首ハ京極殿門れをう山をさうこれおす
うまと世う一人一荷と号ひるなわれとあうひ
うまをうあううハ新古集乃撰定歌でれう後
ふりれもゆハ哥るいひう人うり世とおさめ
とみちひくけうういあうううまうまハ雲とらん
かりてかたはあうううまうううま集ハ
ひとへ小花とゆやうてまうまううううま
まといわさあううううううううううう
事を口をううううううううううううう
乃うううううううううううううううう

小倉山を名に和奇席

ま百首ハ京極殿門れをう山をさうこれおす
うまと世う一人一荷と号ひるなわれとあうひ
うまをうあううハ新古集乃撰定歌でれう後
ふりれもゆハ哥るいひう人うり世とおさめ
とみちひくけうういあううううまううま集ハ
かりてかたはあううううううううううう
ひとへ小花とゆやうてまうまううううう
まといわさあううううううううううう
事を口をううううううううううううう
乃うううううううううううううううう

左大將家六百番歌合卷才一

春

一番 元日宴

左 女 右

信定

わゝむれとておれおひつふとては人みえたまふ也

右

わゝむれとておれおひつふとては人みえたまふ也

左大將家六百番歌合卷才一

春

一番 元日宴

左 女 右

信定

わゝむれとておれおひつふとては人みえたまふ也

わゝむれとておれおひつふとては人みえたまふ也

わゝむれとておれおひつふとては人みえたまふ也

左大將家六百番歌合卷才一

春

一番 元日宴

左 女 右

信定

わゝむれとておれおひつふとては人みえたまふ也

わゝむれとておれおひつふとては人みえたまふ也

わゝむれとておれおひつふとては人みえたまふ也

わゝむれとておれおひつふとては人みえたまふ也

わゝむれとておれおひつふとては人みえたまふ也

わゝむれとておれおひつふとては人みえたまふ也

わゝむれとておれおひつふとては人みえたまふ也

わゝむれとておれおひつふとては人みえたまふ也

寛永十七年九月吉辰

阿象集卷一

春部

六月の詔

ひねとすけ

一 春五ふや 五方のりさび 雪の唱 雪のきゆり 氷のと

くねなへり

玉のりと云は、わたりぬ山を覆てけさそみぬらん
 おろくと云ふ、おろきにあり、天に永久の山をとりひく
 あゝ玉のりとらぬおろきにあり、地をとりひく
 一葉子おひつおやあし、よつひとみぬれ、祝言なり

正月元日小天子薨屠白むとヤ 菜でさあーりてさぬ
大膳以下悉く弑せたり

合衆抄

そあのかさうまりうーとつとをうし
おさひにうさうさうさうさうさうさう
いりまのんをうさうさうさうさうさう
ア おうーさうさうさうさうさうさう
おうーさうさうさうさうさうさうさう
説又説又のんさうさうさうさうさう
しとれうーにうさうさうさうさうさう
おととさうさうさうさうさうさうさう
おととさうさうさうさうさうさうさう

新抄

新抄

わ海士乃子さうさうさうさうさう
もさうさうさうさうさうさうさう
とあさうさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう
わ人さうさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう

世言抄卷上

わさうさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう
うめーさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう

世言抄卷上

わさうさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう
うめーさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさう

友

更衣

新撰

夕色くもよ方花深きあけき
 花そめより人思あふもやす月乃雲
 びめて春風さてく人よ花くもを
 けく雪霞くもあけく星や夜ふ深き
 けく色成雲乃より人ぬあふも
 山ひめれそむくみく星や夏あふも
 蟬れそあふもくもれそあふも

京祇 同 同 穴碩

友

更衣

新撰

うゑと匂よ打散花、條々あゝりさ、
花をぬき、人想ありとや、す川乃雲
せめて春をさてゝ、人よ取て、
けさを霞うをさてゝ、人よ夜を、
あゝりさ散雲乃と、人想ありと、
あひめれそむく、人よ、
蟬れとやをふを、れとや、

宗 同 同 宗
碩 碩 碩

反

更夜

方

新撰

りて、^上花を花除く。うゝりさ花
苑そめを切へぬて病をやむつゝの雲
せめて暮つさて切へふ花をうを
けさは霞うを記さるるや夏あつを
うゝ父は雪のこゝへぬゝうを哉
山那のそひるみと星やあつゝうを
輝れそやうふあふれそめあふりと
うれそめやひとへゝうあれあつ夜

宗祧 宗祧 宗祧 宗祧

新撰犬狹伎集

春記

あまのうへへ云々なり
うへをばこりとりふたなりゆ
めれうましやかりいも
揚りく乃まつれをりうまなりて
うもそのうもをうまぬまなり
あひひれまうなりあふれ
えうとめなりわうなりなり
さうなりなりなりなりなりなり

(田 安) 首卷 版(口) 同 九七四

562 (川安) 首卷 本種二第 集波筑犬撰新 一八四

(田安) 首卷 版(イ) 本種一第 帳 旬 發 八七四

561 (山 安) 首卷 本種二第 同 〇八四



新撰大鏡後集

春部

林全指集

かしこもろもろもすうめきなり
 新撰大鏡後集
 あかききしやかりいそふは
 梅うものもつとねへりるそふは
 うそふあふくしれをうに
 新撰大鏡後集
 かしこもろもろもすうめきなり
 うそふあふくしれをうに

新撰大鏡後集

春部

かしこもろもろもすうめきなり
 新撰大鏡後集
 あかききしやかりいそふは
 梅うものもつとねへりるそふは
 うそふあふくしれをうに
 新撰大鏡後集
 かしこもろもろもすうめきなり
 うそふあふくしれをうに

新撰大鏡後集

春部

林全指集

かしこもろもろもすうめきなり
 新撰大鏡後集
 あかききしやかりいそふは
 梅うものもつとねへりるそふは
 うそふあふくしれをうに
 新撰大鏡後集
 かしこもろもろもすうめきなり
 うそふあふくしれをうに

新撰大鏡後集

春部



かしこもろもろもすうめきなり
 新撰大鏡後集
 あかききしやかりいそふは
 梅うものもつとねへりるそふは
 うそふあふくしれをうに
 新撰大鏡後集
 かしこもろもろもすうめきなり
 うそふあふくしれをうに

とかくもろくやにやうく秋をくまき月のもめふ
 から一のうもきゆくゆへハうつ三火のわいどにを
 きてせしおをせめまくらに上にかけさむき月さへ入
 まへるやこハむ乃孫さくさうこころあてこひん
 な事かふとくわくわくおわりやわむむふに
 めさちふふわくくあつまるひ乃月にこえし孫ら
 まぬまふまくらせそなてふもをからわさちがわ
 さとをこねさういとおさまよふたかきさても
 しにわけておかしりれた孫あやこがゆるさこふ
 かし孫を孫お小己のかいづるあはぎの一むかま
 せりけるわけよりさうきとふひのうけいてわ

花ふまうあさぬかりの
 山のいもふちせよあさ
 わさだわさうさこかりて
 かをわつをらん

口

花 かまど
 風りうくあささるわさ
 わさるわさあまのりさけて
 こわさゆくふね



うれ申樂延年のく日さその源を尋小び
 小くまうどうろさ地祇五代のまてお後祇の
 祇の天乃忠戸乃りあそのお後祇一厨八面
 万の祇うらたうまり系よあのまりお後祇曲を
 けく里祇りめあのて忠戸のおゆくかうと
 りお事代そうーおふさおさう成能てま
 照宣太祇まい日さお後祇日中略く小うりよ
 里ひく今ふあ曲繁留也これハ厨おささ
 くまきえとて風を侍まふと云々代へて
 里おまいその風をまふお後祇ひひくう
 ららんをんお後祇あまたるまは祇人りて
 かりわさーを代わまたの役者を略ふなり

申樂延年のく日さその源を尋小び
 小くまうどうろさ地祇五代のまてお後祇の
 祇の天乃忠戸乃りあそのお後祇一厨八面
 万の祇うらたうまり系よあのまりお後祇曲を
 けく里祇りめあのて忠戸のおゆくかうと
 りお事代そうーおふさおさう成能てま
 照宣太祇まい日さお後祇日中略く小うりよ
 里ひく今ふあ曲繁留也これハ厨おささ
 くまきえとて風を侍まふと云々代へて
 里おまいその風をまふお後祇ひひくう
 ららんをんお後祇あまたるまは祇人りて
 かりわさーを代わまたの役者を略ふなり

夫申樂延年のこゝろをさそ縁をなほりて
 神乃内村は天乃岩戸の神遊志願ひ一時八
 万の神うちたうまう系みあつたりたまひに
 曲をけり内よりめあけて岩戸のまへより
 かゝるとりふ事候そふし神樂成候
 うふふふふりびりこまは曲樂品也さき
 目おま曲さきいとてそ風をけりへまふと
 いへて代るそそ風をけりへまふと
 及ひふふふかゝる風は役者あまふと
 法人もてあふふ事なわたりて代あまふと

夫申樂延年のこゝろをさそ縁をなほりて
 神乃内村は天乃岩戸の神遊志願ひ一時八
 万の神うちたうまう系みあつたりたまひに
 曲をけり内よりめあけて岩戸のまへより
 かゝるとりふ事候そふし神樂成候
 して天照皇太孫宮岩戸をお祈り日中あき
 うなるよりびりこまは曲樂品也さき
 目おま曲さきいとてそ風をけりへまふと
 いへて代るそそ風をけりへまふと
 及ひふふふかゝる風は役者あまふと
 法人もてあふふ事なわたりて代あまふと

高砂

阿蘇郡乃由は法座の神也三層有太極也
 流るる砂金せん高砂の松のまゝなり
 藤原具風秋やんも旧友も留るる成て
 砂の松うとつとんとすきハ其も友
 てハる一境とある人いざんとり
 いさ乃去 松林必不や 生松
 のひをむ 相生と書 口傳り
 不思議 オモヒハカサカルコト云也
 夫婦 オットラニナリ
 山川萬里ヲ隔れ共 ヤハカハ万里ヲハツルナリ

抱影 ていふ乃浮面より

不覺ノ涙 オホエス安ヲナクナク云義也

ハヤ還幸トスムレハ コハ法皇ナレハ還御トコソ申

ヘキヲ還幸ト作レルハ不審ナル由檢校中ス

守清粹判

阿蘇郡ノ内ニ千座ノ神也三座アリ大社也

誰ツカモ知人ニセシ高砂ノ松モ昔ノ友ナラナクニ

藤原興風歌也心ハ舊友モ皆昔ニナリテ高砂ノ松

コソトイハントスレハ其モ昔ノ友ニテハナシ誰ツ知人ニ

セント也

生松 筑前名所也

相生ト書 口傳アリ

不思議 オモヒハカラサルコトヲ云ナリ

院ヲ海ヨリ取テクハ也

體顔 帝王ノ御面也

不覺ノ淚 オホハス淚ヲナカニナクテ云義也

ハヤ還幸トス、ムシハ コハ法皇ナシハ還御トコソ申ヘキ

ヲ還幸ト作ルハ不審ナル内檢扶申

高砂

阿蘇郡ノ内ニ千座ノ神也三座アリ大社也

誰ツカモ知人ニセシ高砂ノ松モ昔ノ友ナラナクニ

藤原興風歌也心ハ舊友モ皆昔ニナリテ高砂ノ松

ソトイハントスレハ其モ昔ノ友ニテハナシ誰ツ知人ニ

セント也

生松 筑前名所也

相生ト書 口傳アリ

不思議 オモヒハカラサルコトヲ云ナリ

高砂

阿蘇郡ノ内ニ鎮座ノ神也三座アリ大社也

誰ツカモ知人ニセシ高砂ノ松モ昔ノ友ナラナクニ藤

原興風歌也心ハ舊友モ皆昔ニナリテ高砂ノ松コソ

トイハントスレハ其モ友ニテハナシ誰ツ知人ニセシ

セント也

イキシ松 筑前名所也 生松

アヒヲニ 相生ト書 口傳アリ

不思議 オモヒハカラサルコトヲ云ナリ

夫婦 オツトヲントス

山川萬里ヲ隔レ共

松ハ非情ノモノタニモ

ヤマカハ萬里ヲヘタツルナリ

松ハ非情トハコハロナキ本

新刊錦繡段

天文

春月

柳塘漠漠暗啼鴉

好是夜閑人不寢

京城翫月

秋滿西湖月正圓

西風茅葦長淮地

月

呂中孚

一鏡晴飛玉有華

半庭寒影在梨花

盧登甫

家家醉賞倚欄干

應有征人帶淚看

袁郊

錦繡段鈔

天文

天文トハ日月星辰風雨雪霜之類ヲ云フ
是等ハ皆天之文章ヲ

春月

柳塘漠漠暗啼鴉

好是夜閑人不寢

一鏡晴飛玉有華
半庭寒影在梨花

春月トハ類說東坡在汝隱初春庭梅盛開月色鮮雪
夫八日春月勝秋月天秋月令人懷懷春月使人
悅悅矣曰子誠知言召客飯

一ノ句ハ月ノ欲出時分ソ日暮柳塘ノ邊ニ鴉欲栖柳

ヲ柳茂鴉トテ鴉ハ柳ニモスムモノソ其時分月出テ如玉

鏡也三四ノ句ハ夜深テノ景色自黃昏到五更之月

の景元景詩云園花院草深冬月柳絮地暗

上景華ト月ト柳トハ一景而前ノ爲此景平景到

錦繡段鈔

天文

春月

柳塘漠漠暗啼鴉

好是夜閑人不寢

京城翫月

秋滿西湖月正圓

西風茅葦長淮地

月

呂中孚

一鏡晴飛玉有華

半庭寒影在梨花

盧登甫

家家醉賞倚欄干

應有征人帶淚看

袁郊

近有新編新選二集而出有中唐至元季每
篇千餘首童蒙者往々倦背誦余暇日采摭
爲三百二十八篇又自書以與二三子令誦
之庶幾知鳥獸草木之名云
庚正丙子林鐘十有七月
前建仁禾隱叟龍澤書

意云六季仲呂上旬二條觀音町中興及集開之

錦繡段鈔

天文 天文トハ日月星辰風雨雪霜之類ヲ云フ

是等ハ皆天之文章ヲ

春月

呂中孚

柳塘漠々時啼鴉 一鏡猶飛玉有華
好是夜闌人不寐 半庭寒影在梨花

春日トハ類詠東坡在政隱初春庭梅盛開月色鮮霽夫
人曰春月勝秋月云秋月令人悵悵春月使人和悵悵笑
曰予誠知言召客飯

一ノ句ハ月ノ欲出時分ノ日暮柳塘ノ邊ニ鴉欲啼柳ヲ柳
藏鴉トテ鴉ハ柳ニモムモノヲ其時分月出テ如玉鏡也三
句ノ句ハ夜深ヲノ景也黃帝到五更之月也晏元獻詩
云梨花院落溶溶月柳絮池塘淡々風トテ梨花ト月ト相

錦繡段鈔

天文 天文トハ日月星辰風雨雪霜之類ヲ云フ

是等ハ皆天之文章ヲ

春月

呂中孚

柳塘漠々時啼鴉 一鏡猶飛玉有華
好是夜闌人不寐 半庭寒影在梨花

春月トハ類詠東坡在政隱初春庭梅盛開月色鮮霽夫
人曰春月勝秋月云秋月令人悵悵春月使人和悵悵笑
曰予誠知言召客飯

一ノ句ハ月ノ欲出時分ノ日暮柳塘ノ邊ニ鴉欲啼柳ヲ柳
藏鴉トテ鴉ハ柳ニモムモノヲ其時分月出テ如玉鏡也三
句ノ句ハ夜深ヲノ景也黃帝到五更之月也晏元獻詩
云梨花院落溶溶月柳絮池塘淡々風トテ梨花ト月ト相

續錦繡段

天文

霽雪

風捲寒雲暮雪晴 江州洗盡柳條輕
簾前數片無人掃 又得書窗一夜明

雪月

楊濟翁

霜竹輕吹小夢回 雪窗掩得眼增開
月明幸自無人覺 誰遣梅花送影來

三學院雪夜對月

趙閣

續錦繡段鈔一

錦繡段 文選二十九張平子四愁詩四思曰云云美人贈
我錦繡段何以報之青玉案

云云又揚誠齋錦綉策滕王閣記乃一段錦云阿房宮賦乃
一尺璧

天文 易上繫辭六易與天地準故能彌綸天地之道仰以觀於
天文俯以察於地理是故知幽明之故云

霽雪

戎昱

才子傳三戎昱荆南人美風度能談少舉進士不仕乃放遊
名都雖貧士而軒昂氣不減阻愛湖山水來客時李襲慶
察桂林寓官舍月夜聞隣居行吟之音清麗達明訪之乃昱
也即延為幕賓待之甚厚云憲宗時邊烽緊急大臣議和親
上曰比聞一詩人姓名稍僻者為誰宰相對以冷朝陽包子

題倭名鈔

天祐

從五位上能登守源朝臣順者其先出自
弘仁帝帝生定賜源姓號之楊院大納言
定生至仕擢從四位下左京大夫所謂天
下之好色者也至生攀攀生順順爲人博
聞強記識字屬文賦詩又詠倭歌比壯舉
名進士直禁學院邑上帝天曆五年詔順
及大中臣能宣清原元輔紀時文坂上望
城於昭陽舍撰後撰和歌集二十卷時人

東第



東 ○巴陵湖在日本 ○拜月樹 ○荷花滿院
一菊也 ○鶯舌只在水西 ○西門竹葉片隨方

夢不至漢一隨也又隨以琴瑟愜蟬事也

幕西第六龍友宗事也

水 丁 一 楚 戶 砧 五 生 璽 一 井 漢 州 中 先 人 講 黃 老 性 保 湘

浙江山浙西水有佳橫江一草心蘇氏兄弟三人

秘河川二片
密舞來一建片並
○北之韓江一之李李白

堂與玄馬鞋非帳融曰吾道一氣自○下寬馬○乃

馬正一

斗柄一而天、水乃折之。人の事上國は欲しせし

○魚花ト魚ト曰我村東徒ト紅山ト裏ト還知曾免望女

大興縣志

大和玄象

かゝるんハ名乗り
因りてうノ事也
うゝあく預めハ
いゝ此ニラをいハ
ハ。でとハ見ち預めハ
うまハあけをいハ
ふハ預めハ

管子地員篇第一
卷之十一

人
印

天子仁民父母以爲天下主尚書
人主尊道左傳

天子無戲言

上爲皇天子下爲黎民父母爲天牧養元元

王以四海爲家以天下爲子

天生烝人立君牧之有道則人戴之如父母

天以堯舜爲惠，終以仁孝理之。帝紀

知不足齋叢書

略要抄上

歳時部第一

在舊日

歳旦

天地四方并

夫春有歳之始也始得其正三時有成後漢書

歳首祝折松枝男七女二七初學記

正月子日登岳河耶傳云正月七日登岳遠望四

方得陰陽傳除煩惱之術也什節記

正月七日俗以七種菜作羹食之八無萬病也齊民要術

正月十五日亥時煮小豆粥為天狗祭庭中案上

則陰陽傳向東方再拜長跪服之終年無疫氣

略要抄上

歳時部第一

在舊日

歳旦

天地四方并

夫春有歳之始也始得其正三時有成後漢書

歳首祝折松枝男七女二七初學記

正月子日登岳河耶傳云正月七日登岳遠望四

方得陰陽傳除煩惱之術也什節記

正月七日俗以七種菜作羹食之人無萬病也齊民要術

歳時

正月十五日亥時煮小豆粥為天狗祭庭中案上則其粥疑時向東方再拜長跪服之終年無疫氣

語圖上

小兒ノ日ヲ論スル事



孔子東遊シテフタリノ小兒ノ日ヲ論スルヲ聞カシ其ニヘテ問獨ノ曰ク日ノ始メテ出ル時人問テ去事近シ半天ニ成テハ人間ヲ去ル事遠シ然レ故ハ日ノ始メテ出ルヲ見ルニ其大キサ車ノ五ノコトニ半天ニ成レハ其大キサハチノコトニ是近キ物ハ大キニ見ヘ遠キ物ハ小サク見ル理ナリ又獨ノ曰ク日ノ始メテ出ル時ハ人間ヲ去事遠シ半天ニ成テ人間ヲ去事近シ然ルニハ日ノ始メテ出ル時ハ暑カラス半天ニ成ハ暑事

孔子道ニ出ントスニハトニ兩フリテ蓋ナレ門人六ト南カ本ニアリカランヤ孔子ノ云ト南ハ財ヲ蓄ハ事人ニカランヤト云ク人ト交ルニハ其長クナレテ短クワレハ故ニ久交ル其レシムヲ知テ蓋ヲカランハ短ヲ忘ルトイウヘカラス

語圖下終

桃華老人撰

寛永四年丁卯秋七月既望 刊之

危言抄卷之上

高鳥盡良弓藏狡兔死走狗烹

延ハ韓信ヲ殺サル、也敵ノ有時コソ兵

亡用ヒラル、項羽亡一統ナル故韓信ヲ

殺ナル者ハ还テ疑ハレテ今キラル、ト云

ハ名大モ殺サル、也韓信功ヲ盡シ項羽ヲ亡ホ

テ高祖ノ大下トナレトモ謀叛スルトサンセラレテコロ

サル位トタル者ノ心持ツ、ミミ也史記ニモ韓書ニ

モ此事有也三略ニハ敵國滅謀臣亡ト有モ此

心也

中州善國以富封之其家羨色珍玩以悅

其心

此臣本者當初安兵二年兼賴我饒諸本

正應之中神祇權大副卜部兼方筆之收

于万室以來永仁正四位下行神祇權大

副兼山城守卜部仲李嘉元甲辰沙彌蓮

惠康永土午神祇權大副兼負轉書之云

慶長十五寅申廿五志八

洛陽馬子三白誌

日本書紀卷第一

神代上

古天地未剖陰陽不分渾沌如雞子溟滓而含

牙及其清陽者薄靡而爲天重濁者淹滯而爲

地精妙之合搏易重濁之凝場難故天先成而

地後定然後神聖生其中焉故曰開闢之初例

壤浮漂譬猶游魚之浮水上也于時天地之中

生一物狀如葦牙便化爲神彌國常立尊曰

日本書紀卷第一

神代上

古天地未剖陰陽不分渾沌如雞子溟滓而含

牙及其清陽者薄靡而爲天重濁者淹滯而爲

地精妙之合搏易重濁之凝場難故天先成而

地後定然後神聖生其中焉故曰開闢之初例

壤浮漂譬猶游魚之浮水上也于時天地之中

生一物狀如葦牙便化爲神彌國常立尊曰

日本書紀卷第一

神代上

古天地未剖陰陽不分渾沌如雞子溟滓而含牙及其清陽者薄靡而爲天重濁者淹滯而爲地精妙之合搏易重濁之凝場離故天先成而地後定然後神聖生其中焉故曰開闢之初洲壤浮漂譬猶游魚之浮水上也于時天地之中生物狀如葦牙便化爲神彌

日本書紀卷第一

神代上

古天地未剖陰陽不分渾沌如雞子溟滓而含牙及其清陽者薄靡而爲天重濁者淹滯而爲地精妙之合搏易重濁之凝場離故天先成而地後定然後神聖生其中焉故曰開闢之初洲壤浮漂譬猶游魚之浮水上也于時天地之中生物狀如葦牙便化爲神號國常立章至貴曰尊自餘曰命並訓美舉等也下皆倣此次國枳樅

日本書紀卷第一

神代上

古天地未剖陰陽不分渾沌如雞子溟滓而含牙及其清陽者薄靡而爲天重濁者淹滯而爲地精妙之合搏易重濁之凝場離故天先成而地後定然後神聖生其中焉故曰開闢之初洲壤浮漂譬猶游魚之浮水上也于

神代本紀

無主始天神

天祖天讓日天先

天讓日天先霧地讓日地先霧

手

天讓日天先霧地讓日地先霧

常尊生於虛與極無先有無先主

形雲躬可申示中司屈示屈可示未易

義經下軍勢前後左右ヲカコム此人御テ中ニ中一
 年ナレハ目出カリシ事以今ノ様也全ノアリキヲ見ニ濟
 班ノ定メナキヲ諸人袖ヲシホリケル内大臣ヲハ大路ヲ渡
 テ後ハ判官ノ宿所ニ御座ス建禮門院ハ東山吉田ノ邊ニ
 入セ玉ヒグリサシモ憂カリシ歟ノ中ノ御住居今ハ戀ヲ思
 食ケル同北十日頼朝從二位ス内大臣追罰ノ賞トシ聞
 シ今夜内侍所温明殿ニ入ラセ玉フ三夜御神樂アリ平
 大納言大寺ノ皮籠ヲ判官ニ奉レテ此中ノ文トモ披露
 ラハ人モ多ク損レ我ハ助カリカタキ由歎テ義經ニ親ク疾
 彼皮籠ヲ乞取テ則焼失ハル何ナル物カアリケン不審也今
 ハ國梯人ノ通モ煩ヒナシ九郎判官程ノ人コソナゲレト
 中ケリ義經院ノ御氣色モ能ク人モ多思付ケサレ共頼朝

解聲聞記下

小瀬道甫判

義經ヲ右ノ生捕大路ヲ渡サンニ若平家ノ殘黨等イカナル
 事ヲ仕出ス事モアラントテ軍勢ニ仲テ前後ヲ右ツ打圍
 マセラズ此人々都ヲ出給テ僅ニ中一年ナシハ目出カリシ
 事モ今ノ様ニ覺テ哀ナリ班ノアリキヲ定ナサ盛者必衰
 ト云ナカス袖ツレホフメ人ハ内大臣ツハ大路ヲ渡レテ
 後ハ判官ノ宿所ニ推コメテ建禮門院ハ東山吉田ノ
 邊ハ入シテイラセケリサシモ物ウカリシ旅艱ノ御住居モ今
 ハ戀クヲ思食シケル同北七日頼朝卿ヲ從二位ニ任セラ
 ル偏ニ内大臣追罰ノ御恩賞トシ聞ヘシ今夜内侍所ツハ
 温明殿ニ入シテイラセ二夜ノ御神樂執行セ給テ平木納
 言ハ秘書ナトハツル慣テ判官ニ奉レテ此中ノ文トモ

承久記上

百王八千二代ノ御門ヲハ後鳥羽院トシ申ケル隱岐國ニ
 テ隠レサセ給シカハ隱岐院トモ申ス後白河院ノ御孫向
 倉院第四ノ御子壽永二年八月廿日四歳ニテ御即位御
 在位十五箇年ノ間藝能ニテ學ヒ給ヘル歌撰ノ花ヒ
 開キ文章ノ實モナリヌヘシ然リシ後御位ヲ退カセ御座
 第一ノ御子ニ譲リ奉ラセ給ヌ其後イヤキ身ニ御肩ヲ雙
 御膝ヲクミベシテ后妃米女ノ無止事ヲハ指ツカセ給ヒ
 テアヤレノ賤ニ近付セ給フ賢王聖主ノ直ナル御政ニ背
 キ横シメニ式藝ヲ好マセ給フ然ル間弓取りヨク打物持テ
 タカカナランシ召使ハヤト御尋有レカハ國々ヨリモ
 進ミテ召メ勅定ニ隨ヒデモ祭ル白河院ノ御時比面ト云

右兵亂之記行千世年尚矣故本有廣略條有
 脫落今也集於多本以一按申
 于時元和四年戊午曆孟夏中十日

承久記上

〔紫香〕

百五十八十二代ノ御門ツハ後鳥羽院ト申ケル隱岐國ニテ
 カクレシ給ヒテハ隱岐院ト申ス後白河院ノ御孫高倉院
 院第四ノ御子壽永二年八月九日四歳ニテ御即位
 在位十五箇年ノ間藝能ニテ學ヒ給フルニ歌仙ノ花モリ
 ナ文章ノ質モナリヌハ然リシ後御位ヲ退カセバニクテ
 第一ノ御子ニ譲リ奉ラセ給又其後イヤシキ事ニ御肩ヲ雙
 御腰ヲミマシメテ后妃采女ノ止事ナサバサニツカサ給
 テアヤシノニツニ近クセ給フ賢王聖主ノスナホナル御政
 ニ昔々横シマニ武藝ヲ好マセ給メ然レテ弓取アコクヲ物
 モナテレタハカナラン者ヲ召ツカハヤト御尋有ニカハ國々
 ヨリモ進ミテ参リ又勅定ニ隨ヒテモ參リ白河院ノ御時止

承久記上

百五十八十二代ノ御門ツハ後鳥羽院ト申ケル隱岐國ニテカ
 クレサセ給ヒカハ隱岐院ト申ス後白河院ノ御孫高倉院
 院ノ御子壽永二年八月九日四歳ニテ御即位御在位十
 五箇年ノ間藝能ニテ學ヒ給フルニ歌仙ノ花モサキ文章ノ質
 ナリヌハ然リシ後御位ヲ退カセバニクテ第一ノ御子ニ譲リ奉
 ラヤ給ス其後イヤシキ身ニ御肩ヲ雙御腰ヲクミマシメテ后妃采
 女ノ止事ナサバハサレカセ給ヒテアヤシノニツニ近カセ給フ賢王
 聖主ノスナホナル御政ニ昔々横シメニ武藝ヲ好マセ給フ然レ間
 弓取アコクヲ物モナテレタハカナラン者ヲ召ツカハヤト御尋有ニ
 カハ國々ヨリモ進ミテ参リ又勅定ニ隨ヒテモ參リ白河院ノ御
 時北面ト云フ事ヲ始テ侍リ近ク召使ハルハ事アリケリ此御時

新田方中義貞軍記

諸君ありと云ふまじき武二ふまじき
 義貞天竺のこゝろ一もそそ國を治む
 海よりある海よりいさむいさなふたふ
 をもつて先と詩歌後には藝と行也
 是が武をいふ其の基といふも合義を
 なう一升小墨祖乃ぬ我後ちをばた
 をうふむつては依て代くおく教
 へ事わ時人虎より人虎なり

補其間雖其不獲生...

于時慶長第十九年無射望日

以時

慶長一十一年申年五月六日覺給テ一冊紙天
山鹿記院藏法名道儀ト號ス云々

今世時事者保元平治平家物語皆以實梓工矣於是
某久矣亂及明德記及應仁記不幸而免如予聞人幸
而得之者為日之裏持々以古本來訂之則畢其功也
補其闕然不獲其全也庶幾後就人有道而玉焉而
已

元和三年

以詩

ツ明カハ京城花鮮ニシ句ヲ武運延命ノ奏 楚レ拍胸
ノ月明ニシ光シ法燈萬年ノ秋ニ羅ス有難カリシ御代也
明德記卷第下終

私曰此册ノ征夷大將軍ハ草氏ノ御孫義詮ノ御子義滿
ノ御事也應安元年御歲十一歳ニシ任左大臣將中官大
納言位從一位太政大臣ニ至リ治世四十一年御歲五十
一十甲應永十五年五月六日覺給テ別称ハ山鹿記
院藏法名道儀ト號ス云

今世好事者保元平治平家物語皆以實梓工矣於是某
久矣亂及明德記及應仁記不幸而免如予聞人幸而得之
者為日之裏持々以古本來訂之則畢其功也補其闕然不
獲其全也庶幾後人就有道而玉焉而已

于時元元成仲下句

開

應仁記卷之上

唐所謂野馬臺ニ丹水流盡テ後天命有三公ニ云迄ハ先
ハノ註ヲ下ス處也百王流畢甥猥犬稱英雄云是ヨリ以
後ハ必申戊ノ歳ノ人有テ威ヲ四海ニ振ハント書テ筆ヲ給
ヒリテ愛慕龍請之末句ヲ注解スル者也百王流畢テ猥犬
稱英雄星鳥野ノ外ニ流シ龍鼓國中ニ置レ青丘與赤土
茫々遠為空矣誠哉斯言蓋餘此觀之其二者起丁亥亂
附細川右京大夫勝元永享二年庚戌二生山名右全
古人道宗全ハ應永十一年甲申二生不是曰猥犬稱
英雄乎其二者九重交擔四衢並冕 卿大夫之大厦高樓
日窓成灰場畢ト天座於農夫之田停雲車於牧童之野
又鶉聲ヲ以聞燕處之檀栳雲雀ノ露臺之軒端之粧二散

應仁記卷之上

前所謂野馬臺ニ丹水流盡テ後天命有三公ニ云迄ハ先
人ノ註ヲ下ス處也百王流畢甥猥犬稱英雄云是ヨリ以
後ハ必申戊ノ歳ノ人有テ威ヲ四海ニ振ハント書テ筆ヲ給
ヒリテ愛慕龍請之末句ヲ注解スル者也百王流畢テ猥犬
稱英雄星鳥野ノ外ニ流シ龍鼓國中ニ置レ青丘與赤土
茫々遠為空矣誠哉斯言蓋餘此觀之其二者起丁亥亂
附細川右京大夫勝元永享二年庚戌二生山名右全
吾入道宗全ハ應永十一年甲申二生不是曰猥犬稱天
雄乎其二者九重交擔四衢並冕侯卿大夫之大厦高樓
皆悉成灰場畢ト天座於農夫之田停雲車於牧童之野
故鶉聲ヲ以聞燕處之檀栳雲雀ノ露臺之軒端之粧二散

陽記

ちやうどいふやうにさういふ人はいすみやうに
 ひととていふやうにたまたまありては上より
 ちやんとていふのうらやまめあふたり
 あく他ふちやうといふちやうといふ
 りるれあふちやうといふ中納言のちやう
 とく三河の國れあふちやう母あふちやうのち
 やうちやうといふいたう一乃ちやうくちやう
 れちやうちやうといふちやうといふくちやう
 七つちやうといふちやうちやうちやうちやう
 こころなちやうのちやうちやうちやうちやう



ちやうどいふやうにさういふ人はいすみやうに
 ちやんとていふのうらやまめあふたり
 あく他ふちやうといふちやうといふ
 りるれあふちやうといふ中納言のちやう
 とく三河の國れあふちやう母あふちやうのち
 やうちやうといふいたう一乃ちやうくちやう
 れちやうちやうといふちやうといふくちやう
 七つちやうといふちやうちやうちやうちやう
 こころなちやうのちやうちやうちやうちやう



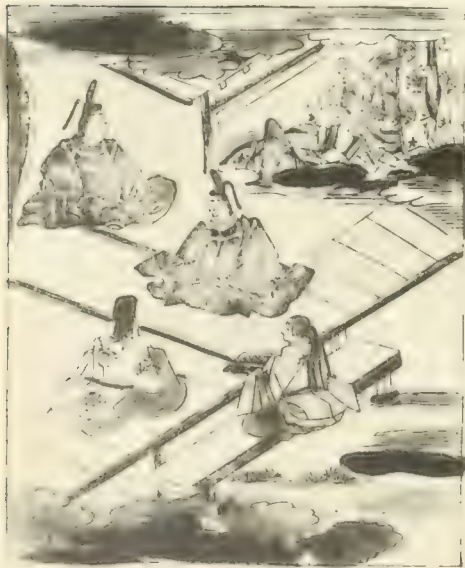
ふたりのゆんうれと比みやこりふあ
 びろの中 胡言の夜あやせれ上人がま
 じうめゆふのつとて梅をちり橋と
 うさやうふあめゆへつとてちりけさ
 美の目くしひさききくわあやふ
 あふあてせとさゆふらんわんてうのわ
 りてあふまんふれあふさふふふ
 てとけくしたゆふくわあふさふもの
 中に山ふあふせうあやうれいたふれ
 海ふまけえうさだいゆふのえおのあ

四十二のおのこ

ひーあふのうしひのあゆみとくうの
 りあふからせりすきききききき
 のあふうらふかてんのさくうんゆふへ
 あうはひのあふえんくわあゆふへ
 されうあひあひめりまふさううふおわ
 けうあふえんくわあゆふへ
 としあふのあふえんくわあゆふへ
 りあふえんくわあゆふへ
 まあふえんくわあゆふへ
 ひあふえんくわあゆふへ
 まあふえんくわあゆふへ

四十二のおのこ
 ひーあふのうしひのあゆみとくうの
 のあふえんくわあゆふへ
 六月のあふえんくわあゆふへ
 りあふえんくわあゆふへ
 なれうあふえんくわあゆふへ
 せけうあふえんくわあゆふへ
 まあふえんくわあゆふへ
 かあふえんくわあゆふへ
 中あふえんくわあゆふへ
 とあふえんくわあゆふへ
 さあふえんくわあゆふへ

四十二のおのこ



あやうのりんち下
そのうちあやうそんれんちまやぶらんを
のけくけりなるともあやうのやうれ若と
うけまゝ極まらんこくくそくひさそまの
らんをにげりまゝけまゝのりんちま
二年うあひさうま新ひりけえれあひさ
見はん乃くまうまやうとりきたまひて三子
大せういうあやうむらん乃こそきて
ゆらんそまも母まふ人乃うまんまむま
まゝまをまけらんてけてさうん
とひきまてなうまてんへのかり終りんと

あやうのりんち下
そのうちあやうそんれんちまやぶらんを
のけくけりなるともあやうのやうれ若と
うけまゝ極まらんこくくそくひさそまの
らんをにげりまゝけまゝのりんちま
二年うあひさうま新ひりけえれあひさ
見はん乃くまうまやうとりきたまひて三子
大せういうあやうむらん乃こそきて
ゆらんそまも母まふ人乃うまんまむま
まゝまをまけらんてけてさうん
とひきまてなうまてんへのかり終りんと

それまればたのちもさうさうのちもあやうさうい
乃きまてくも秋の月うをいて伊ふくさうハ
けちやうやうのさうあやうの天にりふ日な
ていふはと見えんまゝのらんさうていふ
れと見えんやうり人あゝそんるのハ々見え
さいきまをいふはと見えんまゝのらんさう
なる天上のさういふはと見えんまゝのらん
あやうのりんちと見えんまゝのらんさう
さういふはと見えんまゝのらんさう
さういふはと見えんまゝのらんさう
さういふはと見えんまゝのらんさう

秋夜是物語
後堀河院ノ御宇ニ西山ノ暗昧上人ト開ヘテ道學兼備
タリシ人ハ元ハ北嶺東嶺ノ衆徒勸學院ノ宰相律師兼
海ト云人ニテツ有ケル内ニハ玉泉ノ流ヲ汲テ内教三觀
ノ月ヲスミシ外ニハ黃石カ路ヲ踏テ黃沙背水ノ風ヲ集
リサシハ或時ハ忍辱ノ衣ノ下ニ攝受慈悲ノ玉ヲツミシ或
時ハ摧伏ノ丹ノ上ニ忿怒ノ勇鎧ヲ振テ誠ニ眞俗倚賴
文武ノ達人ナリ壯年ノ比花ノ散葉ノ落ルヲ見テチヌ夜ノ
夢ヤ覺タリナシハツモ何事ツヤ我道俗塵ノ境ヲ離レテ
釋氏ノ門室ニ入リカヲ明慕ハ但名聞利欲ニミ建テ出
離生死ノ勢ニ怠リヌル事ノ淺猿サヨト愚フ心出來ニケレ
ハヤカテ山ヨリ山ノ奥ヲモトメテ柴庵ヲスミテハヤト思ヒケ

如の限る況圖浮不定のうひは扱れてとや毛と
 衆のう小三界の果粒を苦なりつと未とすはた乃
 里んえを念にすりて生とや人るの百事見くと
 ひなりくすても身縁う也元務法の開洋せうとさ
 一小あすといて世上の神おまねけのにのりま
 の実勿れ自他乃所の思へことにも又わやゆま
 里感ハわらう感ハひかき縁かよゆへ里んそ
 去玄う嗚呼にしくなりんの事を泣きさすを去
 して人世れのやまをある事と云めい勿已

鴛鴦物語下段

一條祥同兼良公述作也

治福舎藏

鴛鴦合戦物語目録卷一

- 一 秋管えの曲乃事
- 一 七夕因位鳥假粧又同文使打擲
- 一 山鳥不神述懷敵一漸定鳥羽
- 一 山鳥吳楚黑白駢進情ある廻文

ゆてもがわさるわ事とを鴛鴦の剛健せうで
 き一少あすといて世上の神おまねけのにのりま
 の実勿れ自他乃所の思へことにも又わやゆま
 里感ハわらう感ハひかき縁かよゆへ里んそ
 去玄う嗚呼にしくなりんの事を泣きさすを去
 して人世れのやまをある事と云めい勿已

享安二年正月吉日

黒木利光書

招あきむ元年三月下旬よりさきより此
 半春あけはのてう秋のりてありけり
 こひりあけさるのりの一めもて春の
 のふたうさゆきあけせ路ふそ目のとまりい
 うもろ春若水う霜はさくやとさあちあけ
 ろあゆくの春若水うやううまへ春若水の
 をもてあすうのあひの春若水うあけりか
 威風凛としてあひのさうさくさくさく
 さうさくさくせきまけをなさうさくさう
 あけりさうやうさうさうの老人め張け

いまとおほせられもけ家をちんり
 とせぬとりさくさくさくさくさく
 まあまうりてさくさくさくさく
 やせといふた
 一れ、の信長をけうけうあさんあ張さ
 こめさくさくさくさくさくさく
 さくさくさくさくさくさく
 こけ小あやうさくさくさくさく

のまとおほせられもけ家をちんり
 とせぬとりさくさくさくさくさく
 さくさくさくさくさくさく
 中せといふた

一れ、の信長をけうけうあさんあ張さ
 こめさくさくさくさくさくさく
 さくさくさくさくさくさく
 こけ小あやうさくさくさくさく

日本
 紀

天
 藏
 冠

御内書

御内書

きりふはるの物語上

一むー天下をおさめたまふ人の内うちりーとう
ちやくなりものもあつて禁わへまわちんよ
うぬとひいてやまの石つきをまつてはもんを
うくはけがみちちあひたまひて是ハあまた
のまをへて下くのぬをへくある取てあひせ
りなき何うへもまのまとおりせられはあを
ちんにうきぬといふまのぬのあははていふ
まのぬてきつとあともりをすせといふた

きりふはるの物語下

一むー天下をおさめたまふ人の内うちりーとう
ちやくなりものもあつて禁わへまわちんよ
うぬとひいてやまの石つきをまつてはもんを
うくはけがみちちあひたまひて是ハあまた
のまをへて下くのぬをへくある取てあひせ
りなき何うへもまのまとおりせられはあを
ちんにうきぬといふまのぬのあははていふ
まのぬてきつとあともりをすせといふた

きりふはるの物語

一むー天下をおさめたまふ人の内うちりーとう
ちやくなりものもあつて禁わへまわちんよ
うぬとひいてやまの石つきをまつてはもんを
うくはけがみちちあひたまひて是ハあまた
のまをへて下くのぬをへくある取てあひせ
りなき何うへもまのまとおりせられはあを
ちんにうきぬといふまのぬのあははていふ
まのぬてきつとあともりをすせといふた

きりふはるの物語上

一むー天下をおさめたまふ人の内うちりーとう
ちやくなりものもあつて禁わへまわちんよ
うぬとひいてやまの石つきをまつてはもんを
うくはけがみちちあひたまひて是ハあまた
のまをへて下くのぬをへくある取てあひせ
りなき何うへもまのまとおりせられはあを
ちんにうきぬといふまのぬのあははていふ
まのぬてきつとあともりをすせといふた

きりふはるの物語下

中井文庫

一むー天下をおさめたまふ人の内うちりーとう
ちやくなりものもあつて禁わへまわちんよ
うぬとひいてやまの石つきをまつてはもんを
うくはけがみちちあひたまひて是ハあまた
のまをへて下くのぬをへくある取てあひせ
りなき何うへもまのまとおりせられはあを
ちんにうきぬといふまのぬのあははていふ
まのぬてきつとあともりをすせといふた



ちくま

上



善太

あめあめおどやうふ
 ねの松ぬいのふあて風あつうふおさま
 ぬれぬあひうりあつうやそのう山城
 乃國よあぶくをし乃ちくまいとてきうの
 金せりし一人あわうの方をひんふ
 何事／＼ふまうせされてをのけう心
 ぬのうきそへちやをわわわわわわわわ
 も更しとて人もよりひせわわわわわわ
 向ふに成うやまひや／＼まうやま

竹録上

あめあめおどやうふ
 ねの松ぬいのふあて風あつうふおさま
 ぬれぬあひうりあつうやそのう山城の國／＼あ
 金せりし一人あわうの方をひんふ
 何事／＼ふまうせされてをのけう心
 ぬのうきそへちやをわわわわわわわわ
 も更しとて人もよりひせわわわわわわ
 向ふに成うやまひや／＼まうやま

うきものまじ

せとく／＼あめあめおどやうふ
 ねの松ぬいのふあて風あつうふおさま
 ぬれぬあひうりあつうやそのう山城の國／＼あ
 金せりし一人あわうの方をひんふ
 何事／＼ふまうせされてをのけう心
 ぬのうきそへちやをわわわわわわわわ
 も更しとて人もよりひせわわわわわわ
 向ふに成うやまひや／＼まうやま

うきものまじ

せとく／＼あめあめおどやうふ
 ねの松ぬいのふあて風あつうふおさま
 ぬれぬあひうりあつうやそのう山城の國／＼あ
 金せりし一人あわうの方をひんふ
 何事／＼ふまうせされてをのけう心
 ぬのうきそへちやをわわわわわわわわ
 も更しとて人もよりひせわわわわわわ
 向ふに成うやまひや／＼まうやま

卷之四

7

うまくとろふたろとろとろの国々

とうとうしのかきうのりけうちや屋は年
 一のふすあまりと思ふたうそうれとこ
 うやすとちや張のきけう又三すあまうり
 さんたひんたいう男たちうりあともちやと
 のきけうは老僧は種々のすうと人を張は
 らんこれとゆるは男う小僧うをうてもあ
 一のほあの中ううそうとしてこふふ
 とふはをうりうりぬいや 老僧にたてて
 せんうをせんたん國うてあまうふた

うんてき
いふ
た

へかへりありけりちやなふ年一
 よもふすまきりとかきこりけり
 へかへりありけりちやなふ年一
 よもふすまきりとかきこりけり

卷之四

くまうし乃おあめりきうちやふ二年のよいいみす
わまりと忍びうろ若僧のとこふやそちやとのミ
きつみ三十わまり威せんたひつをひうろ男三
あまもちやをいさきつらび若僧にれ

伊呂保物語上

第一 本國の事

去程一そりうそりうのうちひびや乃國と名ふと云ふ
ふふわさうまやとひまのわなをそりうのふ
とひふ人わたりたりちひえさうそりうのふ
かやとひえさうまやとひまのわなをそりうのふ
あうへうさうまやとひまのわなをそりうのふ
うれさうまやとひまのわなをそりうのふ
ほううあなまのひゆめをせいひまをけりう
てふとそりうまやとひまのわなをそりうのふ
もれふとそりうまやとひまのわなをそりうのふ

伊呂保物語上

第一 本國の事

去程一そりうそりうのうちひびや乃國と名ふと云ふ
ふふわさうまやとひまのわなをそりうのふ
とひふ人わたりたりちひえさうそりうのふ
かやとひえさうまやとひまのわなをそりうのふ
あうへうさうまやとひまのわなをそりうのふ
うれさうまやとひまのわなをそりうのふ
ほううあなまのひゆめをせいひまをけりう
てふとそりうまやとひまのわなをそりうのふ
もれふとそりうまやとひまのわなをそりうのふ

伊呂保物語下

第一 ありまの事

去程一そりうそりうのうちひびや乃國と名ふと云ふ
ふふわさうまやとひまのわなをそりうのふ
とひふ人わたりたりちひえさうそりうのふ
かやとひえさうまやとひまのわなをそりうのふ
あうへうさうまやとひまのわなをそりうのふ
うれさうまやとひまのわなをそりうのふ
ほううあなまのひゆめをせいひまをけりう
てふとそりうまやとひまのわなをそりうのふ
もれふとそりうまやとひまのわなをそりうのふ

伊呂保物語下

第一 ありまの事

去程一そりうそりうのうちひびや乃國と名ふと云ふ
ふふわさうまやとひまのわなをそりうのふ
とひふ人わたりたりちひえさうそりうのふ
かやとひえさうまやとひまのわなをそりうのふ
あうへうさうまやとひまのわなをそりうのふ
うれさうまやとひまのわなをそりうのふ
ほううあなまのひゆめをせいひまをけりう
てふとそりうまやとひまのわなをそりうのふ
もれふとそりうまやとひまのわなをそりうのふ

伊索保胎下終

伊當保初下經

寬永十六年卯月吉辰

伊
氏
人
子
預
上

第一 平胸のう

[illegible]

伴曹保物語下終

寬永十六年卯月吉辰

大正九年

きとれ地とせとせんとするも下れを
羽衣より万でいまり海せつとより一へ

目れ見てとひあしくなりぬすともうの

きーのひあまういく世をぬらん

世なりとちくくえりつ井て海一とせ

きとくみれ人なりとのさるるとやらんりふ

ついでいせんのかつ力なりふそのそつへきり

をくもやちくつんて何となきそのなりとに

きとのちとせとせん事もあまのいとどの

羽衣より万でいまりまじつとよりうへ

目れとてとひあしくなりぬすともうの

きーのひあまういく世をぬらん

めなりとちくくえりつ井て海一とせ

きとくみれ人なりとのさるるとやらんりふ

ついでいせんのかつ力なりふそのそつへきり

をくもやちくつんて何となきそのなりとに

きとのちとせとせん事もあまのいとどの

羽衣より万でいまりまじつとよりうへ

目れとてとひあしくなりぬすともうの



まのちとせとせん事もあまのいとどの
羽衣より万でいまりまじつとよりうへ

目れとてとひあしくなりぬすともうの

きーのひあまういく世をぬらん

目なりとちくくえりつ井て海一とせ

きとくみれ人なりとのさるるとやらんりふ

ついでいせんのかつ力なりふそのそつへきり

をくもやちくつんて何となきそのなりとに

きとのちとせとせん事もあまのいとどの

羽衣より万でいまりまじつとよりうへ

きーのひあまういく世をぬらん

まのちとせとせん事もあまのいとどの

羽衣より万でいまりまじつとよりうへ

目れとてとひあしくなりぬすともうの

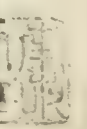
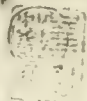
きーのひあまういく世をぬらん

まのちとせとせん事もあまのいとどの

羽衣より万でいまりまじつとよりうへ

目れとてとひあしくなりぬすともうの

きーのひあまういく世をぬらん



世れつゝくをる乃あいにいれりんするふ
 菊山のま花いけき風をさんし東に北に秋
 月ハきやうやまをかくをせんさいの松もふ
 きん乃あやうたふぬれを万代此龍をあよ
 くらせうのうれいあり花やきん花あてうの
 花何にとりあふひありをうり能しまんや
 家もそ大お平乃朝臣佐長天下小とるうし
 國家はあんといふ年久——云々に別安去山
 小をいてふやうやんくおうまへ大石城にて山
 をけくこころあれはらかぬ水乃ふひ金てんふ
 かく天上のまうけりなり玉けうきんふやう

うまつゝくをる乃あいにいれりんするふ
 菊山のま花いけき風をさんし東に北に秋
 月ハきやうやまをかくをせんさいの松もふ
 きん乃あやうたふぬれを万代此龍をあよ
 くらせうのうれいあり花やきん花あてうの
 花何にとりあふひありをうり能しまんや
 家もそ大お平乃朝臣佐長天下小とるうし
 國家はあんといふ年久——云々に別安去山
 小をいてふやうやんくおうまへ大石城にて山
 をけくこころあれはらかぬ水乃ふひ金てんふ
 かく天上のまうけりなり玉けうきんふやう

世れつゝくをる乃あいにいれりんするふ
 菊山のま花いけき風をさんし東に北に秋
 月ハきやうやまをかくをせんさいの松もふ
 きん乃あやうたふぬれを万代此龍をあよ
 くらせうのうれいあり花やきん花あてうの
 花何にとりあふひありをうり能しまんや
 家もそ大お平乃朝臣佐長天下小とるうし
 國家はあんといふ年久——云々に別安去山
 小をいてふやうやんくおうまへ大石城にて山
 をけくこころあれはらかぬ水乃ふひ金てんふ
 かく天上のまうけりなり玉けうきんふやう

世れつゝくをる乃あいにいれりんするふ
 菊山のま花いけき風をさんし東に北に秋
 月ハきやうやまをかくをせんさいの松もふ
 きん乃あやうたふぬれを万代此龍をあよ
 くらせうのうれいあり花やきん花あてうの
 花何にとりあふひありをうり能しまんや
 家もそ大お平乃朝臣佐長天下小とるうし
 國家はあんといふ年久——云々に別安去山
 小をいてふやうやんくおうまへ大石城にて山
 をけくこころあれはらかぬ水乃ふひ金てんふ
 かく天上のまうけりなり玉けうきんふやう

信長記卷第一

興亡

大田和泉守牛一輯錄
小瀬川庵道喜居士重撰

夫以治天下二道アリ親賢遠姦是明而已治天下二法アリ賞二信アリ罰二公アリ是斷而已治天下二本アリ禮樂教化是順而已明則君子進而小人退斷則功勳罪ノ懲ル事アリ順則萬事理テ人心悦ヒ天下大ニ和ス三者之要ハ身ニアリ身端シク心誠ナシハ不令而行ル故唐虞二代之治純禮樂教化ヲ用テ大ニ世ニ行ル故不言而信不怒而威無爲而治ル其衷及テハ夏ハ妹喜ヲ以シ商姐ヒシ以テ周ハ褒姒ヲ以テス是佚欲之人ヲ亡ノ百

者有シ共告知事ヲ知リシニ依テ早ク亡シトソ有僕ハ中居ニ爲メ天下國家有九經曰敬身也尊賢也親也敬大臣也體群臣也子愛民也來百工也柔遠人也懷諸侯也トナリ豈其不慎乎

石ノ勳條ヲ以考ルニ天命ニ不應事有則必治世不父侯トコノ譽位唯國也富強ヲ以利トスル事ナカレ有仁義而已上下有仁義則大利在其中故湯ハ方五十里ヨリシテ而一商ヲ征スル則東民怨之曰何復我闘乎ト而メ其世六百四十餘年ミタルス兆民其澤ヲ蒙リシトコソ

信長記卷第十五終

于明元和八壬戌曆三月吉辰

信長記卷第一

興亡

大田和泉守牛一輯錄
小瀬川庵道喜居士重撰

夫以治天下二道アリ親賢遠姦是明而已治天下二法アリ賞二信アリ罰二公アリ是斷而已治天下二本アリ禮樂教化是順而已明則君子進而小人退斷則功勳罪ノ懲ル事アリ順則萬事理テ人心悦ヒ天下大ニ和ス三者之要ハ身ニアリ身端シク心誠ナシハ不令而行ル故唐虞二代之治純禮樂教化ヲ用テ大ニ世ニ行ル故不言而信不怒而威無爲而治ル其衷及テハ夏ハ妹喜ヲ以シ商姐ヒシ以テ周ハ褒姒ヲ以テス是佚欲之人ヲ亡ノ百令不足所

信長記卷第一

興亡

大田和泉守牛一輯錄

小瀬川庵道喜居士重撰

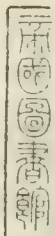
夫以治天下二道アリ親賢遠姦是明而已治天下二法アリ賞二信アリ罰二公アリ是斷而已治天下二本アリ禮樂教化是順而已明則君子進而小人退斷則功勳罪ノ懲ル事アリ順則萬事理テ人心悦ヒ天下大ニ和ス三者之要ハ身ニアリ身端シク心誠ナシハ不令而行ル故唐虞二代之治純禮樂教化ヲ用テ大ニ世ニ行ル故不言而信不怒而威無爲而治ル其衷及テハ夏ハ妹喜ヲ以シ商姐ヒシ以テ周ハ褒姒ヲ以テス是佚欲之人ヲ亡ノ百令不足所



前關白秀吉公御檢地帳之



○五畿内



二十二萬五千二百六十石

山城

四十四萬八千九百五十石

太和

二十四萬二千百五十石

河内

十四萬千五百十石

和泉

三十五萬六千七十石

攝津

朝鮮國御進發之人數帳

○肥前國名護屋在陣衆

一萬五千人

武藏大納言殿

一萬人

太和中納言殿

八千人

加賀宰相殿

三千人

穴津中將殿

千五百人

結城少將殿

政要抄

小瀬甫庵道喜集

楚澤問仁子曰愛人問知子曰知人樊遲未達子曰舉直錯諸枉能使枉者直樊遲退見子夏曰卿也吾見於夫子曰知子曰舉直錯諸枉能使枉者直何謂也子夏曰富哉言乎有天下選於衆舉不仁者遠矣湯有天下至於舉伊尹不仁者遠矣伊尹湯之相也不仁者遠矣人皆曰而爲仁不見有不仁者若其遠去爾所謂使枉者直也子夏蓋有以知夫子之爲仁知而言矣子路問政子曰先之勞之註蘇氏曰凡民之行以身先之則不令而行凡民之事以身勞之則雖勤不怨註蓋曰無倦註吳氏曰勇者喜於有爲而不能持久故

寬永行幸記

人王百九代今上寬永皇帝陛下欽明文思機神獻哲而聖敬日躋天德淵廣矣

清和天皇二十代嫡裔

大人前將軍右相府公掌四海胃八荒建故仁風所及四夷八蠻解辦來享異域遠方捧筐入貢內專藝倫之道外施六三之功矣今嗣大人源君當元亥之年拜將軍之宣下而兼任內相府忽受天下讓以安國家

世の中
人の心
れ
多々小
さむも
えハ
一川
白糸



銀兩替り事



銀兩替り事 九百九十目より時 丁銀

より久の時より内三分割てたし
まの故より丁銀打たれど中より

○丁銀九百二十分を分よかといふ

法より十各と照は内三分割て

分りて九分七厘を是とす

九百三十目よりかくふ之



三分割内ハ九七とかる算

我とて取下一下三てわれあり



三おまりをとりて取下一下三バ

け

内ハ九七とかる之

七日 樂

方いり

多んきり

まんきり

せういも

あきて

あうきう

あうきう

せんあうき

地下六人

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

あうき

ひろげ大納言

くろやま



うへん九太

くろやま

目野大納言

くろやま



ひろげ大納言

くろやま

うへん九太

くろやま

目野大納言

くろやま

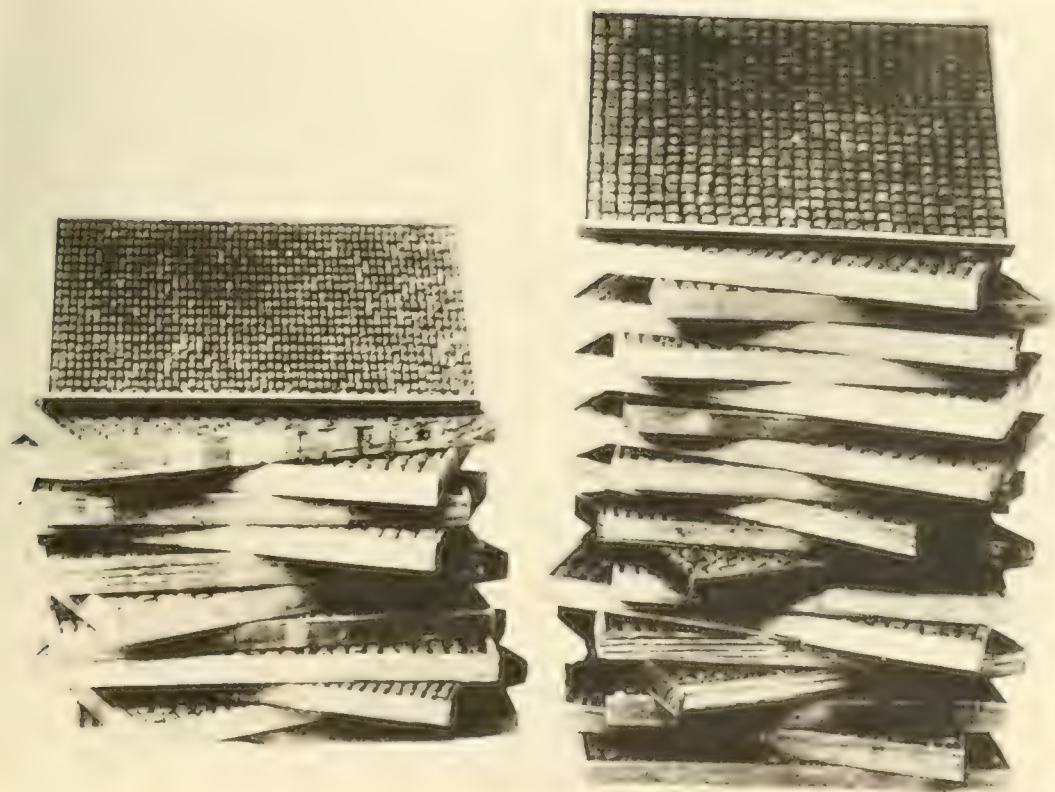
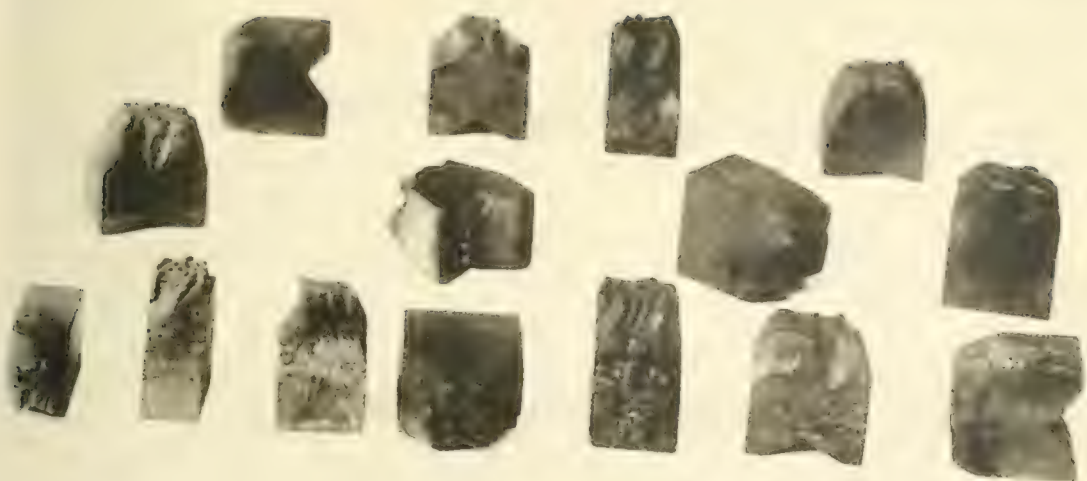


之 此 三 八 大

五 美 名 渠

五 美 名 渠

此碑係明正德六年（一五一五）所立，碑文係明倫彙編家範典卷之五，其文略謂：「夫為人父者，當教其子，為人子者，當敬其父，此乃天經地義，不可磨滅之理也。竊惟我朝設學，以明倫為本，而教養之道，尤在於家範。故特立此碑，以垂永久之訓。凡我士民，當共知所勸懲，庶幾家範日彰，而國風丕振。」



XOCVIEN NO CRATIO.

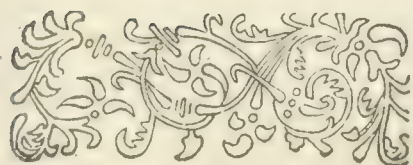
¶ Deus Pater, Filio, Spiritu Sancto, mitçu no Person,
gōitai no Deus, vareta to cō no vonjqi no vye ni
B. nqam to tenaye tan dō yō ni to taloni taten a-
quru. Amen. Pater noster ippen.

XOCVGONO ORATIO.

¶ Deus no Gloua iyamaxini nax naxi, ninguen
ua bujini lavaye, ximin ua sutai no qetacu ni itaru
yōni tanoni taten atquru. Amen. Pater noster ippē.
Yoyo uo casareti xinra manzō uo vesan e tamai,
banji canai tamō Deus, vareta cōmuri
tatematquritaru yorezzu no goven
xō no von rei uo naxi tatematquru.

Amen.

FINIS.



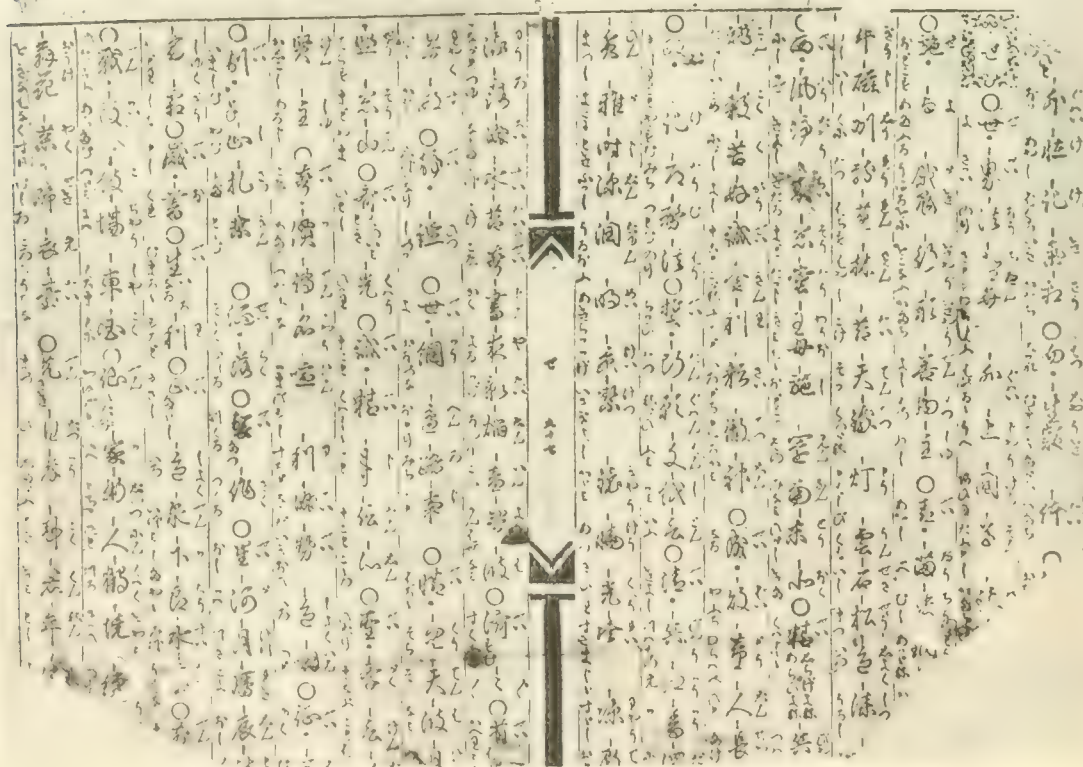
MOROMORO

no Christan xirubeqi giō
giō no coto.

¶ Daichi. Facari naqi von chiye no minamoto, ban-
ji canai tamō von aruji Deus gōitai nite maximafu
coto. e mo vonar ni Deus na ni tocoro yon, tenchi
to, tonofoca arito arayuru mono uo tqucari araxe
tamo macoto no von aruji nite maximaxeba, yo-
rozzu no gōfacu no mono uo voboximefu mamani,
go xindai nataturu toyi coto.

¶ Dama. Cano von aruji Deusua Padre to, Filio to,
Spiritu Sancto to mōxi tatematqurite, Persona ua mi
tq nite maximaxe domo, Substantia to mōlu goxō-
fai ua taca gōitai nite maximafu nari. Xicarcba,
Padre Deu nite maximaxi, Filio mo mata Deus ni
te maximaxi, Spiritu Sancto mo Deus nite maxi-
ma edono, Deus tandai nite ua maximafazu, ta-
da gōitai nite maximafu coto.

¶ Dama. Deus Filio ban nin no toga uo vocuri ta-
ma, goxō no talucaru michi uo vox ye tamauan
tani.



未だ此處より人々を去る
の意の儀あり

神武天皇千五百九十九年

癸巳年正月卜日

上巻第一卷の目録

[illegible]

六平紀校書卷之一

永平中胡人豐の初神皇天皇より千五百の市後神皇の元
 豐の神皇に於て我をねばる年の時と云ふ所なりは時と云ふ
 か小年と云ふ所の事と爲るべき事と爲て一冊と云ふ事を御
 天と野一撰成たて和をよと云ふて四十餘年一人も合は
 ざる事と爲す万民平定と爲る所なり是を御成て自らに
 一冊一夕の夢に記を元暦年中小治意の中大將永朝の神
 皇と云はれしと云ふ所の時後白河院親政く御小六十六年圓成
 是神皇の御事なりと云ふ我靈始て世に記をよと云ふ一冊と
 云ふ御成の事思ふ所なり永朝永成思ふ所なり永朝永成思

六六紅旗書畫卷二 目錄

APROVAÇÃO.

Visto o Livro do Tadiquis não tem culpa porque
foi do deus imprimir.

Manuel Tadiquis.

Visto e confirmado deus Linnia para se poder
imprimir. O Bispo de Iappam.

一 人 我 德 伯 利 家 付 爲 序 行 事
二 八 基 家 付 德 家
三 一 家 家 二 德 家 付 行 事
四 依 的 德 家 付 行 事
五 中 家 付 行 事
六 先 家 付 行 事
七 的 院 家 付 行 事
八 空 家 付 行 事
九 中 家 付 行 事
十 中 家 付 行 事
十一 中 家 付 行 事
十二 中 家 付 行 事
十三 中 家 付 行 事

をうちぎえの掬けやうとびやうぢやま
をよてんあやますむふけうけのり
をきびやうぢやのあんいさんをきき或いとき
をうちぎえをさげくはためをてめてれあま
合はるるりおきあはれにてえあね人の
はままたすうふ位とあすりあらびをき
功りとまいたう所とあふりえ又ふりき
てう氏の清きをば一スりの片どめ掬を
いさうあはすいあまやくてあすきまは
うらとまきの清のかあまをあまのせす
あまを人目の片に科を救へんあまは
まぜすまゝ——ど二つの片をさぶめまゝ

AD SACRAMENTA

Ecclesiae ministranda.

DE SACRAMENTO BAPTISMI.

Canones, et documenta administrationis sacramenti Baptismi.



Primum^a omnium sacramentorum locum tenet sacramentum Baptisma, quod vite spiritualis ianua est. Per ipsum enim membra Christi, ac de corpore efficitur Ecclesiae: ex cuius per hominem mors introierit in uniuersos, nisi ex aqua, et spiritu renascerimur, non possumus in regnum caelorum introire.

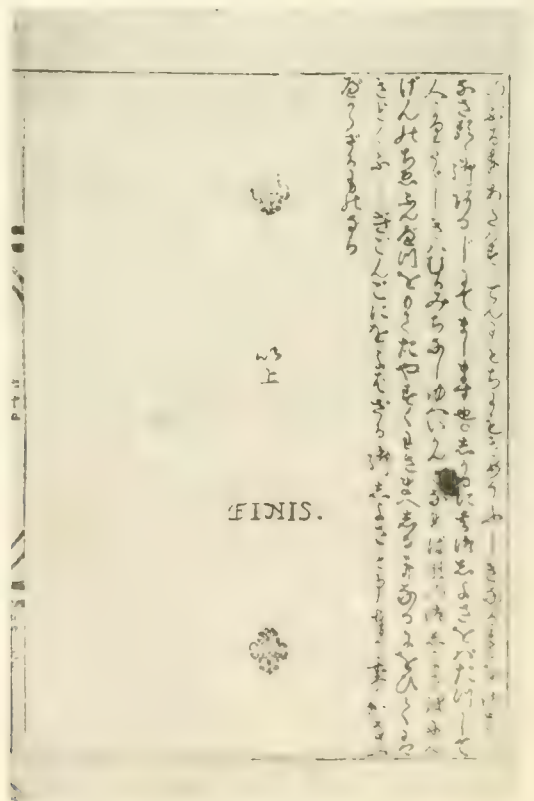
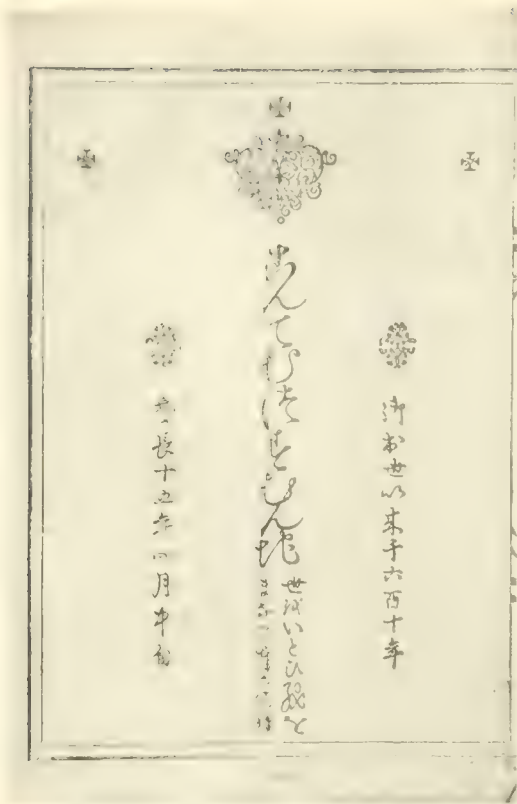
2. Baptismi^b effectus est remissio omnis cul-pae originalis, et actualis, omnis quoque poenae, quae pro ipsa u. pa debetur. In le baptizati, si moriuntur, antequam culpam aliquam committant, statim ad regnum caelorum, & Dei uisionem perueniunt.

3. Baptismus, cum in eo character animae imprimitur, iterari^c non potest. Rebaptizans animam, & rebaptizatus irregularitatem incurrit.^d

a Concil.
Flor. in
decret.
Eug.

b Ibidē.

c. Conc.
Tridet.
Ses. 7.
Can. 9.
de Sacr.
d. Cap.
2. de a-
pstat. et
Cap. eos
de Conf.
d. 4.



巻第一の目録

- 第一せういのみえふさすといひぬとよふびなうす 一
- 第二世をわすれなうぬ人のかくるんのみとるさすあゝびよとく
ふうさぬことのあくりんといひまぞといふ 二
- 第三あんど川のなうへのも 二
- 第四うろのすにけんまよとくいふさす 三
- 第五たのどささやうんとよむ 五
- 第六みちちあるのぞとれ 五
- 第七びやくれたのもきんとけうまんとのぞくさす 六
- 第八かざらに人はあさむさす城のぞくさす 六
- 第九とばとをさすまどさす 七
- 第十ぶー城もとむさすあふ善のみちふささへゆくかげさのま 八
- 第十一きにさうふあざとこらゆりにさくふさす 九
- 第十二てんぬまん城ふせぐ 九
- 第十三ちやさいとのぞくさす 十一
- 第十四うあわでとくちのけ大切ふむつれていふとささのす 十二

附圖變更訂正表

○第五圖慶長勅版勸學文は、神田喜一郎氏藏本を早稻田大學藏本の寫眞と代へる。(本文、六八二頁及び一八〇頁參照)

○第五八・五九圖直江版文選は、高木文庫藏本に據る。本文、二六八頁二行目の帝國圖書館の*を除去する。

○第一四〇圖、夢中間答、大字本の所在を掲げた本文三四六頁五行目中、石井光雄氏藏本は、小字本(ハ)第三種に屬するものであるから、茲に訂正する。

○第一五八圖四河入海は、蓬左文庫藏本を靜嘉堂文庫藏本に代へる

○第一六二圖周易も右に同じ。

○第一九六圖史記第二〇八圖施氏七書講義は、蓬左文庫藏本を安田文庫藏本に代へる。

○第一九九圖後漢書は、成篋堂文庫藏本を高木文庫藏本に代へる。

○第二一〇圖新增應鶴方は、久原文庫藏本を安田文庫藏本に代へる。

○第二二三圖補註蒙求は、東洋文庫藏本を高木文庫藏本に代へる。

○第二七五圖口傳書は、高木文庫藏本を安田文庫藏本に代へる。

○第二九一圖謠本嵯峨本第三種(北野神社藏)は、同第六種本(安田文庫藏)と代へる。

○第三六九圖寶物集は、成簀堂文庫藏本を東京文理科大學藏本と代へる

○第三八一圖清少納言枕草子十三行本(イ)種は帝國圖書館藏本、第三八一圖同(ロ)種は靜嘉堂文庫藏本と改める。本文、五二三頁八行、靜嘉堂文庫藏本は同頁十行目の下(ロ)種に屬する

○第四〇二圖平家物語寛永元年刊本は、久原文庫藏本を安田文庫藏本(本文補訂篇七、七頁)に代へる。

○第五〇二圖續錦繡段は、東洋文庫藏本を高本文庫藏本に代へる

○第五一一圖卮言抄、第五一九圖保曆間記は、蓬左文庫藏本を安田文庫藏本に代へる

○第六〇七圖フロスクリ、第六〇八圖片假名本は除き、第六〇九圖、こんてむつすむん地を第六

〇七圖とする。又、第六〇五圖太平記抜書は第六〇四圖に、第六〇四圖のどちりいなきりしたんは第六〇五圖と入れかはる。

なほ本文印行後、又は印行中に、研究資料たる古活字版其の他の所藏者の名義が變更したのも少くないが、其れ等は改めず、原の儘に従つた。其の主要な二三の例を挙げると、故内野峻亭翁の文庫が散じ、「久原文庫」は「古梓堂文庫」と改り、松井簡治博士の藏書はすべて靜嘉堂文庫に、又、高本文庫の古活字版の一半は安田文庫に移つた等である。

本文正誤補訂(追記)

本文、補訂篇校了後、發見した誤謬を左に補訂する。

○七〇頁四行七字目「困」ハ「因」ノ誤。

○一四二頁十一行、伊藤長藏氏ハ飯島幡司氏ト訂正。

○三三三頁三行「法華玄惑」ノ「玄」ハ「去」ノ誤

○三一九頁上欄「第一〇九圖」ハ、三一八頁上欄「第一〇八圖」ノ傍ニ移リ、脱漏シタ「第一〇七圖」ヲ其ノ跡ニ加ヘル。

○五八一頁十二行上欄ニ「第五一六圖」ヲ加ヘル。

○索引七頁上段三行目ニ「開元天寶遺事 一九六・三八四」ヲ加ヘル（コレハ「天寶開元遺事」ト誤リ、「テ」部ニ入ル。）

○索引一〇頁上段十三行目ニ「君臣圖像 三八二」入ル、（索引ニ脱漏）

文祿五年刊證類備用本草序例の發見

なほ本文全部の印行を終つて後、栗田元次氏より文祿五年如庵宗乾刊行の證類備用本草序例一冊の新發見を示教せられた。同氏の御好意に甘へ調査をさせて戴いたが、之は古活字版冊

究上極めて有益な新資料であるから、他日の補訂を俟つに忍びず、たま／＼圖版印行に着手する直前であつた爲、若干さしくりを行つて、第二百二十五圖(圖版五四頁)の次に「補遺」と名づけ唯一の例外として之を收めた。

この書は、卷首に序十一葉、本文は九十二葉(丁數植版は通算)で、四周單邊、縦七寸五分、横五寸二分半、八行十七字、注雙行、大型活字(陰刻活字を交じゆ)を用ひ、卷末に「扶桑國平安城如庵宗軋模行」の木記と「惟文祿第五龍集采兆澁灘日南至」の刊記とがある。如庵宗軋は慶長四年に元亨釋書を、同九年に徒然草抄を刊行してゐる他、五十川了庵の太平記刊行に其の大型活字を貸與したりしてゐて、醫師であらうかと推定してゐたが、(本文、三三〇頁)この本草書の出版を行つてゐる點は其の推定に裏書を與へるものと思ふ。本書の活字は元亨釋書以下のものと全く同種であつて、如庵宗軋が、まづ新雕の活字を以て本書を印行し、後に之を襲用して元亨釋書以下の出版を行つたものである事が明確になつた。本書の印刷面を案ずるに、其の使用の活字には未だ磨減が見えてゐないから、恐らく新たに使用しはじめたものと思へてよいと思ふ。そして慶長四年の元亨釋書との間にはなほ何か印刷を行つてゐた様に推測せられる。

本書の發見はもとより我等の測らざるところであつた。故安田大人が、稀覯の善本にあはれるたびに「まだ何が出てくるかわかりませんね。」と語られたことが、今またしみじみと思ひ出される。この書の發見が一年前であつたならば、如何ばかり文祿版の新發見を喜ば

れ、又、火後の栗田氏の書庫の充實を祝福せられたことであらう。(丁丑中秋、甫の夜記する。)

醫德堂守三の經歷(本文二三頁参照)

醫德堂守三が醫書其の他の出版事業につとめた事は明らかであるが、其の傳歴は在來全く不明であつた。然るに最近、元和二年刊行の古活字版醫學正傳を見ると、之は慶長八年醫德堂守三の刊本に基いて後に重版を行つたもので、其の原跋をも附載してあるが、之に據ると、守三の父は、濃州の人、齋藤松印(松印軒、玄忠居士)といひ、延壽院玄朔の門弟、守三は吉田意庵(宗恂)の門人であつたが、父の校刊事業を扶けて共に活字印刷につとめたものである事が判明した。

飯島藩司博士藏 吉利支丹版どちりいな・きりしたん(本文一三頁参照)

本書は今の世に知られた唯一の傳本で、然もこの種の大型平假名交りの活字を用ひて印行された吉利支丹版は、我國には他に存在しない。羅馬バルベリニ文庫所藏のどちりいな・きりしたん(本書と内容異なる)が之と同種の活字本である。本書は原來飯島博士の留意が動機となつて先年我國に回收せられたものであるが、故あつて、暫く伊藤長藏氏の許に留つてゐたものであるといふ。伊藤氏の許にあつた時、既に新村出博士に據つて全文が謄字されてゐるが、典義散語所收先年飯島博士に披見を許されたので、茲に其の大概を記する事とする。

本書の料紙の大きさは、縦八寸二分、横五寸六分程で、やゝ厚めの楮紙を使用してある。凡て二十五枚で、二箇處に紙縫の原の下綴(したうち)がある。其他に絲の綴目の跡が残つてゐるから、原は所謂袋綴になつてゐたと思はれるが、長く西歐の地に傳つた爲、今は西歐風の装幀に改められて、羊皮の包背装をなし、副葉(あそび)に二枚の洋紙を添へてある。(之は改装の際添附したものであらう)。其の副葉と本文との間になほ一葉の和紙があつて、之にペン書きのホルトガ
ル文字の識語(邦譯すると「此天國の梯子たる教理書は彼の家をおこし、之を與へたエヴオラの
大司教で、キリストに於て最も尊敬すべきブラガンサのテオトニオ師に贈呈せられたもので
ある。」の意であるといふ。)が記るされてゐる。之は本文より薄い別紙であるが、或はもと本
書は假綴で、本表紙が無く、この一葉が假綴の表紙の役目をしてゐたものかと思はれる。
版心には丁數を植版するのみで、書名の略記もなく、又巻頭・卷末等にも大題、其の他書名の文字
は見當らない。每半葉十二行十九至二十二字(不等詰)。殆ど行間が無い様に見えるのは、植版
に際して行間の込めものを使用してゐないか、若しくは使用しても極めて細いものを用ひた
爲であらう。濁點附活字で、二字連續の活字をも混用してゐる。字面の高さは、約六寸五分で
ある。印刷面を案ずるに、細い字と太い字とが識別されるが、細い分は新刻、太い分は度々使用
して磨滅を來してゐるものであらうと思ふ。

附圖所收書目五十音別索引

阿彌陀經秘直談鈔	一五	韻鏡	七
鴉鷺合戰物語	一六	韻府群玉	八四
間の本	一七	(ウ)	
秋夜長物語	一八	うづぼ物語	一一九・一二〇
東鑑	一九	うらみの介	一七九
安樂集	二〇	宇治拾遺物語	一二五
(イ)		謠抄	一六〇・一二二
伊勢物語	二一	謠本	九四・一〇二
伊勢物語聞書(宵聞抄)	二二	雲門匡眞禪師廣錄	四〇
伊勢物語闕疑抄	二三	雲林神鼓	五二
伊曾保物語	二四	(エ)	
醫學正傳	二五	榮華物語	一三三
十六夜日記	二六	延壽撮要	五一
一休水鏡	二七	鹽山和泥合集	六〇
		(オ)	

大鏡	三三	勸學文	三
大坂物語	一八七	觀世流謠本	九四・二〇二
王澤不渴抄	四四		
應仁記	一七一	(キ)	
鷹鶴方	八〇	ぎやどぺかどる	一六
(力)		義經記	一四
花鳥風月	一七	昨日は今日の物語	一七
花傳書	一五・二六〇	行事鈔	四
科註天台四教儀	四一	教誡新學比丘行護律義	三六
科註妙法蓮華經	三九・四〇	錦繡段	一・三三
驪騮全書	二〇	錦繡段抄	一六・二六四
晦菴先生語錄類要	七九	(ク)	
開心鈔	四四	久世舞	一〇四
開元天寶遺事	六六	口傳書	九
解紛記	九六	公事根源	一〇六
格致餘論鈔	五四	俱舍論頌疏	九
鶴林玉露	八二	黑谷上人傳繪詞	九
寬永行幸記	一八・二九二	君臣圖像	六
管蠡抄	一五	群書治要	七

(ケ)

華嚴五教章

戲言養氣集

慶長九年平假名活字曆日

月輪觀秘釋

元亨釋書

源氏小鏡

源氏物語

源氏物語紹巴抄

源信枕雙紙

源平盛衰記

(コ)

こんてむつす・むん地

五家正宗贊

古今韻會舉要

古今十九史略通考

古注千字文

古筆拾葉抄

三九

一九〇

九四

四四

二七・五〇・六〇

一〇一・一一・一二

二二〇

二二三

三五

二二七

一九九

七五

七四

七七

八五

四四

古文孝經

古文尙書

古文眞寶(前集)(後集)

古文眞寶抄

胡曾詩註

後漢書

御成敗式目抄(貞永式目抄)

碁經

語園

孔子家語

孔子通紀

江湖風月集略註

孝經大義

皇朝事實類苑

(サ)

サカラメント

左大將六百番歌合

左傳(春秋經傳集解)

沙石集

五・二五・七〇

六七

九二・九三

五五

八八

二六

一〇・五・一〇六

二三

一六六

九

六六

九二

七〇

六

一九九

一五二

六六

二七・二七

狭衣物語

二三・三四

三體詩素隱抄

六

三略

二

山谷詩集註

九

殘儀兵的

九

(シ)

しつけかた

一〇八

氏族大全

八四

史記

六

四河入海

五

四十二の物語

一七

四書

四

四生の歌合

一五

至寶抄

一五・一五

自讃歌注

一五

卮言抄

一七

事文類聚

八

七書

一四

清水物語

一七五

釋迦の本地

一七

守護國界章

四一

授決集

四二

聚樂物語

一六

儒醫精要

四

十九史略通考

七

十四經發揮

七

十八史略

二〇

周易

七

周易傳義

一六

拾芥抄

一六

脩華嚴與旨妄盡還源觀

四〇

聚分韻略

一五

集解要文

四二

春秋經傳集解

六

女訓集

一八

女訓抄

一八

助顯唱導文集

四九

書札禮事

五

諸尊表白鈔(表白集)

四

小學集說	七九
匠材集	一五
呂黎先生文集	八七
尙書	六七
尙書抄	三三
性靈集	五九
邵康節先生心易梅花數	八
承久記	一六・一七〇
貞永式目抄（御成敗式目抄）	一〇五・一〇六
貞觀政要	一〇・七七
城西聯句	九三
淨瑠璃物語	一七二
祥刑要覽	八〇
象戲馬法	一二三
證類備用本草序例	四
職原私抄	一〇六
職原抄	五八・四
新學行要抄	四
新古今和歌集	一四九
新撰犬筑波集	一五・一五八

附圖所收書目五十音別索引（ス、セの部）

新增醫方大成發提	五三
塵劫記	一九〇
(ス)	
隨葉集	一五三
住吉物語	二四
(セ)	
世諺問答	一〇六
施氏七書講義	七九
政要抄	一八九
清少納言枕草子	二七・二八
說文解字篆韻譜	七五
千字文（古注）	八五
仙傳抄（花傳抄）（仙傳書）	一〇
先代舊事本紀	一〇六
前關白秀吉公御檢地帳之目錄	一八九
剪燈新話句解	八四
剪燈餘話	八四
撰集抄	一〇・二六

選擇傳弘決疑鈔

四七

禪林類聚

八八

(ツ)

素問入式運氣論奧

五三

曾我物語

一四四

莊子虞齋口義(句解南華真經)

八六

莊子抄

四四

續錦繡段

一四四

續錦繡段鈔

一四四

(タ)

大學

四三

大學抄

三三

大しよくわん

一七六

大乘起信論

五九

大藏一覽集

一六

大藏目錄

三三

大日經開題

四四

太平記

一五・一七九・二四二

太平記賢愚抄

八六

太平記抄

一四四

太平記抄音義

一四四

太平記拔書

一九六

泰定養生論

五五

竹取物語

一四四

(チ)

ぢんてき問答

一七九

竹齋

一七九

中庸

四三・三七

中庸抄

三三・六四

朝鮮國御進發之人數帳

一八九

長恨歌傳

八九

長恨歌抄

六五

勅撰名所和歌抄出

一五二

(ツ)

徒然草

一〇一・三〇

徒然草(壽命院)抄

五〇

(テ)

帝鑑圖說

天正記

天台四教儀集解

天台四教儀集註

天台名目類聚鈔

(ト)

ドチリイナ・キリシタン

東垣先生十書

東坡先生詩

棠陰比事

(ナ)

中臣稜

南浦文集

難經捷徑

難經本義

(ニ)

二十三問答

日本書紀

日本書紀抄

日本書紀神代卷

日蓮上人註書讚

新田左中將義貞軍記

(ネ)

年代紀略

(ノ)

信長記

(ハ)

白氏文集

花の傳書

(ヒ)

百官略(書札禮事)

附圖所收書目五十音別索引

(テ、ト、ナ、ニ、ネ、ノ、ハ、ヒの部)

百人一首

一〇四

保曆間記

一六九

百人一首宗祇抄

一五〇

法華經傳記

二六・四

百喻經

三四

法華經文字聲韻音訓篇集

四三

百聯抄解

九三

補註蒙求

一九・二・八三

表白集 (諸尊表白鈔)

四四

籠篋內傳金烏玉兔集

八一

平假名活字曆日

九四

方丈記

一〇・二三

(フ)

武家諸禮集

一〇七

法華玄義序

一八

佛祖歷代通載

三

法華疏證

三

分葉抄

一五四

發句帳

一五七

(ハ)

平家物語

三八・二三・三四・三六

(マ)

本朝文粹

一六二

平治物語

一六

舞の本

九・二・七六

遍照發揮性靈集

五九

枕草子

二七・二六

辨慶物語

一六

增鏡

一三

(ホ)

保元物語

一三七・二六

鞠の書

二〇

一四九

萬葉集

滿仲

九五

蒙求

一九二〇・八三

(ミ)

蒙求抄

六四

見咲和歌集

一五〇

文選

二六

水鏡

一三三

(ヤ)

九四

(ム)

八嶋

無言抄

一五四

八雲御抄

一四

無量義經鈔

一五四

大和物語

一七二・一八

夢中問答集

六二

大和言葉

一五

(メ)

(ユ)

めのとのさうし

一〇九

維摩詰所説經(大海版)

四九

明徳記

一七〇

(ヨ)

(モ)

吉野參詣

一四八

漢鹽草

一五五

義經東上り

一七六

毛詩

六

(ラ)

毛詩抄

三四

禮記

六九

孟子

四七・七四

落葉集

一九五

(リ)

六 籍

龍龜手鑑

二・三

七

(ル)

類字名所和歌集

一五二

(レ)

冷齋夜話

八二

列子鷹齋口義

八六

連歌至寶抄

一五・一五六

(ロ)

老子經

八六

老子鷹齋口義

八七

六帖要文

四三

論語

四・四・七・七一

論語抄

三二

(ワ)

和歌題林抄

和玉篇

和風安心抄

和名集並異名製劑記

倭漢皇統編年合連圖

倭名類聚鈔

一五

三九

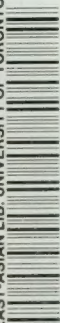
三三

五三

二六

一五

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03190 9336